

入貢と貿易

勘合符

輸出入品と利益

貿易港

高麗と我
國との關係

たのも偶然でない。明より見れば日本進貢船たる遣明船は、三艘乃至十艘に、將軍よりの方物の外、公方様御商賣物即將軍の商品及び寺院諸侯等の貿易品を満載して行つたから、實は一種の官營貿易に外ならなかつた。當時一般の貿易船は、明より送つた勘合符を幕府から貰つて行つて、これがないと海賊船とせられた。勘合符は日字號・本字號各百枚と、底簿各二冊で、底簿各一冊は明の禮部にあり、日字號百枚明の禮部にあれば、本字號百枚と日字號の底簿は我幕府に送られ、本字號の底簿は福建布政使に置き、互にこれを照應することになつて居た。當時の我輸出品は銅・硫黃・刀劍・蒔繪・屏風・扇等で、輸出品は銅錢・生絲・絹織物・藥・書籍・書畫・骨董等で、その利益は五倍乃至十倍に達したといふ。これ幕府の貿易に努め、倭寇の猖獗だつた所以である。貿易港としては、彼は寧波であり、我は初兵庫・博多・坊津・安濃津が主であつたが、後には兵庫に代つて堺が盛になり、博多・坊津に代つて平戸が起り、安濃津は地變のため港の價値を失つたから、堺・平戸を第一とするに至つた。

高麗も倭寇の害を受くること甚しく、殊に國勢傾いてこれを防ぐことが出来ないため、正平二十二年に、元の中書省の牒と共に國書を齎らしてその禁壓を請うて來た。この時は義詮より朝廷に奏し、朝廷は書辭無禮を名とし返書を與へぬことにしたが、實は西國は征西府の勢力盛なため幕府の力で取締ることは不可能であつたためである。その後も屢禁壓を請うたが要領を得ず、倭寇の勢益盛になつ

李成桂の
倭寇策

對馬と朝鮮

應永の外寇

た際、李成桂が出て大に倭寇を破つて勢力を得、遂に元中九年南北兩朝合一の年高麗に代つて朝鮮を開いた。彼はこの年以來屢使を來朝せしめて、倭寇を禁ぜられんことを請ひ、幕府では之に對して高麗版大藏經を求め、又寺院建立の奉加を募ることが多かつた。朝鮮も義持が大藏經の版木を請求した時は、唯一本祖宗から傳ふる所であるからとて應じなかつたが、其他は幕府のみならず、大内氏・九州探題澁川氏を初め、西國諸將の使をも優待し、その要求にも應じ、不利な貿易をも許して倭寇を免れようとした。對馬は國小く地利乏しいため、人民は朝鮮沿岸で貿易漁業に従事するもの多く、宗氏も朝鮮から年々穀物の補給を受けて居た程で、彼は慶尙道の屬島視して居たが、倭寇の朝鮮を侵すものは對馬を経るが常であつたため、彼はこれを倭寇の巢窟の如く考へて居た。然るに應永二十六年倭寇が大舉して支那へ向つたのを見て、朝鮮はその間に倭寇の本據を覆さんとし、二百餘艘一萬七千餘人を以て、不意に對馬に襲來した。對馬では事の意外に出たため、船の焼かれたのも少くなかつたが、守護宗氏の防戦によつて撃退せられたから、幸大事に至らなかつた。これは一時蒙古襲來として傳へられ京都を騒がせたに拘らず、日鮮國交上には何等の影響をも與へなかつた。朝鮮は屬島視せる對馬を討つたので、我國と戦ふ意志は固よりなかつたし、對馬も朝鮮貿易は死活問題だから、程なくして貿易關係を復活したのは止むを得ないが、幕府が全然これを不問に附したのは、國家的觀念の有無を疑は

朝鮮に於ける倭寇の衰微

對馬と朝鮮との條約

朝鮮の貿易港

琉球との關係

しめるもので、その通交の私的性質は此所にも曝露して居る。朝鮮のこの舉は倭寇掃蕩には何等の功もなかつたが、この頃から倭寇の禁壓を幕府に請ふの無意義を悟り、一面國內の防備を修めると共に、渡航者を優遇して歡心を求め、又宗氏及び西國の諸將を籠絡して、これを取締らしめたため、朝鮮に於ける倭寇は漸く衰へた。彼は更に永享十年には日本よりの使節は總て皆宗氏の文引紹介によらしむることとし、嘉吉三年には、宗氏と癸亥條約を結び、宗氏の歲遣船は五十艘とし、その他特別な必要の際の特送船及び宗氏一族の出す船數を定め、朝鮮より米二百石を給することとしたが、永正九年更に壬申條約を結び、歲遣船及び給米を半減するに至つた。當時の貿易港は釜山浦・蔚山の鹽浦、及び熊川の齊浦の三浦で、此所に宗氏の使館があり、邦人の居留するものも少くなかつた。

琉球は日支兩屬の形で、共に入貢して貿易の利を計つたが、幕府はこれを島津氏に附し、島津氏をその守護に任じたから、琉球は年々薩摩へ進貢船文船を出したが、兵庫・堺等へ來つて、幕府へ方物を献じ、貿易を行ふことも少くなかつた。

時勢と文化

第三十三章 足利時代の文化

足利時代は大體に於て鎌倉時代の延長に過ぎないが、久しい間の南北の抗爭は、公家を一部武家化せしめた上、幕府の京都に設けられたことは、やがて武家の公家化を來たし、遂に公武の混淆を生じ、更に下層階級の擡頭は、下剋上の風潮となり、混亂動搖に終始した時代であつた。文化に於てもこの傾向は同様で、大體鎌倉時代の文化の繼續であると共に、上流階級の文化も廣く一般に及び、民間の卑まれて居た文化も發達して、上下に行はれる様になり、更にそれに加ふるに明の文化の影響が一層著しくなり、この三者の融合統一を見ない混亂の時代であつた。

佛教は鎌倉時代に起つた新宗派の完成期であつて、禪宗の隆盛は勿論、淨土宗・淨土真宗・日蓮宗も皆この時代にその基礎を確立するに至つたが、これに對する舊佛教の壓迫も依然として續いて居た。足利氏の佛教に對する態度を見るに、舊佛教に對しても或は盛に供養祈禱を行ひ、或は子弟を天台眞言の寺院に入れたのみならず、三寶院賢俊の尊氏に於ける、同滿濟の義滿義持に於ける如く、政治上にも黒衣宰相といふべきものさへ出て居るが、最關係の深かつたのは北條氏の尊信を受けて武家宗ともいふべき形であつた臨濟宗であつた。尊氏は最夢窓楚石・夢窓國師を信仰して、貴俗ともにその教を受

足利氏と臨濟宗

足利氏と舊佛教

五山十刹

け、その勧めによつて諸國に安國寺・利生塔を營み、天龍寺を立てて開山としたが、義滿も義堂信周絶海中津佛智國師を尊信し、禪學儒教を聞いたのみならず、政治上の顧問とし、外交事務に當たらしめた。禪刹は宋の制に摸して鎌倉時代にも五山十刹の稱があつたが、義滿は元中三年左の如くこれを定めた。五山之上、南禪寺、五山第一、天龍寺、建長寺、第二、相國寺、圓覺寺、第三、建仁寺、壽福寺。第四、東福寺、淨智寺、第五、萬壽寺、淨妙寺。

この五山及びこれにつぐ十刹は官寺であつて、その住任は幕命によるのである。殊に相國寺は足利氏の氏寺の如き形となり、その住職は僧録司として禪僧の進退を司るのみならず、幕府の外交は絶海以來代々その職務であつて、徳川氏の初まで續いて居る。

鎌倉の末に於て辨圓及び祖元の法系最榮え、前者を代表するものに虎關師練、虎關國師があり、後者を代表するものに夢窓が出た。共に公武の尊信を受けたが、虎關の著述を主とし、元享釋書三十を初め多くの著書を遺したに反し、夢窓は或は尊氏の佛業を助け、或は南北兩朝や尊氏兄弟の間を周旋する等、當時の政治界に關係することが多かつた。そのため夢窓の門には最初の僧録司となつた妙葩春屋、智覺、普明國師や、義堂・絶海等を出だし、この時代を通じて法流最盛であつた。臨濟禪がかくの如く幕府と結んだ外に、朝廷及び公家との關係も深くなり、新しい貴族佛教となつたことは、その俗化を免れなかつたが、それ

虎關と夢窓

臨濟宗と舊佛教との衝突

と共に舊佛教との衝突をも惹起するに至つた。尊氏が天龍寺を造營し、光嚴天皇がその供養に臨幸せられようとした際、叡山が憤つて夢窓を流し、寺を焼かんことを請ひ、神輿を奉じて入洛せんとしたため、臨幸を中止せられた事や、南禪寺の山門が叡山の領地を犯したとて、南禪寺の破却を求め、遂に神輿の入洛となつて、山門を取毀つた如き著しい例である。

曹洞宗

曹洞宗では道元四世の法系に瑩山が出て曹洞中興と稱せられ、その開基と傳へる能登の總持寺は、後世永平寺と共に兩本山となつたが、その弟子に峩山が出て總持寺を繼ぎ、その法流最榮えた。

淨土眞宗と蓮如

淨土眞宗は本願寺三世に覺如が出て、本願寺の基礎を作つた上、八世に蓮如が現はれて教勢大に振ふに至つた。當時京都の本願寺は寛正六年叡山のため焼かれたが、蓮如はそれ以來近江三河より北國東國等に赴き、勝れた才學と、強い精力とにより一意布教に努め、各地に寺院を開いて根據を固め、或は親鸞の和讃正信偈を刊行し、或は平易な御文を書いて門徒を誨へ、外には王法を額にあて、内には他力の信心を深く心に畜へんことを説いた。北國の根據とした吉崎道場越前國坂井郡の如きも彼が「コノ兩三ヶ國ノウチニオヒテ、ヲソラクハカカル要害モヨク、オモシロキ在所ヨモアラジ」御と言つた如く水陸の要衝であつたが、其後山科に開いた本願寺も、大坂に設けた別院も、共に要害の地であつたのは、騷亂の世に處する用意であつたらうが、やがて門徒一揆の根據地ともなつた。明應八年、八十五歳、專修寺

惠修寺派と眞慧

派の眞慧も亦同時に現はれ、専修寺を下野より伊勢一身田に移して布教に努め、北國では本願寺とも盛に争つたが遂に及ばなかつた。

日蓮宗

日蓮宗も日蓮の再來と言はれた日朝が出て身延山を盛ならしめ、その弟子に日親が現はれ、立正治國論を書いて義教に忌まれ、火で焼いた鍋を冠せられて鍋冠日親の名を得たが、この頃から京都に於ける勢力も漸く盛になり、二十一ヶ寺を數へるに至つた。然るに叡山はこれを喜ばず、幕府にその追放を要求しても納れられないため、天文五年日蓮の徒の宗論を挑んだを機會に、二十一ヶ寺を悉く焼き拂つて、一時京都に於ける日蓮宗を根絶した。

宋學の傳來

佛教に次いで注意すべきは儒教に於ける宋學の輸入であつて、これも主として禪僧の手によつて行はれた。支那文化は宋以來面目を改めた點が多いが、殊に儒教は佛老の影響を受け、周張二程朱陸等によつて、漢唐訓詁の風を脱して、著しく哲學的となり、本體論・心性論等の發展を見、義理名分を喧しく言ふ様になつた。而して元明時代の禪僧は、儒佛一致を唱へて儒を學ぶものが多かつたから、我學僧も、これに倣つて儒學を兼修するもの多く、鎌倉時代の末以來虎關・玄慧・義堂・岐陽方秀・桂菴玄樹等が相次いで出で、玄慧は後醍醐天皇・北畠親房等にこれを傳へ、桂菴は菊池氏・島津氏等の招によつてこれを九州に弘め、既に薩摩で大學章句を出版して居る。文明十年然し當時の禪僧は儒學よりも詩文を

重んじたものが多いから、江戸時代に入つて大發展を見る基をなした宋學の潜伏期といふに過ぎない。

自主的觀念の勃興

神皇正統記

善隣國寶記

吉田兼俱の唯一神道

元寇に於ける神風の思想は神祇の崇拜を盛ならしむると共に、我國を神國と考へ、自主的觀念を盛ならしむる基であつた。大日本は神國なりの一句を以て筆を起した北畠親房の神皇正統記の如きは、この時代精神を代表するものである。正統記は我皇統の深遠正大であり、南朝がその正統を繼承せらることを力説すると共に、古來我帝皇の御事蹟を述べ、政治の得失を論じて、後村上天皇の鑑戒に供したもので、戰陣中何等參考すべき史藉を有せずして、かかる名著を書き得た學識は驚嘆すべきである。我外交史の翹楚である周鳳瑞溪の善隣國寶記も亦「先當令_レ人知_ル吾國之爲_ニ神國_一之由_上」ために書かれたもので、明に神皇正統記の思想を繼承するものである。されば此の時代の末には吉田兼俱が出て唯一神道を唱へ、吉田山の齋場に全國の神祇を祀つて、神祇管領と稱するに至つた。彼は權謀によつて一世を僞瞞したことも多く、その思想も佛教を脱したものではないが、從來本地垂迹説によつて舊佛教中に包括せられて居た神祇を、佛教の手から取返さんとしたことは注意すべきで、後世神道を説くもの、殆皆彼を祖とするに至つたのである。

五山文學

文學として最異彩を放つたものは五山禪僧の漢詩文である。平安朝に於て一時隆盛を極めた我漢詩

義堂・絶海

文も、國文學の發達に壓せられて漸く振はず、多く日本化した俗文が行はるゝに至つたが、禪宗は文字による事が多い上、當時の禪僧は或は求法のため、或は外交使節として屢入明した結果、再び漢詩文の發達を見るに至つた。五山の詩文は、その格調趣味共に全く支那風で、少しも和臭を帯びない點が特色であつた。義堂・絶海はその双壁であつて、義堂の詩を見て明人「疑是大唐人作也」空華日工集と言ひ、絶海が明太祖に謁して詩を賦した際に、太祖はこれに唱和し、僧録司道衍成祖永樂帝の黒衣宰相は彼の詩集に序して、禪師の後詩を尙ぶもの、當に禪師を以て法となすべしと記した蕪堅等、彼等が彼土に於ても如何に重んぜられたかが察せられる。されば外交文書を初め、當時の詩文は皆彼等の手になつたのは言ふまでもない。唯これが何所までも支那文學の模倣であり、禪林を出てなかつたことは、國民文化としての價値を減ずるを免れない。

和歌
古今傳授
新葉集

建武中興は理想に於ては公家中興時代であつただけに、貴族文化も稍活氣を呈したが、中興の政治の程なくして破れた如く、文學に於てもその影響は大なるを得なかつた。和歌は頓阿が出て、二條家正風の復興者と稱せられ、その歌集草庵集は永く歌道の經典視せられたが、徒に平穩を求めて卑俗に墮し、應仁の頃の東常縁とうつねのに至つては、遂に古今傳授を初めて、益歌道を窮屈にした。この間宗良親王の撰になる新葉集に實感より來た眞情の取るべきあり、武士として最歌道に長ぜる今川了俊は二條家の

和歌と公家

の古風に反對して居るが、共に大勢を動かすに至らなかつた。然し和歌に於て三代集を宗とし、これに關する知識を大切にしたもの、一は王朝文化に對する憧憬の現として見れば興味が深い。而して歌人としても出家や武家が公家を凌ぐに至つたことは、和歌の勅撰が永享十年の新續古今和歌集を以て跡を絶つたと共に、公家の衰弊に伴つた現象である。

連歌

和歌が窮屈になり、詩としての生命の衰へた際、これに代つて來たものは連歌であつた。連歌の起源は既に萬葉集に見えるが、鎌倉時代から和歌の法式に拘はれぬ滑稽的な遊戯として漸く盛になり、建武の頃にも「京鎌倉をこきまぜて一座揃はぬえせ連歌、點者にならぬ人ぞなき」二條河原落首と言はれた

二條良基

位であつた。然るに二條良基が連歌を好み、連歌新式を作つて法式を定め、その撰になる菟玖波集が勅撰に準ぜられるに至つて、延元元年和歌に對立する地位を占むることとなつた。更に應仁文明の頃、宗

宗祇

祇が出てこれを大成し、滑稽を去つて幽玄を主とし、一句毎に獨立したものとし、自然の觀察も和歌の因襲的なのに反して生新となり、修辭も和歌に見られぬ緊張したものとなつた。朝廷より花の下を賜ひ、勅命によつて新撰筑波集を撰んだ。彼は自然を友として一生を全國の遊行に送つたが、文龜二年歿八十二歳その弟子宗長・肖柏等を初めこれに倣ふもの多く、連歌は都鄙貴賤の別なく一般的に行はるるに至つた。

増鏡と太平記

徒然草

小説

能樂の起源

能樂の大成

散文としては前代の系統に属するものに、大鏡に倣へる増鏡作者不明軍記物としての太平記小島法師作及び隨筆として徒然草兼好法師作等があり、何れも此の時期の初めに出て居る。増鏡は後鳥羽天皇から後醍醐天皇の間の事跡を記して、その文典雅、太平記は後醍醐天皇・後村上天皇二代の間の争亂を描いて、その文絢爛、共に公家側に好意を示して居る。徒然草は枕草紙と共に隨筆の双絶と稱せられるが、彼の情趣を主とし、自己の逸事を記して居るに反し、これは趣味を談じ、人情を説くと共に、世間の説話を述べ、教訓を主とし、佛教の影響が著しい等、鎌倉時代の説話集と共通した性質も多い。中期以後になると片々たる小説が盛に現はれたが、その内容が多趣多様で、廣く武士・僧侶・下民の生活を寫して居る所に、文藝の民衆化して行く姿を見せて居るに過ぎない。

能樂即猿樂さるまわしの發達は、連歌と共に民間文化向上の適例である。猿樂は古くは散樂とかき、支那から傳はつたもので、正格な舞樂舞樂に對して、曲藝を主とした滑稽な戲樂であつたが、後には猿樂の文字を用ゐ、内容も他の民間の歌舞と混じて複雑になつて來た。この頃猿樂は春日神社の四座外山(寶生)・結崎(觀世)・坂戸(金剛)・日吉神社の三座、山科、下坂、日吉伊勢神宮の二座伊勢、一五司の如く、社寺に屬して神事の際に演じたもので、その中脚色のある舞を能と呼んだ。然るに義滿の頃になつて將軍の保護と春日の觀世座に出た觀阿彌・世阿彌の天才によつて、この能に大變革を生じた。即從來の卑俗滑稽をすてて幽玄華麗を

能樂の流行

主とし、新にこれに應じた歌曲が作られて、後世の能樂の形が出來たのである。義滿が特にこれを保護したのは、彼の遊樂好であるのと、世阿彌を愛したためであつたが、これによつてその地位が急に高まり、武家の間に盛に行はれたのみならず、彼は北山行幸の際これを天覽に供し、義持は禁中で演ぜしむるに至つて、公家の間にも漸く賞翫せられる様になつた。義政の時には觀世音阿彌が出て流行の絶頂に達し、糺河原の勸進猿樂の如きは、義政一代の盛事として、その費用を諸社寺に課し、後花園天皇の臨幸を仰いだ程であつた。かくして從來非人乞食の所行として卑まれて居た猿樂が、武家の式樂として永く尊ばれることとなつた。

能に用ゐる歌曲即謡は主として能役者の作る所で、殊に觀阿彌・世阿彌・音阿彌の作が多いが、その文は當時我國に行はれた詩歌・物語等を點綴して婉轉流麗な調をなし、題材は多く古傳説にとり、當時の佛教思想を多量に含んだものである。能の嚴正に對して、滑稽諷刺を主とした物眞似寫を狂言といひ、能の間に演ぜられた。

美術に於ては繪畫の變革が最著しく、これの基をなしたのは宋元畫風の輸入である。前代に榮えた大和畫は漸く振はず、託摩派からは東福寺の明兆兆殿が出て、更に宋元の畫風を加へて盛に大幅を描き、土佐派は東山時代に光信が出てこれを復興したに過ぎない。當時の宋元畫は大和畫の傳彩の優麗

明兆と土佐光信の宋元畫風の輸入

狂言

謡

如拙と周文

雪舟

雪村

三阿彌

狩野元信

狩野派

を主とするに反し、墨畫又は淡彩で筆力韻致を重んじ、その題材たる山水人物をも彼土にとつた目新しい異國趣味の畫であつたが、これは禪僧によつて傳へられたことと共に、五山の詩文と軌を一にし禪宗の影響と見るべきものである。應永の頃相國寺の如拙この畫風を起し、同じく周文彼に學んで出藍の譽あり、よく宋元畫の氣骨を發揮した。その後雪舟が出て彼等の畫法を學び、更に應仁元年遣明船に乗じて入明し、彼土の名山大川を探つて體得する所あり、明に於ても勅命によつて禮部院の壁畫を描いた。その筆力雄渾にして、手法嚴正、氣格豪宕なる點は全く古今獨歩で、山水花鳥人物往くとして可ならざるないが、殊に山水殿閣に神品が多い。山水畫卷毛利公の如きその一である。永正八年歿八十七歳。戰國時代に雪村が現はれ、周文・雪舟を學び、豪放飄逸の特色を發揮した。この外義政の童朋に眞能眞能阿彌眞藝眞藝阿彌眞相眞相阿彌の三阿彌があり、將軍左右の書畫器物を取扱つたが、共に宋元畫に長じ、平淡な畫風を傳へた。

かくの如き宋元畫の全盛と更に土佐派の復興との後を受け、兩者の長所を併せて宋元畫を日本化せしめたのが狩野元信である。古法眼永祿二年歿、八十四歳彼の父正信は周文に學び、宋元畫を以て義政に仕へたが、

彼は土佐光信の女代を娶つて繪所預となり、畫法に於ても雄健な筆法と豊麗な傳彩とを併せて、豪宕壯麗な一體を成し、畫題に於ても人物山水花鳥を選ばず、又和漢に亘つた。これを狩野派と言ひ、今

後三百年を通じ、畫界の本流たるに至つた。彼の遺作としては妙心寺、靈雲寺の襖に描いた山水花鳥圖・嵯峨清涼寺の釋迦緣起卷五を初め頗る多い。

寺院建築

寺院建築は前代と大差なく、和様興福寺五重塔唐様東福寺山門、美濃永保寺開山堂及び新和様紀伊道成寺本堂、同長保寺大門等並び行はれ、

住宅建築

更に新和様に唐様を加味したものが生じ、河内觀心寺本堂、播磨鶴林寺本堂、三河瀧山寺本堂漸く各様式が混合統一に向ふこととなつた。住宅建築では足利氏は公家風から寢殿造を用ゐ、これに武家造を多少加味させたが、この時代の末には遂に書院造を生じた。書院造とは寢殿造の渡廊で連絡したと違ひ、總てが一つの建物となり

書院造

ために複雑な平面をなし、上段間には床間、違棚があり、襖・明障子で部屋を仕切り、廣椽・落椽を廻らし、入口に玄關を附したもので、今日の一般住宅はこの様式に屬するものである。

金閣

この時代の建築の遺物中、最特色のあるのは金閣と銀閣であらう。金閣は義滿の北山の別邸の一部であつて、寢殿造と唐様の佛殿とを折衷した三階の樓閣であるが、和様と唐様の手法を併せ用ゐ、上程柱を細くし、各階變つた勾欄を附し、勾配の緩い檜皮葺の屋根の上に銅の鳳凰を載せた、極めて優美輕快な建物である。金閣の名は三階に金を帖つたから起つたが、これは佛殿としての莊嚴のためである。而してこれが美しい林泉の間に池に臨んで建てられ、林泉の觀賞に適すると共に林泉の美を加へ、庭園と建築との巧な融合を示して居る。銀閣は義政の東山の別第の一部であつた重層の樓閣で、

銀閣

その性質は全く金閣と同様であるが、金閣に比して書院造の性質が加はつて居ると、閑雅淡泊な表現が著しくなつた差がある。銀閣の稱は金閣に倣つて銀を塗らうとしたためであるが、果さず終つた。

造庭園藝の進歩

建築が林泉との調和を重んぜられると共に、造庭園藝の發達を見たのは當然であるが、これを平安朝に比すれば、彼は自然で華麗であつたのが、これは人工的に閑寂な趣を造り出さうとした差が見られる。初期の夢窓、後期の相阿彌はその代表者で、洛北大徳寺の大仙院・洛西龍安寺及び東山銀閣の庭は相阿彌作と傳へられる。殊に龍安寺の石庭の一木一草なく、一面に白砂を布き、數個の石を配したのは、正に一幅の墨畫で、最禪味に富んだものである。

相阿彌

後藤祐來の彫金の

彫刻は前代中期以後引續き振はず、唯美術工藝の一種として特色あるものを出したに過ぎない。彫金に於ける後藤祐來はその最著しいもので、義政に仕へ、目貫、小柄、筭これを三所物といふ等刀劍の裝飾品を作つたが、刀法精妙を極め、物皆生動の思あらしめた。俱利伽羅龍三所物、濡烏目貫共に駒田侯爵藏等その代表作である。鎌倉時代は刀劍の銳利を主としたのに對し、この頃裝飾の著しく發達したのは、武家生活の變化を示すものである。これより宗乗・乘眞等子孫相次ぎ、後藤家風は永く彫金界を支配するに至つた。能樂に伴ふ能面の彫刻、茶湯に伴ふ茶釜・茶椀等亦特殊の發達を見た。

能面及び茶器

茶湯の變遷

茶湯も禪僧によつて支那から傳へたもので、榮西が初めて茶子を將來したと言はれる。禪僧の間に支那趣味として行はれて居たものが、享樂的氣風の盛な足利氏の初期には、盛大な茶會となつて流行し、珍器を飾り、酒肴を設け、山の如く賭物を供へて、茶を飲み分けて勝負を争ふ豪華な遊戯と化した。然るに義政が奈良梅名寺の僧珠光を召して、民間に行はれた簡素な茶湯を形どつて式を定めてから、四疊半裡一椀の苦茗に世事を忘るる閑寂清淡な趣を命とする茶道が成立した。志野宗信の香道相阿彌の花道の如きも同じ頃出來たものである。

香道

花道

第三十四章 戰 國

應仁の大亂以後將軍の威權全く地に落ちて、虚位に備はるにすぎず、諸將は幕命を奉ぜずして互に攻伐を事とし、群雄その間に蜂起して秩序全く亂れ、戰亂絶ゆる時なく、實力の競争が最露骨に行はれた。このため各地の豪族も盛衰興亡甚しく、この間に、鎌倉南北朝以來足利氏と共に榮えて來た名門舊家は殆皆衰亡して、新に崛起した家系も身分もない一代の成上者の天下に化して行つたのである。

應仁の亂が西軍の瓦解に終つた結果は、東軍の主力であつた細川政元勝元の子・畠山政長の勢力の發展を見たが、やがて兩者の確執を免れなかつた。義尙・義政の死後、義視の子義植初め義材といひ、次いで義尹に改め、更に義植と改むが迎へられ、義尙の遺志を繼いで近江の六角高頼を平げ、その勢に乗じ、河内の畠山義豊義就の子を討つたが、義植の立つたを悦ばず、政長の勢力を惡んで居た細川政元は、義豊に應じ、義政の甥義澄關東の子を立て、政長を攻めて敗死せしめた。このため幕府の實權は全く細川氏の手へ歸し、將軍は傀儡たるに過ぎぬ有様となつた。明應二年政元は子なく、澄之九條政基の子・澄元細川成之の子・高國細川政春の子の三人を養子としたため、澄之は政元の澄元を家督とするを怒り、政元を殺して澄元を追つたが、高國は澄元に應じて

實力の時

畿内地方の形勢
細川政元と畠山政長

細川氏の内訌

大内義興の入京

細川氏と三好氏

本願寺門徒の一揆

三好長慶

兵を起し、澄之を攻めて敗北せしめ、澄元後を承けた。これより先義植は大内義興政弘の子に依つて恢復の機會を窺つて居たが、細川氏の内訌に乗じ、大舉出兵することとなり、細川高國亦此に應じた。このため義澄・澄元は京都を出奔し、義植將軍に復して、義興・高國が實權を握つた。永正五年義興は在京十年で歸國し、之に乗じて企てた澄元の京都出兵も成功しなかつたから、高國は意驕つて専横甚しく義植これを怒つて淡路に走つたため、義澄の子義晴を迎へて將軍とした。然るに澄元の子晴元は家臣三好元長と共に、京に攻め上り、屢高國と戰つて遂に敗死せしめた。これより晴元・元長等京畿に勢力を振つたが、程なくして兩人の間に衝突を惹き起し、晴元は本願寺一揆の力を借り、元長を攻めて自殺せしめた。享祿五年本願寺は山科に本山、石山に別院を構へ、畿内に多くの信者を有したが、細川氏の依頼をうけて一揆を起し、元長を殲したに勢を得て、盛に京畿を横行し、「如風聞者天下可爲一揆之世」二水と言はるるに至つた。晴元はこれを恐れ、遂に天文元年日蓮宗徒及び叡山の衆徒と力を合せて山科の本願寺を屠つたが、一揆は石山に據つて猶勢力を維持した。其後元長の子長慶初名範長漸く勢力を得、遂に晴元を破つてこれを退隱せしめ、義晴の子義輝初名義藤及び晴元の子信長を擁して全權を占め、その將松永久秀をして京都の事を行はしめた。天文二十一年かくの如く將軍の廢立は全く細川氏の意の儘となり、細川氏の權亦三好・松永等の陪臣に移つて行つた。

關東地方の形勢
上杉氏の勢力

山内・扇ヶ谷
兩上杉氏の攻

扇ヶ谷上杉氏と太田道灌

古河公方堀越公方

これより先關東では永享の亂に持氏が亡んでから十年餘公方なく、上杉氏政治に當たり、上杉氏の勢力は益固まつたが、人心を得るために幕府に請うて持氏の遺兒成氏幼名永壽王丸を公方とし、山内上杉憲實の子憲忠が管領となり、家宰長尾景信入道昌賢がこれを輔けて行つた。成氏長ずるに従ひ、父の最期を聞き、上杉氏の威勢を見て之を喜ばず、遂に衝突を來たし、憲忠は成氏黨のために殺さるるに至つた。享徳三年昌賢は上杉一族を連合して之に當たり、幕府は今川範忠をして上杉氏を助けしめたため、成氏は鎌倉を保つ能はずして下總の古河に移り、上杉氏は義政の弟政知を迎へて伊豆の堀越ほりこしに居らしめて成氏に當たることとなつた。古河公方・堀越公方の名はこれから生じた。これより兩者の争は久しく續き、京都に於ける應仁の大亂にも、全く力を致すことが出来なかつた。この頃扇ヶ谷上杉では文武の才に富んだ名臣太田持資入道道灌之を助けて大に勢力を張り、長祿元年には古河公方に對する爲め、武藏に江戸城を築いた。道灌の江戸城は後の徳川氏の江戸城本丸の地であるが、當時に於ては稀に見る規模雄大なもので、關東の大威力であつた。山内上杉氏では、昌賢の死後弟忠景後を嗣いだたため、昌賢の子景春は成氏に通じて叛き、交戦五年に及んだが、道灌の力で辛じて之を鎮じた程で、漸く扇ヶ谷上杉のために壓倒せられて來た。山内上杉顯定は心平ならず、扇ヶ谷上杉定正に讒して文明十八年道灌を暗殺せしめ、それと共に道灌の子賢康を助けて定正と兵端を開いたため、定正は古河公方と

北條早雲

早雲の伊豆占領

早雲の相摸占領
早雲の性格

北條氏綱
東條氏隆

結ぶこととなり、茲に兩上杉氏の久しい戦となつた。

かく關東公方・管領上杉氏共に分裂してその勢力を削いだ間に乘じて、漁夫の利を占めて關東を統一するに至つたのが、後北條氏である。後北條氏の祖早雲は初伊勢新九郎長氏といひ、駿河の今川氏に身を寄せて居た牢人であつたが、今川義忠が死んでその子氏親の幼いため六歳内訌の生じた際、彼で力で鎮まつてから、大にその力を認められ、駿河興國寺の城主となつた。彼は關東に野心があり、上杉定正と通じて機會を窺つて居たが、延徳三年堀越公方政知の子茶々丸が、繼母の弟を家督にせんとしたのを怨み、兩親を殺して後を繼ぎ、次いで老臣をも殺したため、人心を失つて國內の亂れたを見長氏は不意に襲ふて茶々丸を自盡せしめ、上杉顯定の分國であつた伊豆を平定して葦山城に據つた。これは全く氏素姓のない人の一國を領した初で、戰國的傾向の著しい發現である。此後屢扇ヶ谷上杉氏のため兵を武藏に出したが、定正の死後は自由に攻略を初め、先づ大森藤頼を欺いてその小田原城を奪ひ、次いで相摸の舊族三浦義同入道道寸を新井城に圍むこと三年、遂にこれを滅ぼして相摸を定めた。これより甲斐・武藏を侵略せんとしたが未だ果さずして永正十三年葦山に没した。八十歳彼は智略に富み霸氣縱横、然も學を好み、儉約を守り、士を愛し、民政に注意したため、よく後北條氏の基礎を造ることが出來た。即彼は戰國的英雄の魁であると共に、その一典型であつた。その子氏綱は古河公方晴

氏成氏の曾孫と婚を通じてこれを利用し、扇ヶ谷上杉氏を破り、江戸・川越兩城を奪つて武藏を従へ、小弓御所義明晴氏の叔父との連合軍を國府臺に擊破して義明を殲したが、その子氏康更に進んで山内上杉憲政を討つて越後に奔らしめたから、關東は殆北條氏の手に歸し、房總の里見氏・常陸の佐竹氏が纔に勢力を保つに過ぎなかつた。

甲信越方面
武田信虎
武田晴信

甲州では源平以來の舊族武田氏の勢衰へず、信虎國內を平定して兵を四方に出すに至つたが、性質強暴のため人心を得ず、天文十年家臣彼の子晴信入道を擁して彼を追うたため、其女の嫁せる駿河の今川氏に身を寄せた。晴信はこれより信州經略に従ひ、諏訪頼重科野國造を亡ぼし、村上義清・小笠原長時を奔らして南信を平定し、越後の上杉氏、關東の北條氏と衝突するに至る。越後は守護上杉氏の權漸く家宰長尾氏に移つて行つたが、爲景の時にはその勢國主房能を凌いだため、遂に衝突を來たし房能及びこれに干渉した山内上杉顯定は共に敗死するに至つた。爲景は上杉定實を奉じて一國を支配したが、その死後晴景懦弱で國內治まらず、人心弟景虎入道に歸したため、定實は景虎をその養子として家を嗣がしめた。この後景虎は國內を平定して外に向はんとしたが、その間に信玄に追はれた村上義清・小笠原長時來つて援を求め、山内上杉憲政も亦北條氏に追はれて來り投じて關東管領職を讓つたから、景虎自ら上杉氏と稱し、古河公方晴信の子藤氏を奉じて、北條氏と關東に争ひ、信州に出

長尾爲景
上杉景虎

て信玄と川中島に對戰することとなつた。弘治元年
永祿四年北條・武田・上杉の三氏はこれより東國の三大勢力として、永く對抗することとなつた。

北陸方面
本願寺門徒
富樫氏

上杉氏以外で北陸に勢力のあつたのは、本願寺の一揆と朝倉氏である。文明中本願寺の蓮如が越前吉崎に道場を設けて、北國の教化に努めてから、本願寺の勢は越前・加賀・能登・越中に弘まつた。當時加賀の守護富樫氏は政親・泰高に分裂したが、泰高の本願寺に歸したに反し、政親は専修寺の眞慧室政親女と親しみ、吉崎以下本願寺派の寺院を破却し、僧侶を殺したため、本願寺の門徒は政親が將軍義尙の近江征伐に従軍せる不在に乗じて一揆を起した。政親歸國して鎮壓に當たり、近國の諸將に援を求めたが、一揆は四方に屯集して外援を退け、政親を高尾城石川郡に圍んで自殺せしめ、専修寺派の寺院を破却したのみならず、進んで能登に入つて守護畠山義統を追ひ、越中・越前をも侵した。文明十年かくて加賀は全く本願寺の手に歸し、山崎山の御坊金澤城の地を中心として北陸の大勢力となつた。當時淨土眞宗を俗に無碍光宗又は一向宗と呼んだから、一揆をも一向一揆とも言はれた。越前は斯波氏が守護であつたが、守護代朝倉孝景、應仁の亂に東軍に降つて守護に任ぜられてから、全く一國を領有するに至り、彼の死後一族の内訌を生じたが、猶よく加賀の一向一揆に對抗し、更に天文の頃義景が出て益勢力を張つた。

越前の朝倉氏

奥羽方面
伊達氏
南部・最上・蘆名三氏

東北では陸奥の伊達氏、鎌倉以来の舊家として勢力を維持し、植宗の時になつて益盛になつたが、後植宗と其子晴宗との間に内訌を生じ、久しく相争つた後、植宗が退隠して晴宗が家を嗣いだ。晴宗の子輝宗、その子政宗と相承け、益勢力を張つた。この北には南部・最上二氏あり、會津には蘆名氏があつて、互に争つた。

東海方面

今川氏親・義元

松平氏の興起

織田氏の勃興

東海方面では初駿河の今川氏、三河の吉良氏、尾張の斯波氏が何れも足利氏の一族として鼎立したが、斯波氏は被官織田氏に権を奪はれ、吉良氏も衰へて松平氏か之に代つたに反し、今川氏は依然として榮え、氏親は四方に兵を出して遠江をも従へ、その孫義元は信虎の女を娶つて武田氏と結び、松平氏を助けて織田氏と對抗した。松平氏は新田の一族と稱する半人親氏が松平氏加茂郡松平村の土豪の養子となつてから家運が盛になり、三代信光に至り、機略に富みて大志あり、西三河の三分一を領した。七代清康、勇武衆に勝れ、忽にして西三河を統一して東三河に及び、更に尾張に入つて織田氏と争ふこととなつた。織田氏は斯波義重が尾張の守護を兼ねてから、その守護代として尾張に勢力を張つた。斯波氏が分裂した際、織田敏定は義廉を助けて功あり、この頃から斯波氏の衰へると共に織田氏は主家を凌ぐに至つた。當時織田氏は清洲と岩倉の二家に分れて各四郡を領して相争つたが、天文頃清洲織田氏の三奉行の一人に織田信秀が出で、器量群を抜き、兩織田氏を壓倒して尾張を統一し、進んで美濃の齋藤氏三河の松平氏と争つた。天文四年松平清康は信秀と決戦せんとて自ら兵を尾張に進め、森山東春日井郡守山町に陣したが、この際一族に内訌を生じ、部下阿部彌七郎のために弑せられたため、所謂森山崩れとなつた。二十歳その子廣忠はまだ年少のため、暫く難を避けて國を去つたが、後今川義元の方で歸國し、その後援によつて信秀の銳鋒に對することとなつた。そのため一子家康幼名竹千代、次いで元康と稱し、後家康と改む。を今川氏へ人質としたが、途中中原の戸田康光のため奪はれて織田氏に送られ、次いで廣忠亦歿したため、松平氏は益苦境に陥つた。それより今川氏の援軍と合して信秀に當たり、天文十八年安祥碧海郡安祥に織田信廣を圍み、これと交換して竹千代を取返して今川氏に送ることが出來た。義元が松平氏を助けるのはこれを利用して勢力を擴張するためだから、松平氏の領地へは使を派してその租入を收め松平氏の家人は、絶えず自己の戦争に驅使した。このため三河武士は自耕自給して軍役に従ひ、一向家康の歸國の一日も早からんことを祈つた。この間の艱難と主君に對する思慕とは三河武士道の母となり、君臣の團結を最強固にし、家康が後年大事をなす精神的の基となつた。信秀はかく勢力を張つた外、勤王敬神の念に富み、皇居の築地の修理料として四千貫を獻じて叡威に預り、伊勢神宮へも造替の際その資を獻じて居る。天文二十年彼が末森城名古屋東區末森城東區田代町に歿した後、その子の信長及び信行の間に不和を生じたが、やがて信長の勝利に歸して、益勢力發展することとなる。

織田氏の松平氏の攻伐

松平氏の非運三河武士道

織田信秀の勤王敬神

濃の齋藤氏三河の松平氏と争つた。天文四年松平清康は信秀と決戦せんとて自ら兵を尾張に進め、森山東春日井郡守山町に陣したが、この際一族に内訌を生じ、部下阿部彌七郎のために弑せられたため、所謂森山崩れとなつた。二十歳その子廣忠はまだ年少のため、暫く難を避けて國を去つたが、後今川義元の方で歸國し、その後援によつて信秀の銳鋒に對することとなつた。そのため一子家康幼名竹千代、次いで元康と稱し、後家康と改む。を今川氏へ人質としたが、途中中原の戸田康光のため奪はれて織田氏に送られ、次いで廣忠亦歿したため、松平氏は益苦境に陥つた。それより今川氏の援軍と合して信秀に當たり、天文十八年安祥碧海郡安祥に織田信廣を圍み、これと交換して竹千代を取返して今川氏に送ることが出來た。義元が松平氏を助けるのはこれを利用して勢力を擴張するためだから、松平氏の領地へは使を派してその租入を收め松平氏の家人は、絶えず自己の戦争に驅使した。このため三河武士は自耕自給して軍役に従ひ、一向家康の歸國の一日も早からんことを祈つた。この間の艱難と主君に對する思慕とは三河武士道の母となり、君臣の團結を最強固にし、家康が後年大事をなす精神的の基となつた。信秀はかく勢力を張つた外、勤王敬神の念に富み、皇居の築地の修理料として四千貫を獻じて叡威に預り、伊勢神宮へも造替の際その資を獻じて居る。天文二十年彼が末森城名古屋東區末森城東區田代町に歿した後、その子の信長及び信行の間に不和を生じたが、やがて信長の勝利に歸して、益勢力發展することとなる。

江濃方面

土岐氏

齊藤氏

齊藤道三

近江佐々木氏の分裂
六角氏
京極氏
浅井氏

次に江濃方面を見れば、鎌倉時代から美濃は土岐氏、近江は佐々木氏守護として勢力あり、足利氏が京都を保ち得ない時は、逃れてこの二國によるを常とした所である。土岐氏は一族多く、伊勢尾張等を領したこともあるが、このため又内訌も多く、それに乘じ執事齊藤氏に権力移り、應仁の亂の前後に於て、利永・妙椿兄弟相次いで治國の才を以て世に聞えた程であつた。然るに利國利永の孫近江の六角氏を討つて戦死してから齊藤氏の勢力衰へ、これに乗じて西村勘九郎が勢力を得て來た。彼は初め僧であつたが、還俗して旅商人となつて美濃に來たのを、齊藤氏の老臣長井長弘が才を愛して己が家臣西村氏の家を嗣がしめて、土岐氏に推選したものである。勘九郎は土岐頼藝に勧め、兄頼純を追はしめて自ら権力を占め、これより長弘を弑して自ら長井氏を冒し、次いで齊藤氏の絶えた際齊藤氏を繼いだ。即齊藤道三利政、後秀で、龍と改むこれより稻葉山城に居て一國を支配し、遂に土岐頼藝をも追つた。頼藝は尾張に逃れ、織田信秀の力により一時美濃に歸るを得たが、再び道三に追はれて甲斐に走り、武田氏に頼つた。近江の守護佐々木氏は既に鎌倉時代から南北に分れたが、後北を京極、南を六角と稱した。應仁の亂に六角氏は西軍、京極氏は東軍に屬してから永く争を續けた。六角高頼は義尙・義植の征討を受けたが勢力衰へず、高頼及び其子定頼屢將軍や細川氏を助けて京都にも勢力を振つた。これに反し、京極氏は一族の内訌が久しく續いたため、家臣浅井亮政これに代つて權を占め、小谷城

中國方面

赤松氏と浦上氏

尼子氏

大内氏

山口の文化

浅井郡によつて江北を支配し、孫長政初賢に至つて益勢力を發展せしめた。

中國では初め、大内・山名・赤松・京極の諸家が勢力があつたが、大内氏の外は皆衰へ、新に浦上・尼子・毛利の諸氏相次いで起つた。應仁の亂後赤松政則は功により播磨・備前・美作を領し、侍所別當となつたが、これ主としてその臣浦上則宗の力であつたから、則宗の子村宗に至つては、その勢力赤松義村政則の養子に超え、遂に義村と衝突してこれを弑した。これより浦上氏が赤松氏に代つたが、義村の遺子政祐亦浦上氏を喜ばぬ諸將に奉ぜられて混戦を續けた。

尼子氏は出雲隱岐の守護京極氏の一族で、累代出雲の守護代であつたが、文明の末に經久が出で富田出雲能義郡廣瀬町山城に據つて國中を従へ、更に伯耆・因幡を平げて山陰の大勢力となり、猶安藝まで勢力を及ぼした。その孫晴久亦豪勇で、久しく大内・毛利兩氏と争を續けた。大内氏は王朝以來の周防の舊族で、久しく中國に於ける大威力であつた。應仁の亂には政弘西軍の主力であり、亂後も周防・長門・豊前・筑前を領して勢力益強く、その子義興は將軍義植を奉じて京都を鎮ずること十年の久しきに及んだ程で、富強畿内以西にその比を見なかつた。されば山口の城下は、繁榮京を凌ぎ、公家・僧侶の難を避けて、來るもの多く二條尹房・一條兼冬等文化も隆盛を極めた。義興の子義隆の武事を嫌つて、風流文雅を好み和漢の學問・蹴鞠・茶道等に耽つたことは、一層山口の文化を盛ならしめた。然し義隆の公家化は、

陶晴賢の
執逆

累代の家宰である陶晴賢^{すゑはるかた}初隆房入等武勳の將士の悦ばない所で、主従の間に不和を生じ、遂に義隆を攻めて自殺せしめ、^{天文二}十年 豊後の大友義鑑の子義長の^{義鎮}弟を迎へて嗣かした。この機會に勢を得たのが、

毛利元就
の勃興

安藝の毛利元就である。安藝は武田氏累世守護となり、^{かなやま}銀山城^{安佐郡祇園村武田山}に鎮じたが、毛利・吉川・小早川熊谷の諸氏自立して統一なく、ために大内・尼子二氏の争奪地となつて居た。毛利氏は大江廣元の裔で、郡山城^{高田郡吉田町}に據つて尼子氏に屬してゐたが、元就に至つて勢力の發展すると共に、轉じて大内氏に従ひ、その力を借りて、尼子氏の勢力を全く安藝から驅逐して終つた。かくて武田氏は亡び、吉川・小早川二氏は元就の子元春・隆景が相續して毛利氏の羽翼となつたから、元就はこの勢力により

嚴島の戦

晴賢の篡奪の罪を鳴らして、大内氏の舊臣を従へ、先づ安藝・備後の兩國を固めた。それより嚴島に築城して、晴賢をこゝに誘ひ出し、風雨に乗じ不意に討つて晴賢を自殺せしめ、^{弘治元年}次いで周防・長門を定めて、義長をも自殺せしめた。このため毛利氏は中國の大勢力となり、山陰の尼子氏、九州の大友氏と對抗することゝなつた。

九州の形勢
大内氏の勢力

九州では、澁川滿頼が今川貞世に代つて、鎮西探題となつてから、澁川氏が世々その職を襲つたが、威力足らずして諸豪を制すること能はず、少貳・大友・島津・菊池等の諸氏互に争を續け、この間へ中國の大内氏北九州に勢力を及ぼして來た。かくて豊前・筑前及び筑後・肥前の一部は大内氏に歸し、

少貳氏と
龍造寺氏

少貳氏は久しくこれと争つて衰へ、肥前の龍造寺隆信はその下から起り、大内氏と結んで勢力を占めた。豊後の大友氏は大内氏に對抗して下らず、大友義鑑は大内義隆と婚を通じて和したが、^{天文四年}後義鑑は長子義鎮^{入道宗麟}の家督を廢して次子を以つて代へんとし、家老と争つて殺され、義鎮後を受けて益

菊池氏

勢力を張つた。肥後の菊池氏は重朝の頃^{明應二年頃}文武を獎勵して聖堂を設け、釋奠を行ふ程であつたがその後繼嗣の争が續いて、家勢衰へ、遂に大友氏が肥後の守護を兼ねるに至つた。島津氏も屢内訌は

島津氏

あつたが、貴久支家から入つて繼いでから、薩・隅二州を統一し、日向の伊東氏を壓して中興の名ありその子義久に及んで九州を席捲するに至るのである。

四國の形勢

四國では細川氏が阿波・讃岐・淡路を保つて居たが、一族の分争の結果、その實權が漸く家臣三好氏の手に歸した。伊豫は河野・西園寺・宇都宮の三氏分立して、細川・大内・大友の争奪地となり、土佐は應仁の亂を避けて下國した一條教房の子家房國司として最も勢力があつたが、長曾我部國親が出てから之に對抗し、その子元親に至つて國內を統一して、進んで四國の統平を策するに至る。

戦國前期
の大勢

以上は戦國の前期とも云ふべき應仁の大亂以後天文の末年に至る約八十年間の形勢の大略であつて、全國至る所戦亂が續いたのみならず、君臣・父子・兄弟・一族の間にも、權力の争奪が盛に行はれ且殆皆君臣の争は臣、父子の確執は子、兄弟の不和は弟、本家と支家との衝突は支家の勝利に歸し、

勢力の新陳代謝
戦國後期の統一傾向

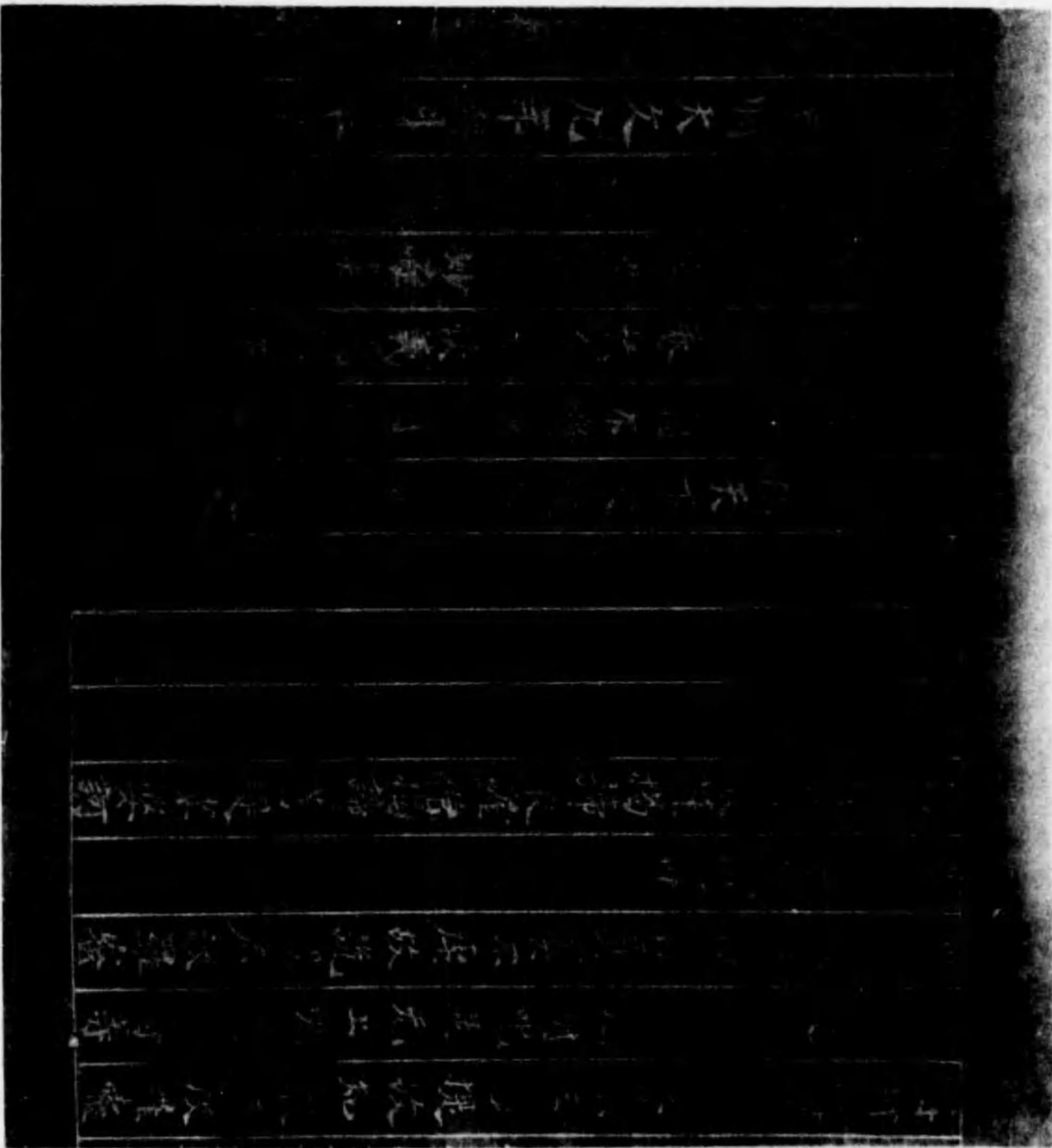
舊勢力は姿を滅して實力ある新人が勝を制して來たのである。而してこの後約二十年の戦國後期は、生存競争のため、強大なものが周囲の弱小なものを併呑して、益その勢力を大にして行く統一の時代で、就中その勢力の最も著しい織田信長が、遂に覇業を成すことになるから、後に信長の事業と共に述べることにする。

皇室の式微と勤王思想の發生

この時代は下剋上の最も甚しかつた時であつただけに、最上に位せらるゝ皇室は式微の極に達せられた。これ皇室の御領地も戦亂のため収入が上らず、皇室を奉戴して居た幕府も有名無實で、御用度を辨ずる資力がなかつたためであるが、この結果一面では皇室が幕府を経ずして、豪族や人民と接近せられることとなり、これが却つて勤王思想の芽ぐむ機縁となつた。應仁の大亂の結果主上も室町邸等を行在所とせらるゝこと十三年、公家亦多く離散したため、朝儀の廢絶するものも多く、明應九年後土御門天皇崩御の際は、費用のないため、四十餘日御遺骸を宮中に留め、後柏原天皇は嗣立せられたが、幕府が御即位の用度を献じないため、大禮は延期に延期を重ね、二十二年後の大永元年になつて初めて行はせられた程であつた。次の後奈良天皇は踐祚より十年後の天文五年に御即位の禮を擧げさせられたが、これは大内義隆初め、北條・武田・今川・朝倉等諸氏の献金によつて行はれ、正親町天皇も踐祚の三年後永祿三年に主として毛利元就の献金によつて即位の式を行はせられた。一代一度の大事

大葬及即位の式と費用の難

天文九年の飢饉疫病の際天皇の經を寫し、三寶院義隆正をして五日間不動法を行つて供養せられたもので、この後も國民の福利のため諸國の一宮に宸翰の心經を納められ、三河、甲斐、伊豆、周防、肥後等の分は現存して居る。



第十五、後奈良天皇宸翰般若心經 (醍醐三寶院藏)

皇居の荒廢

皇居の修理と諸大名の献金

天皇の人民愛護

皇室の式微と君民の關係

である御即位の禮さへかゝる有様であるから、皇居の如きも荒るゝに任せ、三條橋から内侍所の燈の光が見え、紫宸殿前には茶を賣る店が開かれたと傳へられ、神泉苑の如きも、東寺の僧のために一時耕地とせられた程であつた。皇居の修理の如きも、天文の頃になり大内義隆・毛利元就・織田信秀等の献納によつて時々行はせられた。これ等の諸大名の献金は、有志の公卿・僧侶等がその間に立つて斡旋したのであつて、甘露寺親長・三條西實隆・山科言繼等はその著しいものである。天皇はかゝる御式微にも拘らず、常に人民のために叡慮を惱ませられ、後花園天皇は凶荒のため餓死するものさへ少からぬに將軍義政が奢侈に耽るのを御覽せられ、「殘民爭採首陽薇、處々閉_レ盧鎖_ニ竹扉_一、詩興吟酸春二月、滿城紅綠爲_レ誰肥」の御製の詩を賜つてこれを戒められ、後柏原天皇は、「あぢきなき世を思ふゆへの言の葉は及ばぬものと同じ心を」、又、「治めしる我世如何にと浪風の八十島かけて行く心哉」と詠じ給ひ、後奈良天皇は、疫癘の流行を憂ひさせられ、紺紙金泥の般若心經を書寫して供養し給ひ、その奥書の中に「朕爲_ニ民之父母_一、德不能_レ覆、甚自痛焉」と記された等、その一例に過ぎない。斯様に御窮迫の際にも、天皇は猶民の上を第一に思はせられ、人民亦朝廷の式微にも拘らず、これに忠誠を致すことは、我が國體の尊嚴の然らしむる所であつて、やがて信長が皇室を奉戴して統一の業をなす氣運は、既にこの間に起りつゝあつたのである。

軍事上の
變革
武器

足輕
軍制
城郭

莊園制度
の崩壊

知行制度
の發生

元弘以來六十年の全國に於ける南北抗争の後も、猶騷亂が絶えなかつた上、應仁の亂後百年の間は戰國が續いたため、この間の經驗から生じた戰法の變化の著しいは當然である。從來主として用ゐられた刀・薙刀が槍となり、長槍が重ぜられ、弓矢が減じて、この頃傳つた鐵砲が忽ち普及して行くことになる。これと共に、前の様に大鎧をつけた騎士を戰鬪力の中心とせず、槍・鐵砲を持ち、輕い具足に身を固めた足輕が兵力の中心となつた。戰術も個人的武勇による一騎討よりも、節制ある集團的行動を重んずる様になり、寄子・寄親・組頭・物頭等の制度が起つて來た。防備も天險の利用よりも、人工的築城を主とすることとなり、大規模な城郭の出現となり、更にそれが山上から平地に下ることになつて行く。これ等の變革は戰國から初まり、次の織田・豊臣時代に亘つて完成を見るのである。これと共に土地の制度も久しい戰亂の結果一變することとなり、莊園制度の崩壊を見るに至つた。莊園は土地國有制の崩壊に起源し、平安朝を経て鎌倉時代に至つて完成した土地私有制であるが、これは一つの土地に對し、本家・領主又は領家・地頭・莊司等、數多の権利者があつて、これが利益を分配するのである。斯様な複雑な制度は、戰亂の世には實行が不可能で、誰しも自己の権利の充全安固を望むのは自然の勢であるため、漸く一圓領主の傾向を生じ、莊園制度は全く崩壊して終つた。これに代つて新に起つたのは知行制度であつて、領主はその土地に對して全權を占めることとなる。これが

大名と城
下町

國法

戰國時代
は近世の
胎生期

近世の大名である。

土地制度の變革も、戰法の變化も、共に激烈な生存競争のための、強大な勢力の欲求から來たものである。されば各自己の領地を基礎にした富國強兵に努め、從來星のやうに散在してゐた武士は、皆大名の城下に集めて訓練せられ、人民に對してはその業務を保護し、鑛山・商業等にも特に注意するやうになつた。而して總て大名の城下がこれ等政治經濟の中心となり、城下都市の成立を見、城郭は單に防守地でなく、領内の社會文化の中心となつて來るのである。法律としても諸大名の國法が發達し、伊達氏の塵芥集、武田氏の信玄家法、大内氏の壁書、長曾我部氏の百箇條等は殊に著名である。かくして百年に亘つて國民生活を振蕩した戰國の騷亂は、無意義な精力の消耗ではなくて、この間に舊勢力・舊制度は全く破壊し盡くし、來るべき新社會の基礎をなす多くの革新發達を見たから、謂はば近世の新日本を産出すべき母體の生みの惱みに外ならなかつたのである。

第三十五章 織田氏の覇業

統一的傾向と覇業

天文の末から永祿・元龜・天正の間は、解體分裂の極に達した我が國家の漸く統一に進んだ時期であつた。而して地方的統一に成功した群雄は、何れも更に進んで京都へ出て、天子將軍を奉じて覇を天下に稱せんと希望を抱くに至つた。上杉謙信も武田信玄もその最熱心家で、殊に謙信の如きは再度天文二十二年上洛して天皇・將軍に謁し、領國を捨て、も朝廷のために盡くさんことを誓つた程であつたが、その實行に第一に着手したのは今川義元であり、遂にこれを實現したのは織田信長であつた。

信長の少壯時代

信長は十六歳で父信秀の後を承けたが、風儀禮節を顧みず、傍若無人の惡態は世人の賤視を買ひ、豫て信秀に壓倒されて居つた一族の多くは、この機會に乗じて彼を倒さんとし、彼の傅役平手政秀の如きは、自盡して彼の行を改めんことを諫めた程であつた。信長も政秀の死を悲しんでその菩提のため政秀寺名古屋市中區矢場町を建て、その行をも慎むに至つた。彼は武藝には早くから特に意を用ひ、三間柄の長槍を獎勵して居た程で、國內の彼に離叛したものは着々これを除くに努め、清洲の織田氏が斯波義元を殺したのを機會に、これを滅したのを初め、末森城に居つた弟信行の服しないのを誘殺し、岩倉の織田氏をも滅ぼして、十年間に一族を併し、國內の大部分を従へた。

信長の尾張統一

今川義元の覇圖

桶狭間役

桶狭間役の意義

今川義元は家格の尊貴と國力の強盛とを恃んで、早くから旗を京都に進めんと志して居たが、織田氏の亂れた間に三河の織田方を驅逐して、尾張に迄勢力を及ぼすに至つた。今川氏の知多郡鳴海愛知郡の城を占むるに對して、信長は以上知多郡鷲津・丸根以上愛知郡丹下・善照寺以上愛知郡等に砦を設けて之に對抗した。かくして義元は武田・北條兩氏と婚を通じて義元の子を信長に、信長の子を義元の子に嫁した。同盟を結び、後顧の憂を除き、永祿三年五月駿・遠・參の兵二萬五千を率ゐて尾張に討ち入つた。信長は清洲にあつて、十八日義元侵入の報に接し、老臣の防守説を斥け、信秀の遺誠により邀撃に決した。十九日拂曉敵兵の丸根鷲津に迫るを聞き、「敦盛の舞を舞ひ、人間五十年、下天の内をくらぶれば夢幻の如く也、一度生を得て、滅せぬ者の有るべきかとの一節を謠ひ」信長直ちに用意を命じて、單騎鞭を擧げた。彼は途中熱田神宮に戦勝を祈り、鳴海方面に兵を出して敵兵を牽制し、自ら山路を迂回して、風雨に乘じ、不意に義元を桶狭間愛知郡の本陣に迫撃した。今川勢はこの奇襲に潰亂し、義元亦討たれたため、四十全軍敗退して終つた。この戦は僅か一日を出でなかつたけれども、その意義は極めて大で、このため東海の形勢は全く一變した。今川氏は足利氏の一門であるのみならず、京紳と婚を通じ、公家の寄住するものも多く、義元の如きも鐵漿をつけ、陣中も塗輿に乗る程公家化して居つた。さればこれにより京都化せる舊勢力の今川氏が衰へて、新興の信長が天下布武の基を開くに至つたのである。

信長と家康との同盟

る。且從來今川氏に従つて居つた松平家康は、この時も丸根を陥れて大高に入つたが、義元の死を確めて、岡崎に歸り、義元の子氏眞の爲すなきを見て、信長と結ぶに至つたのである。これは家康にとつても運命の一轉機であつたが、これより信長の死ぬまで二十餘年の間互に緩急相救ひ、その誼を續けたのは、利害の一致したためにもせよ、當時に於てその例のない美談たるを失はぬ。信長はこれより東顧の憂がなく、専ら西方に發展して京都に入るを得たのは、この同盟に負ふ所が頗る多かつた。

信長の美濃略

信長は齋藤道三の女を娶つて居つたが、道三は晩年長子義龍と不和を來たし、家督を廢せんとした結果、父子の戦となつて敗死した^{六十}上、信長が京都遊覽の際義龍が刺客を送つたため、信長は桶狭間役後美濃經略にかゝつた。其後義龍が死んで、暗弱な龍興が立つたから、愈城を小牧山に進めると共に、近江の淺井長政に妹を、信玄の子の勝頼に養女を嫁して、周圍の故障を除き、美濃三人衆の内應に乗じ、永祿十年八月急に稻葉山城を襲ひ、火を城下に放つて敵を狼狽させ、一舉に城を陥れた。かくて美濃がその手に歸すると共に、稻葉山を居城として城下を岐阜と名づけた。

正親町天皇の勅命降下

この事が京都に聞えたから、正親町天皇は立入頼隆を勅使として彼の許に遣され、「今度國々屬本意一由、武勇之長上、天道感應、古今無雙之名將、彌可被乘勝之條爲勿論、就中兩國御料所、且

京都の狀態

被目錄之條、嚴重被申付者可爲神妙旨^{立入}の綸旨を傳へさせられた。これが父の尊王の志を受けた彼を感激せしめ、その上洛を力づけたことは云ふまでもない。

足利義昭の託

この間京都では三好長慶の死後、^{永祿七年}養子義繼が幼少のため、三好三人衆^{三好長逸、同政、康、岩盛、友通}が之を輔佐し、松永久秀と共に權を弄して遂に將軍義輝を室町の邸に襲つて弑し^{八年}阿波から、義澄の孫義榮^{とらひて}の義維^{の子}を迎へて立てた。然るに程なくして三人衆と久秀との間に不和を生じ、義繼亦久秀に與して互に攻伐し、ために東大寺大佛殿も再度の炎上を見るに至つた。義輝の弑せられた際、その弟義昭^{一乘院門跡、覺慶}は逃れて近江若狹に走り、後越前の朝倉義景と本願寺一揆との和を周旋し、^{本願寺教如の女義景に嫁す}義景の力

信長の人京

により京都を恢復せんと企て、居たが、永祿十一年七月信長に迎へられて美濃に赴いた。かくて信長は愈勅命を奉じ、義昭を擁して入京せんとし、先づ北伊勢を平げ、次いで近江の六角義賢^{入道}を説いたが應じないため、これも討つて近江を従へ、九月二十六日遂に京都に入つた。このため三好義繼・

義昭の將軍補任

松永久秀先づ降り、義榮は病死し、三人衆等も敗れて、或は降り、或は阿波に奔つた。かくて義昭は將軍になり、信長を副將軍か管領に任せんとしたが辭して受けなため、信長を父と稱して、再興の恩を謝した。信長は村井貞勝・朝山日乗を奉行として皇居の造營に當たらしめ、朝廷の御領地を横領せるものに還納を命じ、又京都の市民に五百二十石の米を貸し、これより三割の利米を徴して、こ

信長の尊皇

關所の廢止

れを朝廷に獻ずる等月十三石餘に達したさいふ尊王の實を擧げると共に、新に二條に莊麗な城を築いて義昭を入れ、幕府の面目をも改めしめた。又當時至る所に關所を設けて、通行人から税を取るを常として居たか、彼は之を廢して交通の便を計り、統一の妨を除いた。この後その勢力の擴まると共に、益この主義を擴充して行つた。

信長の勢力發展

彼が京都に入つて後、着々政績を擧げると共に、その勢力も畿内及び近國を風靡し、但馬の山名氏も降り、南伊勢の北畠氏も彼の二子信雄に領地を讓るに至つたが、之と共にその敵も又増して來て、東征西伐に席の暖まる暇もなく、無盡の精力を縦横に發揮して活躍を續けることゝなる。

義昭の陰謀

信長反對派の第一は意外にも彼の擁立した將軍義昭であつた。これ信長が幕府政治再興に望を囑せず、自ら皇室を擁して天下に號令せんとしたるに對し、義昭が虚位に甘ぜず、盛に内書を諸大名に發して、信長を抑へんとしたためであつた。兩者の不和は永祿十二年の末に、信長の突然の歸城によつて表面に現れ、翌元龜元年正月義昭が信長への政權委任を明にし、從來の命令を破毀し、今後は内書には信長の添狀をすることを約して和睦を見たが、この後も義昭の陰謀は止まず、依然として諸大名を操縦して信長反對の同盟を結ばしむることに努めて居た。これ源平時代に於ける後白河法皇と同じく、實力なくして權威を收めんとするものの常套手段である。

姉川役

三好三黨及び本願寺の策應

叡山の燒討

越前の朝倉氏は本來織田氏と相納れない上に、義昭の名によつて上洛を促しても應じないため、信長は元龜元年四月家康と共に越前に入つて義昭を討つたが、この際近江の淺井長政は彼に叛き、六角義賢亦兵を起して義昭に應じたから、信長は腹背に敵を受けることとなり、急に退陣した。その後兵を整へて先づ六角氏を破り、次いで六月二十八日姉川に於て家康と共に奮闘して、淺井・朝倉兩氏の兵を撃破した。この間に四國の三好三黨は攝津に來つて野田・福島西成郡に城を築き、これを根據として京都侵入を企てたから、信長は九月これを攻めて陥れようとした際、更に石山本願寺の襲撃を受け、本願寺は信長から屢矢錢を課された上、石山の地の要衝を見て、信長がその地の讓與を請うたのを謝絶して居るから、野田・福島西成郡の陥落の後には兵を受くべきを見て、先んじて之を襲つたのである。然るに淺井・朝倉兩氏は之に乗じて再び起り、京都を占領せんとしたから、信長は忽ち取つて返してこれに當たり、その叡山に據るに及んで、又叡山を圍んだ。この時本願寺門徒の近江十ヶ寺淺井、伊香、坂田三郡及び尾張長島の蜂起して、信長に抗するあり、四面皆敵となつたと共に、淺井・朝倉兩氏も糧食に窮したため、義昭の調停によつて一時和がなつた。然しこの和は兩方共誠意がないため、程なくして破れ、翌二年信長は近江を荒して淺井氏を牽制して置いて、不意に叡山を燒討にし、堂塔伽藍を燒き拂ひ、僧俗男女千六百餘人を斬殺した。このためにさしも平安朝以來暴威を逞しうした山門も根抵から

覆され舊佛敎の權威を失墜せしめ、僧侶の俗權を抑へて政權に服せしむる上に大に有効であつた。これは當時の人々を驚心駭目せしめたのみならず、後世からも批難の少くないことであるが、山門の古來の横暴と、當時の「僧衆は大旨坂本に下て亂行不法無限」多聞院日記と謂はれた墮落とを考へれば、自業自得とも言へよう。

信長が畿内で働いてゐる間、東方の障壁となつたのは家康である。家康は今川氏眞の關愚に乘じ、着々三河の統一に努めたが、永祿六年には彼の領土に本願寺門徒の一揆が起り、一族家臣のこれに應ずるもの多かつたに拘らず、半年の後これを平定してより、程なくして三河一國を領するに至つた。家康の成功を可能ならしめたのは氏眞の無能と共に、東國に於て武田・北條・上杉の三氏が互に争つて、これを顧る暇のなかつたためでもあつた。謙信は剛勇比なく、獅子奮迅の猛勢は朱印獅子向ふ所靡かざるはなく、流石の信玄さへ永祿四年の川中島の戦には、傷を負ふて敗退した程であつたが、策略に拙で、戦勝の効果を十分に収めることが出来なかつた。信玄は常に用意周到な畫策を以て、巧に諸方面と策應して、その向ふ所龍朱印の風雲を起すが如く、大變動を捲き起し、氏康は老巧沈着虎朱印の嶋によるが如く、巧に敵の銳鋒を避け、その虚に乗じて勢を張るに努め、謙信・信玄の小田原に迫つた際も、固く守つて出でず、彼等をして退却を餘儀ならしめた。而して氏康は傳統的政策たる關

家康の三河統一

武田北條上杉三氏の對抗

信玄の駿河經略

東統一に努め、信玄は西上して天下に覇を稱さんとし、謙信はその兩者を目的として、上杉・武田は信州で、上杉・北條は上野・武藏で、武田・北條は駿河・上野等で互に争奪戦を演じた。天文の末には武田・北條兩氏は今川氏と共に互に婚を通じ、同盟を結んで、上杉・織田兩氏に對したが、義元の死後信玄は信長と結んだのみならず、更に永祿十一年には我長子義信義元の弟を殺して今川氏と絶ち、その領土の併吞を策し、家康に大井川以西の經略を勧め、北條氏に富士川以東を譲つて、共に今川氏を滅ぼさんとした。家康は之に應じて遠江に侵入し、信玄は駿河に討ち入り、氏眞を遠州掛川に奔らしめたが北條氏康は却つて氏眞を助けて信玄と戦ひ、家康亦信玄が兵を遠江に入れたのを怒り、遠州割讓の條件で氏眞と和し、氏康と共に駿河恢復に努めることとなつたため、信玄も止むなく歸國し、駿河は多く北條氏の支配に歸した。茲に於て信玄は盛に關東方面に兵を出して小田原城下にまで迫り、北條氏の駿河の守兵を徹せしめて後、駿河經略を完うした。この間北條氏は信玄と絶つたと共に謙信と同盟せんとしたが、謙信は上野の返還を見た上出兵せんとし、氏康は出兵の後返さんとして交渉進まず、その間に元龜二年氏康五十歳が死んだため、その子氏政は遂に再び信玄と結び、富士川を境として和睦した。

信玄の西上策

信玄は氏政との同盟成立と共に、多年の宿望たる西上を決行せんとし、得意の外交術を以て周密な

信長家康
と謙信の
同盟
三方原役
信玄の死

計畫をした。上杉謙信に對しては、加賀の本願寺一揆及び越中の椎名氏等をして兵を挙げしめた外、北條氏及び常陸の佐竹氏と結んで關東方面に備へしめ、更に信州の木曾氏をして飛驒を侵さしめて、全くその活動を封じた。北條氏とは同盟した上、その變改を防ぐため援兵を出さしめ、且安房の里見氏と結んで萬一に備へた。信長に對しては將軍義昭と氣脈を通じて石山本願寺・松永・三好一黨・淺井・朝倉兩氏と相應じ、更に叡山の僧侶を優遇し、三井寺をも説いて味方とし、猶美濃に於ける土岐氏の殘黨及び郡上の遠藤氏等にも兵を起さしめんとした。之に對して家康は元龜元年濱松に居城を移し、上杉氏と同盟したのみならず、信長亦その子を謙信の養子とする約束で同盟して信玄に對抗した。元龜三年十月信玄は愈、大兵を率ゐて西上の途に上り、部將をして美濃・三河に向はしめて織田・徳川方を牽制し、自ら信濃から遠江に入り、直に三河に進まんとした。信長は朝倉氏と近江にて對陣中、これを聞いて岐阜へ歸つたが、信玄の外交網に牽制せられて僅の援兵約三千人を家康に送つたに過ぎなかつた。家康は衆寡敵せざるため信玄約二萬餘人、家康約一萬餘人、諸將の反對したにも拘らず、十二月二十二日信玄を三方原に邀へ撃つたが、大敗して濱松城に退いた。信長・信玄の間は表面上猶和親を續けてゐたが、三方原戦後初めて敵對することとなり、それと共に將軍義昭も愈、兵を擧げて信玄に應じ、益、信長の地位を苦しめた。然るに信玄はそれより三河に入り、野田城設樂郡千秋村根古屋を陥れたが、不幸にしてその間に病を

信玄の人
物

足利氏の
滅亡

得、翌天正元年四月甲斐に歸らんとして信州駒場で卒した五十三歳ため、信長をして危機を脱せしめた。信玄はその素養も禪學・書畫・詩歌に達し、當時武將中群を抜いて居り、特に民政に注意し、金鑛を開き、産業を獎勵して、國を富まし、民心を得たのみならず、牢人を優遇して他國の事情に通じ、巧に外交を以て諸將を利用した等、他人の及び難い所であつたが、長所は同時に短所で、餘に策を用ゐる萬全を期したため、愈、大事を成さんとする時には既に「襟懷徹骨髓」由「苦肺肝」病忽萌、腹心不_レ安切也御宿監物書狀で、中道にして倒るゝに至つた。

信玄の一死は信長をして霖雨去つて新晴を見るの思あらしめた。これより彼の統一事業は着々として進捗したが、その第一は義昭の放逐であつた。神速嚴烈を以て知られてゐた信長も、義昭に對しては、滿を持しても猶發せず、以て人心を失はざらんと努めた。義昭は元龜元年正月政權を信長に譲つた後も、依然として盛に内書を發して、信長を抑へるために、東西の諸豪を誘つて上京せしめんとした。されば元龜三年に信長は所謂諫書を送つて、義昭が參内を怠り、諸家に内書を出し、欲得を主とする等十七ヶ條の非違を擧げて、天下にその惡御所たるを知らしめたが、天正元年二月愈、義昭が兵を擧げて信玄に應ずるに及び、四月遂に二條城を圍み、勅命によつて一時和睦したが、更に七月義昭再び槇島城久世郡槇島村によるや、直ちにこれを圍み、降を納れて之を河内に放つた。茲に於て足利幕府は

淺井朝倉
兩氏の滅亡

十五代二百三十餘年建武二年尊氏の叛いて全く滅亡し、名實共に信長の覇業が成立することとなつた。 信長はこの機に乗じ、多年彼の本據たる尾濃と京都との連絡を脅した淺井・朝倉二氏の結末をつけんとし、翌八月近江に入り、淺井氏の急を救はんとして出馬した朝倉義景を破つて、越前に迫つた。義景は一乗谷城を捨て、大野郡に奔つたが、一族に迫られて自殺した。四十 信長は越前を平定すると共に、直に淺井氏の近江小谷城を圍んで、久政・長政父子をも自殺せしめた。久政六十一歳 長政二十九歳 河内若江城にあつた三好義繼亦この年十一月信長に攻められて自殺した。

武田勝頼
の活動

武田氏は信玄の死後その子勝頼を秘して敵軍の乗ずるを避け、父の遺志を繼いで覇圖を成さんとし、天正二年美濃の明智城を降し、遠江の高天神城を陥れ、共に信長の赴援を果させなかつた。更に三年大賀彌三郎の内應を利用して岡崎城を奪はんとしたが、彌三郎が逆謀暴露して誅せられたため、轉じて長篠城を圍んだ。長篠は甲信から遠參を経て上國に通ずる要衝で、大野・瀧の兩川城壁の下に合流して絶壁を成してゐる。城主奥平信昌初貞孤城を死守すること十餘日に及んだが、その間に信長家康は大兵を以て後詰に來た。信玄流の萬全策を奉ずる宿將達は、衆寡敵し難いを説いて、勝頼約一萬 五千 信長 約三萬 八千 退陣を勧めたが、勇將勝頼は之に従はず、五月二十一日城外諏訪原に於て邀へ撃つに決した。信長は岸の深い小川に沿うて柵を構へ、精選した鐵砲隊三千をこの中に配し、武田方の近づくのを待

長篠役

越前の本願寺一揆
征伐

つて射撃せしめたから、常勝を誇つた甲斐の猛將勇士も多くこれに倒され、勝頼は大敗して身を以て僅に逃れ去つた。これは鐵砲の威力の眞に發揮された初めて、その戦法は全く信長の創意に出づる所である。この時甲軍の損害約二萬で、精銳殆盡き、武田氏の致命傷となつた。

然るにこの間に越前は本願寺門徒一揆の奪ふ所となつたから、この年八月信長は大舉して海陸より攻め立て、斬獲三・四萬に及び、府中の町は死骸で明所もない程であつた。かくて越前を恢復し、加賀の一部を併せ、北莊後福井に築城して、柴田勝家を北陸の鎮として此地に封じた。

長島門徒
退治

これ先立つて天正二年には長島の本願寺門徒をも掃蕩した。長島當時尾張川内郡 今の伊勢桑名郡は木曾河口の三角洲で、こゝに本願寺の河内御堂勝頼の妹婿があり、門徒はこの要害に據つて淺井・朝倉・武田等と相應じ、常に信長の本據を脅し、屢、信長の攻撃を無効ならしめた。されば彼は六月大兵を以て水陸よりこれを包圍し、三月に亘つて攻め立て、降るものも許さず、老若男女の別なく三・四萬人を屠殺して、全滅せしめた。

安土築城

かくて信長の勢力は今や畿内から東海・東山・北陸の三道十數ヶ國に亘り、中部日本を横斷するに至つたから、彼はこの領土を支配すると共に、天子を奉じて四方の豪族に當たるため、天正四年新に近江安土に城を築いて移つた。安土を選んだのは京都に近く、東海・東山兩道の要衝であり、且琵琶湖

信長の任
大臣

を利用して北陸を制するに便なるためであらう。城は丘陵に據つて湖水に臨み、規模壯大、七重の天守を初め殿閣土邸壯觀を極め、下には城下町を設けてその繁榮を計つた。この間勢力の増進と共に朝廷の優遇も加はり、天正四年には内大臣に任じ、翌年には右大臣に進んだ。これより織田右府といふ。

反信長黨
の増加

石山本願
寺の勢力

信長本願
寺の構和

石山合戦

然し勢力の擴大は同時に新しい敵の發生とならざるを得ない。即宿敵たる武田氏及び本願寺の外、新に北陸の上杉・中國の毛利兩氏も彼の敵となり、是等は互に連絡して彼に對抗し、放浪中の義昭亦反信長派も同盟せしむるに努めた。而して信長がこの中最大敵であり、且その土地を切望して居つた石山本願寺を第一に陥れんとしたのは自然である。石山は證如光教蓮如の孫が山科本願寺を移してから、天然の要害に方八町の寺域を占め、門徒の信仰とこれに伴ふ募財によつて畿内の大勢力であつた。元龜元年顯如光佐、證如の子が信長と事を構へてから、各地の門徒と計を通じて常に信長を苦しめた。本願寺を敵としたことは信長の統一事業を遅からしめ、遂に未完成に終らしめた主なる原因の一であつた。信長は先に長島越前の一揆を討つてその羽翼を削いだから、愈々天正四年自ら奮戦して本願寺に迫つたが陥らず、その間に毛利氏の援兵が織田氏の水軍を破つて糧を本願寺へ入れた。これに勢を得て翌五年には紀州雜賀・根來の一揆蜂起して石山に應じたため、之を討つて降し、更に本願寺攻撃を續けたが猶陥らず、遂に八年三月勅命を請うて構和を計つた。本願寺も味方の大名は凋落し、各地の門徒の勢力

信長謙信
の衝突

も衰へた際だから、勅命に従つて信長と和し、宗門の安全を計るを得策としてこれに應じ、顯如は四月紀州雜賀に去り、これに反對して石山を固守せんとした教如光壽、顯如の子も、不可能を悟つて、七月紀州鷲森に退いた。石山の退去は平安朝以來の軍事的勢力としての寺院の最後であつたと共に、この際顯如父子の意見の相違は、やがて本願寺の東西に分裂する端緒であつた。

信玄を共同の敵として相結んだ信長と謙信の間は、信玄死し武田氏衰へた上、信長が越前加賀に侵入するに至つて、遂に疎隔を來たさざるを得なくなつた。加ふるにこの間武田勝頼は長篠役後信長に對するため北條氏と同盟し、次いで謙信に接近することとなり、足利義昭・本願寺・毛利氏等も盛に彼と同盟して信長を討たんことを勧めたから、天正四年遂に反信長同盟に加はり、先づ能登の畠山氏の内訌に乗じ、討つてこれを従へ、更に加賀の大部をも合せ、大舉西上の勢を示した。このため畿内に於ても松永久秀の如きは信長に叛き、大和の志貴山に據つて之に應ぜんとして滅されたが、謙信はこの間に關東の諸族の多く北條氏に歸したのを見、六年三月先づ關東の統一を全うせんとして大兵を催し、その出發間際になつて春日山城で俄に病没した。四十歳彼の剛勇は信玄の外交と共に、當代にその比を見ない所であつたが、彼が西上と關東統一の兩兎を追つたことは、徒らに南征北伐に奔馳するに止まつて、共にその功を成さしめなかつた一因であつた。彼の死は信長に多大な辛を與へたのみなら

謙信の死

上杉氏の
内訌

織田勢の
北國略

上杉景勝
の覺悟

甲州征伐

ず、死後の内訌によつて、更にその幸を倍加した。彼は一生娶らず、一族長尾政景姉の夫の子景勝及び北條氏康の子景虎初氏を養子としたが、生前後嗣を決しなかつたため、死後兩人の間に相續争を生じた。景虎は兄氏政及び武田勝頼の援兵を得て優勢であつたが、景勝が上野を割き、金一萬兩を贈つて勝頼の援助を得たため、却つて景虎の敗死に終つた。されば信長はこれに乗じて柴田勝家・佐々成政・前田利家等をして加賀・能登・越中を略せしめ、十年には進んで越後に迫らんとするに至つた。このため上杉氏は危殆に陥り、景勝は「景勝好時代出生、携弓箭、六十餘州以越後一國一相支、遂一戰一可令滅亡一事、死後思出、景勝幅に者甚不相應候歟、若又出萬死於全一生者、日域無双之可爲英雄一歟、死生之面目歡悅、天下之譽、人々其羨可爲巨多一歟」と悲壯な覺悟をせざるを得ないこととなつた。

上杉氏の内訌は、勝頼をして景勝に與して北條氏政と絶たしめ、氏政は信長・家康と結ぶに至つたから、信長はこの機會に愈、甲州征伐を行はんとし、天正十年二月木曾義昌の歟を通じて援を求めたのを機として、信忠をして信濃口より進撃せしめ、家康をして駿河口より、氏政をして關東口より共に甲州に向はしめた。勝頼は信玄の死後も常に積極的に活動したが、その結果は却て武力の鎖磨と人心の離反を來たしたに過ぎず、信忠・家康等の來るや、一族諸將就うて投降したから、勝頼は新府の城

武田氏の
滅亡

毛利氏の
發展

元就の人
物

を焼いて小山田信茂の岩殿山都留郡 賑岡村に據らんとしたが、信茂亦叛いたため、三月二十一日天目山麓田野東八代郡 野村 景徳院に於て、織田氏の兵と力闘した後、妻子と共に自殺した。三十七歳、妻北條氏十九歳、子信勝十六歳武田氏の滅亡は信長をして「如此三十日四十日に屬一偏之事、我ながら驚入許に候」武家と言はしめた程脆かつた。かくして新羅三郎以來二十八世に及んだ武田氏も遂に滅び、信長は戦功諸將にその領土を分ち、瀧川一益には上野を與へて關東のことを總べしめた。

毛利元就は大内氏に代つてから、尼子氏と争ひ、攻戦連年に亘つたが、永祿九年遂に尼子義久を降して、尼子氏を滅した。これより河野氏を助けて伊豫に兵を入れ、又九州の龍造寺隆信及び立花・秋月諸氏と結んで大友氏に對抗したが、これに乗じ尼子の一族勝久は山中幸盛に擁せられて兵を起し、大内輝弘義隆の弟亦山口に討ち入つた。元就は九州の兵を以て輝弘を殲し、次いで勝久を討つたが、未だ平定を見ずして元龜二年に病歿した。七十歳元就が安藝の小領主から起つて、一代の間に山陰・山陽十ヶ國を占むるやうになつたのは、當代に於ても殆その比を見ない所で、これは彼が大内氏の滅亡に鑑み、華を捨て、實を取り、よく人心を收攬すると共に、堅忍不拔の耐久力を以つて當つたためである。長子隆元は彼に先だつて死んだにめ、孫輝元が後を繼ぎ、吉川元春・小早川隆景の兩叔が輝元を助けて行つたが、一族一和のよく行はれたのは、元就の訓戒にもよるが、毛利氏の何よりの強味であつ

信長と毛利氏との破裂

た。されば元就の死後程なく勝久敗走して、毛利氏の勢力益々盛んになった。毛利氏と織田氏の間は初は和親を保つたが、信長の勢力が中國に及び、尼子勝久を助けて舊業恢復を企てしめ、山陽の諸氏の信長に應ずるものが増して来たため、毛利氏も不安を感じるやうになり、これに乗じ足利義昭は備後の鞆に來て、本願寺を助けて信長を倒さんことを勧めた。茲に於て毛利氏も、遂に天正四年七月信長の大舉して本願寺を圍んだ際、彼の水軍を破つて兵糧を本願寺に納れ、次いで、上杉・武田の諸氏と同盟して信長に對抗することとなつた。かくて信長が晩年最力を盡くした中國征伐は開始せられた。

播磨の形勢

播磨・美作・備前に於ては浦上氏一時勢力を占めたが、宇喜多直家その下から起つて主家を奪ひ、備前美作に勢力を張り、播磨には別所・赤松・小寺の諸氏が割據して居た。然るに直家は毛利氏と結んで播磨の諸族を壓したため、彼等は信長に援を請うた。信長は天正五年十月羽柴秀吉を播磨に遣して直家を討たしめ、明智光秀を丹波に入らしめて波多野秀治を攻めしめた。秀吉は姫路を根據として程なく播磨を定めたが、直家は翌六年毛利氏の援兵と共に大舉して尼子勝久・山中幸盛の守つた上月城左用郡西庄太平山を圍み、これに乗じて別所長治も毛利氏及び丹波の波多野氏に通じて三木城播磨國加古郡三木村に據つて叛いたため、上月城の救援が不可能となつて陥落を見、攝津の荒木村重亦毛利氏に通じて叛くこと

中國征伐の初期

天正六年の形勢

鳥取籠城

となり、形勢逆轉を來たした。信長は荒木村重・別所長治に對しては持久策を取らしめたが、七年の後半期になり、波多野秀治及び荒木村重相次いで平らぎ、宇喜多直家亦毛利氏を去つて織田氏に應じたから、形勢は織田氏に有利となり、更に八年に入つては、三木城も糧食盡きて遂に陥り、丹後・但馬も從ひ、大坂本願寺も退去して、信長の西方經略は大に進展を見た。因幡鳥取城の山名豊國も亦この年秀吉に降つたが、その老臣等は主を追ひ出して毛利氏に通じ、吉川經家を奉じて秀吉に抗し、秀吉の長圍を受けて糧食盡きた後も猶固守して九年十月に及んだ。落城の際「道の傍に大釜をすゑ、粥を煮させて下城の者に喰せられ候、多食仕候者は皆相果候」といへるのも、その飢餓の甚しかつたことが察せられる。

高松城の水攻

かくて秀吉は愈々天正十年には進んで備中に入り、清水宗治の守つて居た高松城賀陽郡高松村を圍んだ。宗治險に據つて死守したため水攻に決し、梅雨に乘じ、二十六町の長堤間高さ二丈、上幅六、下幅十二間を築き、河水を灌いで、城を水中に没せしめんとした。毛利氏は輝元・元春・隆景等舉つて來援したが、城に近づくを得ず、城中水の浸さない所もはや數尺となり、信長亦大兵を以て來援すると聞えたから、遂に安國寺惠瓊を以て秀吉に和を求めた。然るにその和の未成らざる中に本能寺の變報が秀吉の許に達した。

長曾我部氏の發展

この頃土佐に起つた長曾我部元親は四國の統一に努め、明智光秀を通じて信長とも和親を續けてゐ

四國征伐の計畫

信長の上洛

明智光秀の叛

本能寺の變

信長の成した功因尾張の地位

だが、信長は彼の四國を掩有するのを悦ばない上、三好康長笑岩、長亦秀吉の弟、長亦秀吉によつて秀次は康長の養子阿波の舊領を恢復せんことを請うたから、元親に土佐一國と阿波二郡以外の返上を命じたが、元親が應じないため天正十年先づ康長をして阿波に侵入せしめ、次いで三男信孝をして丹羽長秀・堀秀政等を率ゐて四國に向はしめた。この際秀吉から毛利氏の大舉出兵を報じて來援の請に接し、明智光秀・池田信輝・細川忠興・中川清秀・筒井順慶等に出征準備を命じ、自ら信忠と共に僅の小姓達を連れて上洛し、これ等諸將を率ゐて中國に發向せんとした。

然るにこの時西征の命を受けた一人である明智光秀は、日來屢、信長の折檻に逢ひ、不快と不安とを感じてゐたが、今や信長父子の何等の武備もなく京都に館するを見て、急に叛意を生じ、丹波に歸つて約二萬の兵を整へ、直に京都に入つて、六月二日の曉不意に信長父子を襲つた。信長は本能寺六角通油小路東に居り、信忠は妙覺寺二條南室町を出て二條御所に移つたが、共にその兵は數百に過ぎないため、主從奮戦の後何れも自殺した。信長四十九歳、信忠二十八歳このため毛利氏は秀吉と和し、上杉・長曾我部兩氏も織田氏の兵を免れることが出來たのである。

信長が群雄に先んじて京都に入り覇を成し得た一因は、彼が尾張に起つたためであつた。即ち尾張が國土の豊饒であつたことと、その京都との距離が、都の動亂の常に波及する程近くもなく、軍を出

信長の長所

兵制の改革

皇室の尊崇

敬神

交通政策

國割

檢地

貨幣の統一

すに甚しく困難な程遠くもなかつたことは、彼に取つて頗る大な力であつたに相違ない。然しこの境遇を利用し得たのは、彼が早く回轉期に於ける時代の大勢を看取して、極めて獨創的な智略と「御機力強事諸人感じ申也」信長公記と謂はれた如く、寸時も閑居しない絶倫の精力を有ゆる方面に縦横に最有効に發揮したために外ならぬ。兵制の改革の如き早く長槍の獎勵を試みたのみならず、火器に於ても鐵砲隊を第一線に置いてこれを最有効に利用し、長篠これを防ぐには近世的大城郭を築き、安土城又兵船に鐵張を試みる等多聞院日記何れも彼の創始する所である。彼が新兵制を以て四方を平定したのは單に侵略を目的としたのでなく、久しく解體した國家に眞の統一を與へんとしたに外ならぬ。而して我國の統一には皇室を中心とする外なきを解し、入京以來或は御所を修理し、或は御料所を恢復し、丹波の國山國莊如或は資を献じて朝儀を復興する等尊王の大義を實行し、義昭を諫むるも第一に參内を怠るを責めた。伊勢神宮の造營の如きも宮司の請へる費用の三倍を與へ、三千貫猶不足の際は必要に應じて給與せんとて敬神の誠を現して居る。國內に統一を與へるためには、第一に關所通行税を廢し、道路を開き三間幅、兩側に松柳を植ふる橋を架して交通の便を計り、その勢力に歸した土地は殆皆これを家臣の功勞あるものに與へて舊勢力を艾除し、更に土地の制度を統一し、財政の基礎を定むるため、大和國から檢地を初め從來皇朝錢・宋明錢等種類が多く流通の不便を見た貨幣の統一のためには選錢を法令を以て一定し、新

都市の保護
人民の保護

佛教の歴史
の趣旨

人材の養成

信長の短所

に金・銀貨をも鑄造した。都市の保護にも注意し、京都及び安土の如きは地子諸役を免除し、堺の如きも特に政所を置いて支配せしめた。百姓に對しても本年貢以外の賦課を禁じ、裁判の公正を期し、人民の生業に安んずるを得しめ、且忠孝及び學問・技藝に長ずるものは之を優遇して人民の開發に努めた。佛教の如きも、叡山や本願寺の如く、武力を擁して彼に反抗するものに對しては、極力その膺懲に努めたが、これは教權の政權を犯し、統一を害するのを惡んだため、決して佛教そのものを亡ぼさんとしたのではないこと、恰吉利支丹に便宜を與へたのが、その教に歸したためなく、政治的に利用せんとしたためであつたのと同様である。これ等は殆皆豊臣氏・徳川氏によつて繼承せられ、更に發展せられた所であるが、その端を發したのは信長であつた。門閥によらず、人材を拔擢したことも、彼に於て特に著しい所で、彼の起用した諸將が殆皆卒伍から出たので明である。而して彼は人材を見出したのみでなく、極端な信賞必罰主義を以て、「諸人我もと磨きあひし也」（信長傳 長記）と言はれた如く、更にこれを練磨し訓育したのであつた。彼の道樂たる茶湯・馬揃・鷹狩・角力の如きも、一面に於ては部下の品性武藝の訓育方法でもあつたのである。

但性質餘りに峻烈で、敵に對しても屢これを屠殺して居り、部下に對しても僅の罪をも寛恕することが出來ず、折檻・追放・殺戮等を敢てしたことは人心を安んぜしめず、ために國家統一の大業半にし順潮に進むことが出來た。

定 安土山下町中

- 一、當所中爲樂市被仰付之上者、諸座諸役諸公事等悉免許事
 - 一、往還之商人上海道相留之、上下共至當町可寄宿、但於荷物以下之付下者、荷主次第事（中略）
 - 一、分國中德政雖行、當所中免除事
 - 一、他國並他所之族能越當所、有付候者、從先々居住之者同前、雖爲誰々家來、不可有異議、若號給人、臨時課役停止事
 - 一、喧嘩口論並國質所質坤買押賣宿之押借以下一切停止事（中略）
 - 一、博勞之儀國中馬賣買悉於當所、可仕之事
- 右條々若有違背之族者、速可被處嚴科者也

天正五年六月

日

（信長朱印）

第三十六章 西洋交通の開始

西力東漸

ガルト東 Don Henrique
方發展

Zipangu 日本
歐羅巴 Marco Polo

西曆第十五世紀以降の西力東漸の大勢は、之を大にしては古來の亞細亞民族のために屢侵略壓迫を蒙つた歐羅巴人の反動であり、直接にはトルコの勃興によつて歐亞の交通路が遮斷せられたため、東方の貨物を他の道から得んとする經濟上の希望と、回教徒が西歐羅巴に侵入したに對するキリスト教徒の宗教上の反動とのためであつた。この大勢の先頭に立つたのはポルトガル人で、航海王アンリケ親王の獎勵によつて、アフリカの西海岸を南下し、喜望峰を廻つて遂に十五世紀の末に印度に達するに至つた。西曆一四九八年この後ポルトガルは盛に軍艦・商船・宣教師を送つて植民貿易及び布教に努め、十六世紀の末までは東洋に於ける海上の覇權を握つて居たが、本國が人口の少い小國であつたため、廣大な植民地を長く維持する力足らず、却つて本國の衰弊を來たしてイスパニヤに併合せられた上、第十七世紀に入つて急に不振に陥ることとなる。

我國の歐羅巴に知られたのは、世祖忽必烈の頃支那に來て居たマルコ・ポーロの見聞を録した東方紀行が初めてであるが、この書は早く盛に傳寫せられた上、活字の發明以來その開版も續出したため、西曆一四七七年獨逸譯本が開版の初めである。今日版本八十種以上に及ぶ。弘く各國に行はれ、その中にはジバング日本國の轉訛が無盡の黄金を藏し、國

Malacca

ガルト東
方發展

Antonio Galvano
Antonio da Mota
FrancisCo Zeimoto
Antonio Pexoto

王の大宮殿は屋根も窓も床も黄金で出來てゐる等と記されたから、歐羅巴人が海上探險に際し、印度及び支那と共に最主なる目的地の一であつた。加之當時支那・朝鮮の海岸から、遠く南洋方面まで活躍して居た、所謂倭寇は、マラツカ邊にてポルトガル人に邂逅してゐるにも拘らず、永正八年西曆一五二一年彼等が印度に來てから約半世紀の後偶然我が大隅の種子島に漂着するまで、我國を見舞はなかつたことは寧ろ不思議である。天文十二年八月二十五日 西曆一五四三年九月二十三日種子島の西浦へ言語不通の異形の人間を載せた船が着き、船中の支那人五峰王直、倭寇の頭の筆談で彼等が南蠻の買客であることが知れ、赤尾木浦へ廻航せしめて、島主種子島時堯に謁せしめたが、彼等の長を牟良叔舎・喜利志多佗孟太といひ、初めて鐵砲を傳へたとは、南浦文之の鐵砲記の記す所である。南浦文集これはアントニオ・ガルバノの新古發見錄西曆一五五七年著に一五四二年ポルトガル船が暹羅國に居た時、アントニオ・ダ・モータ、フランシスコ・ゼイモート、アントニオ・ベシヨットの三人が脱走し、支那船に乗つて寧波に航行中、強風に吹流されてジバングに漂着したのを、日本に着いた最初とする同一の事實と思はれ、牟良叔舎はフランシスコ喜利志多佗孟太はキリシタン・ダ・モータであらう。唯年次に一年の差のあるのは、これを別個の事件とする説をも生ぜしむる所以であるが、これは暹羅で脱走した時と我國へ着いた時との差を見るべきであらう。

西洋交通
の影響

貿易の發
達

鐵砲の傳
來

かくの如くポルトガル人の最初の渡來は、偶然のことであつたけれども、一度途が開けるに共に、交通は急に盛になり、我國に對し重大な影響を與へることとなつた。即物質上では外國貿易の發達と、それに伴ふ鐵砲の傳來、精神上では吉利支丹教法の弘通がその最著しいものであつた。遠西西洋を謂ふの奇器を滿載した南蠻船の渡來は、鎮西の諸侯の争つて迎へた所で、これより四五五年の後には既にポルトガルの大船が同時に三、四隻薩摩の港に來泊する程の盛況を呈した。初は薩摩の鹿兒島・山川・坊津及び豊後の府内等に入港したが、天文十九年に初めて肥前の平戸へ入つた。既に支那貿易に味を占めて居た領主松浦隆信は、極力入港の繼續を計つたが、不幸にして市民と外人との間に衝突を見た上、大村純忠が元龜元年に長崎を開港して多大の便宜を與へたため、これより毎年此地へ來ることとなつた。當時の貿易船は、季節風を利用し、夏瑪港から來航して冬になつて歸航するので、滞在約半年に及び、その間に各地の商人が集まつて來て貿易に従事するため、深江浦と稱せられた一漁村も、數年にして立派な貿易港と化し、數萬の人口を有するに至つた。南蠻渡來の貨物が、我國民に取つて、總て驚異の的となつたのは勿論であるが、就中當時の社會に直に最著しい影響を與へたのは鐵砲であつた。此物一發、而銀山可摧、鐵壁可穿、姦究之爲仇於人之國者、觸之則立喪其魄南浦文集と言はれた鐵砲の威力は、戰國割據の群雄に取つては第一の誘惑であつたに違ない。種子島時

吉利支丹
の弘通

耶穌會

Companhia de
Jesu
Ignatio Loyola

Francisco Xavier
Yajiro
Anxeij
Anjiro

のザビエル
の渡來
Christão

堯が二挺の鐵砲を購ひ、次いでその製法を傳へてより、忽にして四方に弘まり、十年を出ない中に實戰に用ゐられるに至つた。武田信玄は弘治十二年の川中島の戰に鐵砲を使ひ、織田信長は天正三年の長篠役に鐵砲隊を第一線に置いた程で、この時代の軍事上の變革を助成したのみならず、その頗高價であつたことは自然強族が弱少を壓する最有效な武器として、國家の統一を早くするに效があつた。キリスト教の我國に入つたことは、ポルトガル人の渡來が支那よりも三十年近く遅れたと反對に、支那よりも遙に早く、唐代の景教等は別として然も有意的であつた。この頃歐羅巴のキリスト教界では宗教改革の勢が燎原の火の如く全土を風靡せんとした反動として、極力ローマ法皇を擁護してローマ正教の類勢を回復せんとするコンハニヤ・デ・セス即耶穌會の結社が起つて、盛に活動して居た時であつた。東洋のポルトガルの植民地では、イグナチオ・ロヨラと共にその創立に與つた主なる一人であるフランシスコ・ザビエルが布教に従事して居た。天文十六年薩摩の人ヤジロオ彌次郎か、又アンセイともいふ、安が犯した罪を悔い、マラツカのザビエルの許に奔つて懺悔し、その勸によつて、ゴアの學林に學んで洗禮を受けてパウロ・デ・ヘイの名を得たが、ザビエルは彼の修道の熱心に感じ、且日本人の性質の勝れてゐることを聞いて、遂に日本傳道の大願を發し、天文十八年西曆一五九一年彼と共に薩摩に來つた。これが我國へ吉利支丹後世切支丹とするは徳川綱吉の諱を憚かつたためであるの入つた初めて、開教後千五百余年を経てゐるが、佛教すら佛滅

後千餘年で傳つて居ることを思へば必ずしも遅いとは言へない。殊に耶蘇會の公認せられた後僅九年であることを考へれば寧意外に早いとも言ひ得よう。

ザビエルは領主島津貴久から布教の許を得、ヤジロオの國語に譯してローマ字で書いたキリスト一代記・十戒・宗教問答等を手にして使道に従事したが、やがて僧侶の反對のため布教を禁ぜられたから平戸へ移り、更に山口を経て天文廿年京都に入つた。これは中央政府から許可を得て、全土に布教せんためであつたが、朝廷幕府の衰頹はその效なきを見て山口に歸り、印度總督より日本國王への書翰及び多くの珍奇壯麗な贈物を大内義隆に上つた。それより豊後の府内に來て大友宗麟の優待を受け、この年支那布教を志して我國を去つたが、翌年支那に入らんとして上川島まで來て病没した。七十彼の我國にあつたのは僅に二年三ヶ月に過ぎなかつたが、この間に我が國情を察して我國民の異教徒中最優秀なるを認め、品行方正で學に長じ、困苦に堪へ得る伴天連バトリレを送らば必ず布教の成功すべしことを本部に報じ、それと共に、武力を以て征服することの不可能を説いてイスパニヤ王の野心を戒めて居る等、耶蘇會中の聖者だけに又我國民の知己たるを失はなかつた。

ザビエルの布教
策日本布
教の日本布
策の日本布
天以ザ
連後ビ
の件エル
Cosme de Torres
Jean Fernandez
Padre

初めザビエルに隨つて來たトレー、フェルナンデスの二人はザビエルの去つた後も我國に留り、トレーは布教の總司となり、フェルナンデスは盛に日本語で説教し、共に我國で死ぬまで傳道に努め

Irmão Balthazar Gago
Luiz Froes

九州の吉丹大
利支丹大
名利支丹大

吉丹大
利支丹大
通の吉丹大

Gaspard Vilela
Francisco Cabral
Organtino Soldi

信長の吉丹保
利支丹保

た。その後來朝した伴天連及び伊留滿法兄に、ガゴ、フロエー、ヴィレラ、カブラル、オルガンチノ等があつた。

九州の諸侯は何れも貿易の利を占めんために、吉利支丹の布教を許し、伴天連を優遇したが、中には利用せんとした伴天連に致されて、吉利支丹に歸したのも少くなかつた。大友宗麟、天正六年大受洗村純忠、永祿六年受洗天草鎮尙の如きはその最著しきもので、何れも洗禮を受けて領内の神社佛寺を破壊し、家國の擾亂を惹起するに至つた程で、大村領長崎の如きは吉利支丹の寺領と化して終つた。

永祿二年ヴィレラは京都に出て布教を試み、三好長慶の保護を得、高山飛彈守攝州高槻領主、右近父子・内藤如安丹波龜山城主等を受洗せしめ、次いで上洛したフロエーと共に盛大な儀式で將軍義輝に謁するに至つた。松永久秀の義輝を弑した結果、京都は秩序が亂れた上、久秀は日蓮宗徒の要求を納れて吉利支丹禁止の論旨を奏請したから、伴天連は一時京都を去つたが、信長の上洛によつて彼等は再び有力な保護者を見出すことゝなつた。

信長は義昭の近臣和田惟政高山飛彈守の兄の請を納れ、天皇に奏して永祿十二年四月禁制免除の論旨を見るに至つたのみならず、屢伴天連フロエー、カブラル、オルガンチノ等を引見して優待した。就中オルガンチノは最信任せられたため、當時宇留岸伴天連の名高く、後には我國に渡來した伴天連の祖と誤

Noquioxumi Alessandro Valignani

吉利支丹の隆盛
吉利支丹の教育

Collegio Seminario Don Jerome

大友三侯
有馬三侯
遣使のローマ

Ito do mancio. Cingua do Michael Fara Martino Nataura Julian

Cochin Lisbon Philip II Madrid.

歐羅巴に於ける使節

Sixtus V Grego y XIII
遣使の結果

當時の南蠻人の觀

り傳へられた程であつた。吉利支丹物語 信長の下には朝山日乘日本西教史等にはノキヨスミと訛るの如き熱心なる反對者があつたに拘らず、彼がこれを保護したのは、伴天連の彼の惡める僧侶に對する攻撃に共鳴したためであらうが、主としては彼等から海外の新知識を得んためであつたと思はれる。

かくて天正七年ワリニヤニが日本に於ける布教状態の視察に來た時は、耶蘇會の伴天連二十三人、異留滿三十二人、信徒十五萬に達するの盛況を見たが、ワリニヤニは更に今後の發展のため教育の振興と我國の信徒からローマ法皇への遣使とを策した。教育の機關としては、この時有馬及び府内に新來の伴天連に日本語等を授ける學校コレジヨが出来、有馬及び安土に貴族の子弟に教理や文學等を學ばしめる修業所セミナール、豊後臼杵に耶蘇會士を養成すべき練修所レンシヤを設けた。安土の修業所は信長が敷地及び費用を與へて造らしめたもので、二十五人の貴族の子弟を入學せしめ、オルガチノがこれを支配した。信長が立寄つた時、日向飢肥の城主伊東義益の二男ドム・ゼロームが西洋の樂器を奏したといふ挿話も傳はつてゐる。

ローマ遣使は彼等をして法皇の威嚴に接せしめて今後の布教に利すると共に、耶蘇會の功績を歐羅巴本國に示すためであつた。使は大友宗麟・大村純忠・有馬晴信の三侯から出すこととなり、伊東ドム・マンシヨ義賢、宗麟の従弟・ミゲル清左衛門純忠の甥、晴信の従弟を正使、中浦ジュリアン、原マルチノを副使として

天正十年正月ワリニヤニが退去の際、同伴して長崎から出發した。彼等は皆十代の少年で、途中媽港・コチン・ゴア等で風待のため數ヶ月滞在する間に、更に吉利支丹の教義や語學等を學び、二年半の後天正十二年七月にリズボンの港に着いた。これからマドリットへ行つて、イスパニヤ王フィリップ二世に謁し、翌年ローマに入つて法皇グレゴリー十三世を拜したが、至る所て異常な大歓迎を受け、フィリップ二世の如きも自ら彼等の宿所を訪はれ、ローマの入城式には文武官・僧侶及び各國使臣等が儀仗兵と共に彼等に隨つた。法王は程なく亡くなつたため、次いで立たれたシキスタス五世の即位式に列し、ローマの市民權とパトリシアン貴族の稱號を授けられて歸途につき、ベニス・ミラン・ゼノア・マドリッド等を経て、天正十四年歐羅巴を辭し、天正十八年に歸國した。このため歐羅巴では耶蘇會の功績が著しく認められ、法皇は耶蘇會に日本布教の獨占權を與へた外、法王以下の寄附も巨額に上り、ワリニヤニの計畫の一半は十分成功したが、他の一半である我國に於ける効果は豫期に反した。これはこの間に國內の形勢が一變して、秀吉の世となり、遂に吉利支丹を禁止したためである。第三章十九

初め歐羅巴人を見た際、我國民はその人種的差異の著しいのに驚いたこと、と思はれる。或は「其形不類、其語不通、見者以爲奇怪」南浦文集 鐵砲記といひ或は「先づその形を見るに、鼻の高き事、榮螺

吉利支丹
弘通の原
因

吉利支丹
側の原因
第一耶蘇
會の性質

第二宣教
師の人物

殼のいぼのなきを吸付たるに似たり、目の大きな事は目鏡を二つならべたるが如し、眼の中黄也、頭小し、足手の爪長く、背の高さ七尺余ありて、色黒く、鼻赤く、齒は馬の齒より長く、頭の毛鼠色にして、額の上におかべ盃を伏せたる程の月代を削り、物いふこの嘗て聞かず、聲は鼻の鳴くに似たり、諸人舉つて見物道もせきあへず、面體のすざましきこと、荒天狗と申すも、かやうにはあるまじきと人みな申あへり」吉利支丹物語と記された等その一例に過ぎない。かくの如き一見怪物と思はれた伴天連の口から説かれた吉利支丹が如何して急速に弘通し得たであらうか。殊に古來神佛の信仰が一般に行はれて居り、僧侶の勢力が宗教上のみならず、學問上・思想上・及び政治上にも盛であつたことを思へば、益々不思議に感ぜられる。この疑問を解くべき鍵を擧ぐれば、その第一は耶蘇會そのもの、性質であつて、新教運動のため殆覆滅されんとして居たローマ正教の頽勢を挽回せんために起り、正教に纏綿して居た諸の弊害と腐敗とから脱して、清新雄渾な氣魄と潤達剛健な宗風とを以て、新教の侵略を防いだ上、遂に攻守地を易へしむるに至つた程で、かゝる生氣のある宗派が我國の布教に當つたことが成功の一因であつた。第二は宣教師の人物によることで、能く人を化するの徳行と熱誠とを備へ、加ふるに機に應じ變通して人を導く學識活智を有するものでなければ、如何にその教理が優れて居ても大なる効果は望まれないが、當時の伴天連が一死を辭せず、百難を冒して、航路の僅に開けた

第三學藝
教育慈善
事業

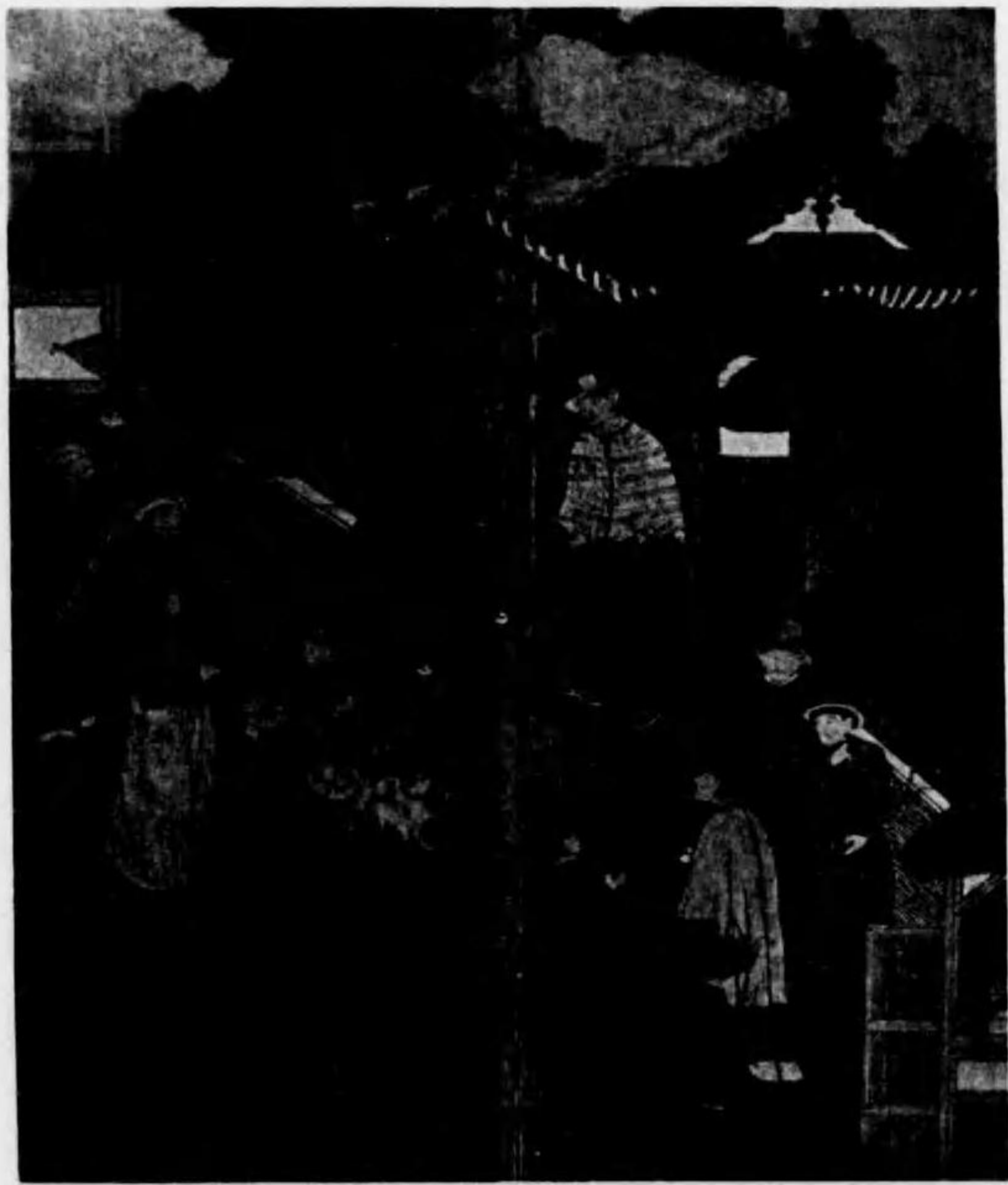
第四商人
の援助

Luiz Alme'da

第五西洋
の文物

ばかりの遠西から渡來し、教のため奮闘して倦まない熱誠と、一般に道義が壞れ、僧侶の亂行の甚しかつた際、道德堅固で清淡な生活を持した事は、共に我國民を動したことが大であつたに違ない。第三は伴天連の學藝及び教育・慈善事業がこれを助けたことで、彼等が天文・地理・物理等自然科學の知識を持つて居たこと、早くから宗教書・文學書の翻譯、辭書・文法の編纂等によつて、我國語を學ぶに努力したこと等も、布教に利益があつたが、學校を設けて教育を起し、病院・保育院等を設けて慈善事業を行つたことも人心を得た一因であつた。ポルトガルの商人で我國で耶蘇會に入つたアルメイダが醫學に通じ、府内で慈善病院及び保育院を設けて癩病・微毒の患者や、捨子を入院せしめた等は著しい話である。第四としてはポルトガル商人の援助であつて、九州の諸侯が外國貿易を渴望する際、伴天連の好遇せらるゝ所へのみ貿易船の入港したことは、如何に不信な大名も貿易船を招くためには少くも表面上伴天連を優待せざるを得ざらしめた。薩摩で布教が禁ぜられると貿易船が平戸へ入港するやうになり、平戸に於て松浦隆信が伴天連に對する約束を果さなかつたため遂に長崎に移つた如き、その著しい例である。盛装せる豪商達が弊衣破帽の師父を神の如く尊信せることもこれを目撃せる邦人に及ぼした影響が少くなかつたであらう。第五は前の二つと關連して、伴天連が齎した歐洲の文物や、海外の新知識が歓迎せられたことで、信長が彼等から海外の新知識を得んとし、將軍義輝が

伴天連の服裝を珍しがつた如き、その一例である。これ等は何れも吉利支丹側の原因であるが我國てもこれを受入れるに都合のよい事情が存して居た。その一は戰國時代であつたことで、社會が解體の極に達し、政治上思想上共に新勢力の侵入する隙間が至る所にあり、因習打破の革新的風潮が盛で、新事物が最歡迎せられた時であり、且打續く戰亂に激しい盛衰興亡を見せつけられて、念々刻々に生滅流轉する現世の姿を儚み、宗教の救済に一道の光明を求むる念を高めた時代に入つて來たためであつた。第二は佛教が久しく宗教のみならず、政治上社會上にも大勢力を振つた結果、その腐敗弊害が甚しくなり、信長の如きこれを抑壓して政治的統制に従はしむるに努めた程であつたから、佛教徒の反抗が比較的微力であつたと共に、一面佛教の抑壓に利用するために保護せられた點もあつたことである。第三は我國の歴史が外來の傳道者を歡迎する傾向のあつたことで、當時の國民信仰たる佛教が既に外來の教であり、古來僧侶が外國へ求法に行くと共に、外國の高僧の化導のために渡來したのも少くなかつたから、國民の化導者が外國から來ることは、我國では少しも不思議なことではなかつた。且伴天連が印度方面から來た上、會堂の設備、説教の用語方法等も、多く佛教に倣つたため、我國民は佛教の一派の如く考へ、親しみ易かつたこと、思はる。神を傳宇須佛又天有主佛、天國を極樂原語のまゝとし云ふ。吉利支丹宗門を吉利支丹佛法、又は傳宇須佛宗と言ひ、會堂にも山口の大道寺、平戸の天門



第十六、南蠻人渡來繪屏風 (帝室御物)

靜岡來迎院の舊藏で家康の寄贈と傳へて居る。茲に載せたは吉利支丹寺院の内外を描いた部分である。

寺の如く佛寺同様の寺號を用ひたのみならず、大内義長の大道寺の免許狀には明に「爲佛法紹隆」と記されて居る。これ等の内外の原因から一時は非常な勢で弘通したのであつた。

第三十七章 豊臣氏の統一

秀吉の出
身

信長の後に秀吉の出たことは我國の幸であつた。秀吉幼名猿、初木下藤吉郎といは織田氏の足輕木下彌右衛門の子に生まれ、後羽柴筑前守と改めた、衛門の子に生まれ、次いで母に従つて同朋筑阿彌に養はれ、身を立てんとて遠江に下り、松下之綱久能城主に奉公したが、永祿の初尾張に歸つて信長に仕へた。美濃征伐の際墨股の砦を守つてから、名を著し、淺井氏攻略に最功があつて、その終はると共に淺井氏の舊領に封ぜられて長濱に鎮じた。毛利氏に對しては早くから折衝の任に當つたが、愈々中國征伐の初まると共に、播磨を賜はつてその主將となり、初めて信長に代つて一方の將なるに至つた。

毛利氏と
の嫌和

かくて中國經略を進め、備中高松城は陥落に瀕し、毛利氏も和を求めて來た際に、信長の死に會することゝなつた。秀吉は五國備中・備後・出雲・伯耆・美作の割讓、清水宗治の自殺、及び高松開城の條件を出し、毛利氏は宗治の死を宥さんことを請うたが、秀吉が應じないため、安國寺惠瓊の勧めによつて宗治は進んで自殺し、茲に和議の成立を見、六月四日兩軍同時に退陣することゝなつた。六月六日毛利氏も後信長の死を知り、秀吉を追撃せんとの意見もあつたが、隆景等の反對によつて行はれなかつた。この時明智光秀は信長・信忠を殲すと共に、安土城を收めて近畿の平定に努め、上杉・毛利・長曾我部の諸氏を誘ひ進ん

山崎役

戦後の處
分

て秀吉の背後を衝かんとした。然るに秀吉は既に九日姫路を發して十一日攝津に出て、織田信孝・丹羽長秀・池田信輝等と合し、十三日には山崎に光秀の軍と戦つてこれを撃破した。光秀は一時坂本城に退かんとして、秀吉の「明智め、山科の藪の中へ北入、百姓に首をひろはれ申候事」古今消 息集と言へる如く、士民のために殺され、程なくして殘黨も平いだ。

かく信長の死後半月を出でない中に、讐を復した大功は、彼の勢力をして織田氏の宿將を凌ぐに至らしめ、清洲に於ける諸將の會議に、柴田勝家は信孝を嗣とせんとしたが、彼の意見により信忠の子三法師秀信が嗣と定まり、清洲在城信雄岐阜在城の兩叔が之を助けることゝなつた。又此の時信雄は尾張、信孝は美濃、秀勝信長四男 秀吉養子は丹波、秀吉は山城、勝家は近江長濱六萬石 秀吉領、信輝は攝津の一部、十二萬石長秀は若狹及び近江の二郡等を得、京都の庶政は勝家・秀吉・長秀・信輝の四人から人を出して當たらしむることゝした。秀吉はこれより山崎に城を築いて居り、次いで大徳寺で獨力盛大な信長の葬儀を擧げたが、朝廷もこの際信長に従一位太政大臣を贈られ、特に宣命を賜はつて、信長を追賞せられた。

かくして秀吉の威望の俄然として盛になると共に、織田氏隨一の舊勳たる勝家は之を悦ばず、信孝と結び、瀧川一益・佐々成政等を引いて援として、秀吉を殲さんとした。秀吉は清洲會議の約束によつて、一時岐阜に置いた秀信を安土に移さんことを信孝に求めたが、信孝は應ぜずして、却つて秀吉

秀吉と勝
家の對抗

秀吉の活
動

勝家の出
軍

賤ヶ岳役

に勝家との妥協を説いたから、秀吉は信孝の近臣に宛て、自己一人の計ひで、光秀を誅し、織田氏の滅亡を防ぎ、先君の佛事まで營んだ骨折に依つて、「可愛かはゆがらせらるべきと存」じたに、人並に思召さるゝ不満を述べて、信孝の非を明にしたが、その文情理並びに、信長の義昭に對する諫書よりも一層割切である。勝家は冬期出兵の困難のため、秀吉と和を計つたが、秀吉は之を察し、十二月先づ岐阜を襲ひ、信孝を降して秀信を安土に移し、翌十一年正月伊勢に入つて瀧川一益を攻めた。この間に勝家は秀吉を討つため、毛利氏・長曾我部氏・紀州の一揆・徳川氏等を誘ひ、雪融を持つて出兵せんとしたが、信孝・一益の苦しめられるのを見て、遂に雪を排して進出するに決し、三月初前田利家・佐久間盛政等と共に近江に入り、柳瀬邊に陣した。秀吉はこれを聞き、信雄を留めて一益を抑へ、直に長濱に來り、對壘を賤ヶ岳附近に築いて對峙することゝなつた。四月に入つて岐阜の信孝復之に應じて兵を擧げたから、秀吉は一擧に撃破せんとて自ら進んで美濃に入つた。この虚に乗じ佐久間盛政は勝家に請うて、二十日の拂曉不意に中川清秀の大岩山の砦を襲うて清秀を殲したから、更に明日は進んで賤ヶ岳を陥れんとして、勝家の退却の命にも従はなかつた。秀吉は之を知つて大垣より引返した故、盛政は炬火の盛なのを見て大に驚き、深更から退却を初めたが、翌未明には秀吉既に賤ヶ岳に來つて追撃したため、盛政の隊全く潰えた。このため利家は戦はずして去り、勝家亦支うる能はずして

柴田勝家
の滅亡

賤ヶ岳役
の結果

北莊に退いた。秀吉は直に越前に入り先づ利家と和し「柴田息をつかせては手間も入可申候かと秀吉存、日本之治此時に候の條、兵共を討死させ候ても筑前不覺にて有間敷とふつと思切」吉川什書 秀吉書狀 二十四日短兵急に北莊城に迫つた。勝家は日比の武勇に恥ぢず「天守之九重目の上へ能上、惣人數に懸詞、修理が腹の切様見申て、後學に仕候へと申」同妻子一族と共に自殺した。五十 尾張國 知多郡景勝も和を請ひ忽ちにして北陸を平定したが、この間に信孝は信雄に迫られて野間尾張國 知多郡で自殺し、一益も又續いて降つた。されば賤ヶ岳の一戦は織田氏の諸將を多く秀吉の配下に立たしめ、彼をして信長の遺業を受けて、國家統一の大業を成さしめる基礎をなしたもので、家康に於ける關ヶ原役に比すべきである。彼が後年になつてまで、この時の戦功者たる福島正則・加藤清正・片桐且元等の所謂七本槍の面々を優賞したのは、思出多き戦であつたためであらう。

彼の大業が緒につくと共に、天下を制するための根據地として、豫て信長の考へて居た大坂本願寺の舊地に築城することゝなり、淀川・大和川を外濠とし、更に濠を深くし、巨石を築いて壘を高くしその中には瓦に金を張り、壘の縁にまで金箔を押しした程の莊麗を極めた天主閣・殿舎が建て連ねられ周圍三里の間には堺其他の商人を移して、廣大な城下町を開いた。これと共に京都は前田玄以を所司代として治めしめ、畿内は一族を以て固め、諸將を各地に分封して羽翼としたから、信長の死後一年

京都と畿
内

家康の勢力擴張

を出でない中に、秀吉の勢力は信長の畢生の努力の結果よりも大となつた。唯信長の勢力圏内であつた中秀吉に未だ臣従しないのは信長の子たる信雄と信長の與國であつた家康の二人に過ぎない。家康は信長に招かれて上方遊覽中堺に於て本能寺の變報に接し、所謂伊賀越の難を経て辛うじて三河に歸ることを得たが、彼は變後織田諸將の西歸に乗じて武田氏の舊領を併せんとし、先づ甲斐を從へ、武田氏の舊法を復して人心を收め、次いで信濃を略せんとした。北條・上杉の兩氏も同じく甲斐信濃を略せんとして互に衝突を來たしたが、家康は北條氏直と和して、自ら甲・信兩國を占め、氏直に上野を從へしめた。かくて今や彼は今川・武田二氏の舊領を占めて、駿・遠・三・甲・信に亘る大勢力となつたが、秀吉と衝突の免るべからざるを察し、十一年には早くも信雄と結び、又氏直に二女姫を嫁してこれに備へた。秀吉は初信雄に對しては敬遠主義を取つたが、彼が家康を援として第二の信孝たらんとするを見ては捨て置き難く、先づその三家老岡田重孝、津川義冬、淺井長時を懇遇して信雄との間を離間したから、信雄も遂に十二年三月家康と計つて其三家老を殺し、秀吉と手を切るに至つた。

家康の策
秀吉の策
秀吉家康の對抗

かくて家康は信長の舊誼に報ゆるため信雄を助けるの好名を擡んで秀吉に當たることとなり、直に信雄と清洲に會して策戦を議し、美濃の池田信輝、越中の佐々成政を招いて秀吉に叛かしめ、四國の長曾我部元親及び紀州一揆をして大坂を襲はしめんとした。これに對して秀吉は信輝及び森長可城主

小牧對陣

等美濃の諸將を味方として尾張に攻め入らしめ、佐々成政に對しては前田利家加賀・丹羽長秀越前をして前面を塞がしめ、上杉景勝越後をして背後を抑へしめ、長曾我部元親に對しては仙石秀久を淡路に、紀州の一揆には中村一氏・蜂須賀家政・黒田孝高を和泉に置いてこれを防がしめ、毛利氏に對しては宇喜多秀家備前をしてこれに備へしめた。これと共に景勝及び木曾氏をして信州を侵さしめ、佐竹氏をして之に應ぜしめんとし、伊勢の諸將多く秀吉に應じたから、先づ瀧川一益・蒲生氏郷等をして北伊勢を略せしめた。信輝・長可等も尾張に向ひ、信輝は犬山城を陥れたが、長可は羽黒丹羽郡犬山の南約一里に於て敗軍した。かくて信雄・家康は小牧山に陣を進め、秀吉も犬山に來つて對陣したが、共に守を固うして戦はなかつた。四月に入り池田信輝は三河の虛を突かんことを請ひ、羽柴秀次・堀秀政・森長可等と二萬の兵で發したが、家康は之を知つて信雄と共に主力を以て追撃し、九日長久手愛知郡日進村に會戦して大に勝ち、信輝・長可を殲した。秀吉も援に向つたが、家康が早く兵を引いたため決戦を見るに至らなかつた。

長久手の戦
長久手役後の形勢

この戦によつて家康が武名を擧げたことは尠少でなかつたが、秀吉に取つては一二の部將を失つたに止まり、その勢力には殆影響なく、家康・信雄の力を合して八ヶ國に足らないに對し、秀吉の命を奉ずるものは二十餘國に達し、その兵は信雄の領地たる伊勢・尾張に侵入して居るのである。然し秀

秀吉家康の構和

吉はこの役によつて益、家康の力を認め、早く従へて己が用たらしめんとし、家康亦己が力を示した上有利な條件で和することを得策とした。このため九月には一時和議殆成らんとしたが、不調に終つた。秀吉には家康を従へるには、信雄と引離して名分上の利益を失はしめ、且彼の與黨を平げて自己の地位を向上して後にするを利とし、十一月急に長島城に信雄を攻めてその進退に窮する際、勸めて和せしめ、次いで十二月信雄の居中斡旋によつて秀吉・家康の和成り、家康から次子秀康幼名於義丸を質としたが、秀吉は之を養子として優遇した。

紀州征伐

紀州の根來雜賀の一揆等は、前に大坂の虚を衝かんとしたから、秀吉は十三年三月末から紀州に向ひ、根來・雜賀の一揆を平げ、熊野を降し、その落人を匿まつた高野山は木食上人其の懇請によつて寺領を削り、武事に關するを禁じてその罪を許した。四月末大坂に凱旋し、秀長をして岡山後の和歌山に城を築いて紀・泉を領せしめた。

長曾我部元親の四國統一

長曾我部元親は豫て四國の統一を企て、小牧役に乘じ、紀州の一揆に勸めて大坂に向はしめ、その間に全く四國を従へたか、今や秀吉の來攻を恐れて懇誼を結ばんとした。然し秀吉は土佐一國を與へ他の三國を返上せしめんとしたため、元親從ふ能はずして四國征伐となつた。六月秀長を主將とし、秀次と共に阿波に入り、宇喜多・黒田・蜂須賀は讃岐に、吉川・小早川は伊豫に攻め入つた。元親は阿

四國征伐

佐々成政の活動

波の白地城三好郡に據つてこれに當つたが、七月遂に降を請うた。秀吉は彼に土佐を與へ、阿波を蜂須賀正勝に、讃岐を仙石秀久に、伊豫を小早川隆景に分與した。

越中の佐々成政亦家康・信雄と通じて兵を起して、十二年九月には前田氏の末盛城を襲つて賀・能の連絡を絶たんとし、利家の後詰によつて辛うじて落城を免れたが、利家の一生に於て類なき難戦とせられた程であり、小牧役後にも家康・信雄に再舉を勧め、猶利家と戦を續けて居た。されば秀吉は四國の平定と共に、八月大舉親征して越中に迫つたため、成政は一時富山に全力を集中して一快戦を試みんとしたが、勝つべからざるを知つて剃髪して降つた。秀吉は成政を許して越中の一郡新川郡を與へ利家に越中を加賜し、且羽柴筑前守の名字名を讓つてその功に酬いた。

關白就職

この間秀吉の官位の昇進を見るに、山崎役後從五位下左近衛少將に叙任した後、十月十一月參議五月權

豐臣姓

五奉行設

大納言十一月を経て、十三年三月内大臣に進み、母を大政所、夫人を北政所と稱せしめられたが、更に七月には攝家以外に例のない關白に任ぜられた。彼は初信長の平姓を稱したに倣つて平姓を用ひたが、關白に任ずるため前關白近衛前久の猶子となつて藤原姓を稱した。然しこれは彼の喜ばない所であつたから、更に九月に朝廷に請うて豐臣の新姓に改めた。彼は又關白として庶政を總べるため、五奉行を定め、前田玄以初め信忠に仕ふをして京都及び寺社を、長東政家初め信忠に仕へ次いで丹羽長秀に仕ふをして出納を、淺野長

政北政所の妹婿 増田長盛・石田三成をして訴訟其他一般庶務に當たらしめ、大事は五人の合議によらしめた。

秀吉の家
康慶迫

秀吉の家
康懐柔

家康の臣

かくて秀吉は家康の外援を滅し、自ら天下を支配すべき關白に任じたのみならず、或は信州の眞田昌幸・小笠原貞慶等の家康に叛いたのを助け、或は更に老臣よりの質子を徴し、或は家康の上京を促して、彼の歸服を求めたが、家康は持重して動かず、ために功勳隨一の岡崎城代石川數正さへ、南北講和問題に於ける楠木正儀の如く、自己の妥協説の行はれないため大坂に出奔するに至つた。秀吉は威嚇の効なきを見て懷柔策を取り、十四年四月異父妹朝日姫副田其兵衛の妻であつたのを取返したを家康に嫁し、次いで母大政所をしてこれを濱松に訪はしめたから、家康初めて大坂に上つて秀吉に臣事することゝなつた。茲に於て秀吉も家康を拉致するを得たのみならず、家康亦その領土を安堵し、秀吉に次ぐ地位を獲得し、共に目的を達したのである。

島津義久
九州統一

かくて秀吉の命を聞かぬものは、九州・關東・奥羽だけとなつた。九州では島津・大友・龍造寺の三氏が鼎立して居たが、島津義久の勢漸く盛んで、天正十二年大舉して肥後に討ち入り、弟家久は進んで肥前島原に上陸し、龍造寺隆信と激戦して敗死せしめた。龍造寺氏は之より衰へ、僅に宰臣鍋島直茂の力によつて命脈を維持したに過ぎない。大友氏はこれに乗じて筑前・筑後を經略したため、龍造寺

九州征伐

島津義久
の投降

關東奥羽
の形勢

氏は却つて島津氏と和して、これに當たり、島津氏は十三年筑後を定め十四年には日向・肥後の兩方面より豊後に入つて大友宗麟義統父子を奔らしめたを請うたから、秀吉は十二年十一月勅命を奉じて義久に戦を止めんことを命じたが、義久これに應ぜずして益、大友氏を攻めたため、十四年には先づ黒田孝高をして毛利氏の兵を督して、豊前を定めしめ、準備を整へて翌春大舉親征に決した。秀吉は「筑紫乍見物、島津居城可取卷」黒田文書、秀吉書狀といひ、「太刀も刀も不入候、手つかまへたるべき事」同上と言へる如く、初めより眼中島津氏なき有様で、壯麗な行装で三月朔日大坂を發したが途中風景を賞し、歌會を催して、月末に九州に入つた。二十萬の大軍は九州の天地を壓し、義久は兵を退けて本國を固めた。かくて秀吉は肥後より、秀長は日向より島津氏の兵を撃破して進み、五月には愈薩摩に迫つたため、義久遂に敵すべからざるを知つて、降を請ひ、八日剃髮して蒲伯と秀吉の太平寺薩摩郡宮内村の陣に來り謁した。秀吉は却てこれを許して優遇し、薩久薩久二國及び日向の一部久家を與へ、其他は功により諸將に分與して、七月大坂に凱旋した。關東・奥羽の方面は戰國以來大なる變化なく、關東では北條氏最盛で、上杉氏の衰へ武田氏の亡んだ後、一層勢力を増し、その領地は九ヶ國豆相武三州及び上總の全部、下總常陸兩野駿河の一部に亘り、常陸の佐竹氏、安房の里見氏等、僅に餘勢を保つに過ぎぬ。奥州では伊達政宗會津の蘆名氏を亡ぼして東北に覇を稱せんとし

秀吉と北條伊達兩氏

小田原征伐の準備

秀吉の進發

小田原籠城

秀吉の持久策

北條・織田・豊臣氏とも誼を通じて居り、北部には南部及びその部下より起つた津輕氏あり、出羽には最上氏あつて猶勢力を維持して居た。秀吉は北條氏政・氏直父子及び伊達政宗の上京を促したが共に應ぜず、北條氏は使を上して先づ家康と和した際の約に基き、眞田領の上野沼田を得んことを求めた。秀吉はこれに對し眞田氏墳墓の地たる奈胡桃なぐら利根郡の外を北條氏に譲らしめて上京せしむることゝしたのに、北條氏猶言を托して上京せざるのみならず、却つて奈胡桃城まで侵略したため、十七年十一月北條の不忠不信を責め、勅命を奉じて、誅伐を加ふべきを告げ、畿内・東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海の諸國に出兵を命じ、道路を開き、橋梁を架し、兵糧を輸送して準備を整へた。

吉例により翌年三月朔日秀吉自ら京都を發して東征の途に就き、信雄等をして伊豆韮山城へ、羽柴秀次をして箱根山中城へ、家康を小田原城へ向はしめた。韮山は北條氏規氏政の弟固守して容易に陥らなかつたが、山中先づ破れたため、四月には全軍函嶺を越えて小田原城を包圍した。北條氏は謙信・信玄に對して取つた策をくり返し、主力を小田原に集めて堅守し、遠來の西軍の疲廢を待たんとした。秀吉は一方諸將を遣して北國から向つた前田利家・上杉景勝と共に、關東の諸城を攻めしめて北條氏の羽翼を削ぎ、小田原に對しては持久策を取つて干殺にせんとした。このために石垣山の本陣を初め、諸將の陣屋は塗籠・白壁の矢倉を構え、庭に竹木を植ゑ、畑には野菜を作り、全國の商人・遊女は集

北條氏の滅亡

家康の移封

信雄の配流
奥州の處分

つて市をなし、陣中亦酒宴を開き、歌舞を催し、秀吉は淀君を招いて諸將にもこれに倣はしめたから、「於此御陣中一送生涯一可有退屈一候共不覺」榊原文書、榊原康政書狀有様で、北條氏の豫想は全く裏切られた。その間に關東の諸城は相次いで陥落し、城内にも内應者を生ずるに至つたから、氏直は七月五日城を出て降り、自殺して氏政及び將士を助けんことを請うたが、秀吉は却つて氏政を自殺せしめ、家康の掣たるため氏直の死を許して、高野に放つた。北條氏がかくの如く天下の大軍に對し百餘日の間支を得たのは、早雲以來五代の間民政に努め、人心を得て居たため、忍城武藏埼玉郡の如きは、百姓・町人・僧侶迄籠城し、石田三成の水攻もその効なく、小田原落城後までも固守した程であつた。

秀吉はこの度の行賞として、北條氏の舊領地に家康を移封し、家康の跡へ信雄を移さんとした。家康を關東に移すは劉邦を漢中に封じた如く、中央への出動を困難ならしむる上に、新附の地を従へしむる利あり、信雄をして尾張を去らしむるも、織田氏の發祥の地であるためであつたが、信雄は舊領に留らんことを請うたため、下野に放ち後秋田に流された。この間に伊達・南部・津輕・最上・佐竹等の關東奥羽の諸氏或は自ら來り謁し、或は兵を出してこれに應じたから、秀吉は進んで會津に入り、奥羽二州の處分を定め、政宗の會津三郡、及び來謁しなかつたものゝ領地を奪ひ、蒲生氏郷を會津黒川城後のに置いて奥羽を鎮せしめ、八月凱旋した。

かくて秀吉は信長の死後十年にならぬ間に全國の統一を完成したが、それと共にその統一をして外形に止まらしめず、これに相應じた實質を具備せしむるために、新しい組織と充實した力とを與へ、建國以來未だ嘗て見なかつた程、眞の統一ある新日本を創造するに努めた。

秀吉、若輩之時、孤と成て、信長公屬幕下、身を山野に捨骨を海岸に碎、干戈を枕とし、夜はに寢、夙におきて、軍忠をつくし、戦功をはげます、然而、自中比蒙君恩、人に名をしらる、依之、西國征伐之儀被仰付、對大敵争雌雄、刻、明智日向守光秀、以無道之故、奉討信長公、此注進を聞届、彌彼表押詰、任存分不移時日、令上洛、逆徒光秀伐頸、報恩惠、雪會稽、其後、柴田修理亮勝家、信長公之厚恩を忘、國家を亂し、叛逆之條、是又令退治之訖、此外諸國、叛者討之、降者近之、無不屬麾下者、就中、秀吉一言之表裏、不可在之、以此故、相叶天道者哉、予既舉登龍揚鷹之譽、成鹽梅則闕之臣、關萬機政、然處氏直背天道之正理、對帝都企奸謀、何不蒙天罰哉、古諺云、巧訴不如拙誠、所詮、普天下逆勅命輩、早不可不誅伐、來歲必携節旄、令進發、可勿氏直首事不可回踵者也。

天正十七年十一月廿四日

(秀吉朱印)

北條左京大夫とのへ

(伊達家文書)

第三十八章 豊臣時代の政治

皇室尊崇

君臣親和

聚樂行幸

秀吉は、その實行方法は頗る趣を異にしたけれども、天下經綸の策に於ては、大體信長の遺志を繼承したもので、皇室・宗教・經濟・土地制度等に關する政策は、その主なるものである。國家の統一には必ず皇室を中心とせねばならぬことを信じ、幕府政治を斥け、自ら朝臣の一人として天下の經營に當たらんとしたことは、兩者同様であるが、自ら赤心を以て皇室を奉戴すると共に、天下をして同じく尊王の美風を起さしめんとしたことは、秀吉の勝れた所であつた。されば正親町・後陽成兩天皇の深く彼を信頼し、且親近せられたことは、他に比類稀な所であつた。彼か禁苑の花を眺めて居た際、正親町天皇の「立よりし色香も残る花ざかりちらで雲井の春やへぬべき」の御製を賜はり、彼がこれに對し「忍びつゝ霞とともに眺めしも露はれけりな花の木の下」と返歌し奉り、更に親王百官がこれに唱和した如き、君臣親和の適例である。久能木文書而して彼の尊皇の具體的に實現せられたのは聚樂第の行幸が第一である。聚樂第は彼が天正十四年から内野の地を卜して、方千間の間に營んだ莊麗を極めた邸宅であるが、漆の幅二十間、深三間その完成を待つて、十六年四月空前の盛儀で後陽成天皇の行幸を仰ぎ、五日に亘つて舞御覽・和歌會等の催があり、この間に天皇を初め皇族に御料を奉り、公卿・女官にも

知行を贈り、且天皇の御前で、諸大名に子々孫々迄朝廷を崇び、關白の命を奉ずる旨の起請をなさしめた。かくの如きは武家時代を通じて空前絶後の盛事で、萬民をして皇室を仰がしむる所以であつた。

佛敎の保護

僧侶俗權の禁壓

刀狩

五人組
十人組

佛敎に就いては叡山・高野山の再興にも助力し、本願寺顯如を優遇して、彼のために大坂天満に寺院を造營し、或は京都に於て大谷の本廟の地及び廣大な寺域六條、南北二百八十間、東西三百六十間を興へて本山を建立せしめた如く信長の壓迫に反して保護した所が多い。加之新に京都東山に方廣寺を營み、未曾有の大佛像木造高さ十六丈を安置して、己が功業の記念たらしめんとした。これは天下の人心を安んずるためであつて、僧侶の俗權を抑へ濫行を制することは信長と同様であり、或は寺領を沒收し、或は武器の所有を禁じて、全く政權に抗する力無からしめた。信長の保護した吉利支丹を禁じたのも、大章 參照國家の統一に害ありと考へたため、その精神は同一であつた。天正十六年大佛殿の造營に際し、百姓の武器一切を沒收し、以て百姓をして現當二世の安樂を得せしめんと稱した刀狩は、國內の平和に佛敎を利用した好例で、今後僧侶・百姓の一揆を根絶せんために外ならなかつた。これは侍は五人組、百姓は十人組を作つて、連帶責任を負はしめ、互に犯罪を檢察せしめたと共に、社會を平和にするに最効果があつた。

貨幣の鑄造

金賦

都市の保護

經濟政策として最注意すべきは貨幣の鑄造であらう。「秀吉公御出世以降、日本國々に金銀山野に涌出」太田牛一雜記 たのは、採鑛冶金の方法の發達したのと、諸大名の獎勵による所であらうが、秀吉は或は鑛山を直轄とし、或はその運上税を取つて、巨額の金・銀・銅をその手に收め、これを利用して、盛に金・銀・銅三貨を鑄造した。大判金天正十六年約四十四匁 小判金同年四匁餘 天正通寶天正十五年銀、銅 文祿通寶元禄元年銀、銅 等である。而して徳川家康、前田利家を初め、大名の秀吉の許可を得て金銀を鑄造したものも少くなかつた。秀吉は天正十七年聚樂第に金銀三十六萬五千兩を積み上げ、これを一族・公卿・諸將に分配した。例へば秀長金三千兩、銀二萬兩、秀次金三千兩、銀一萬兩、信雄・家康金一千兩、銀一萬兩等 この金賦は生前の遺品分であると共に、財政の豊かなことを示して、人心を安んずるためでもあつた。かくて「昔者黄金を稀にも拜見申事無之、當時は如何なる田夫野人に至迄、金銀澤山に不持扱と云ふ事なし」同上と謂はれた如く、金銀も一般に行き渡り、眞に貨幣經濟時代に入るに至つた。都市の發達にも力を盡くし、京都の如きは條坊を整理し、周圍に御土居を築いて防禦に備へたが、其他大坂を初め、江戸徳川會津藩生氏後 金澤前田廣島毛利等 等の城下町の繁榮も著しかつた。會津の掟に於て、喧嘩兩成敗の除外例として、武士と町人との喧嘩は科により町人を助くることとした如きは、町の繁榮を計つたためである。又九州征伐の歸途には博多の荒廢を見て、方十町の間町屋を開き、地子錢を免じて復興を計り、長崎のポルトガル人の手に歸して居たのを、沒收して直轄とし

た。都市の發達による町人階級の勃興は、刀狩による兵農の分離と共に、近世社會組織の成立の基礎をなすものである。

檢地の方

秀吉の度

土地に就いては、全國に亘つて檢地を實行した。これは曲尺の方六尺三寸を歩とし、三十歩を一畝三百歩を一段、十段を一町とし、更に一段につき京枘秀吉從來各種の枘のあつたを一定したも、一升枘は方四寸九分、深き二寸七分で上田一石五斗・中田一石三斗・下田一石一斗・上畠一石二斗・中畠一石・下畠八斗・屋敷一石二斗の割で石盛を定め入組地を除いて、村々の堺に榜示を立てしめた。これによつて初めて「日本國中不殘三寸尺地」爲末代御前帳即土地被相定高野山ことを得たと共に、從來の朱印に照らし足らないものは補ひ、隱田の出たのを沒收した。これに就いて「自然不相届覺悟之輩於在之者、城主にて候はゞ其もの城へ追入、各相談、一人も不殘置撫切に可申付候、百姓以下に至るまで不相届に候ては、一郷も二郷も悉く撫切可仕候、六十餘州堅被仰付出羽奥州迄租相さうにさせらる間敷候、たとへ亡所に成候ても不苦候間、可レ得其意候、山の奥海は櫓かひの續き候迄可入念事專一候、自然各於退届者關白殿御自身被成御座候ても可被仰付候」と命じたのでも、その決心の程が察せらる、これは天正から文祿にかけて行はれたから天正石直とも、文祿檢地とも呼ばれた。租法は二公一民であつたが、この本税以外は課さなかつたのと、石盛が寛大であつたから、百姓は從來に比し生活の安定を得ることゝなつた。

租税

秀吉の大建築と桃山美術

秀吉が盛に壯麗な城郭殿舎を營んだことは、當代美術の發達に大影響を與へ、美術史上特にこの前後を桃山時代と呼ぶに至つた。伏見城の地を桃山と呼ぶは江戸時代中期以後である。信長の安土城はこの先驅をなしたのであるが、秀吉の大坂城天正十一年・聚樂第十三年・伏見城文祿元年・三寶院醍醐寺の塔頭慶長三年等に至つて、大發展を見たのである。當時の城郭は防備を伴つた住宅であつて、壯大堅固であると共に、豪華雄麗であつた。城郭の中心たる天守閣は、前代の樓閣建築の發展したもので、棟には金鯨を戴き下には石藏外部は石掛で出来て居る最層を組み、その間に破風をつけた屋根と白い壁とが重なり合つた偉觀は、豪壯雄大を極めてゐる。これに伴ふ殿舎は、書院造の完成を示し、大坂城の千疊敷の如く大廣間も出來、その屋根にも破風をつけ、門にも向唐門正面を磨破を生じた。而してこれ等の建築の裝飾としては至る所に彫刻が施され、内部には壁障畫が用ゐられ、瓦にまで鍍金が試みられ、絢爛を極めた。聚樂第の遺物である大徳寺の唐門、伏見城の遺構である西本願寺の書院・唐門、豊國神社の唐門、都久夫須麻神社の拜殿近江竹生島等は、その代表者である。聚樂第から移された西本願寺の飛雲閣は、此時代の瀟洒な一面を代表するものであり、庭園建築として金閣・銀閣等の系統に屬するものであるが、從來の平面的に複雑化して來た建築を、更に立體的に變化あらしめた樓閣として、最も注意すべきものである。

大書院 向唐門 聚樂第伏見城の遺物

彫刻

彫刻は建築の裝飾に於て最特色を發揮し、透彫・高浮彫・丸彫等巧に利用せられ、意匠の放膽奇抜は前後に比なく、手法亦勁健である。大徳寺の唐門はこの點で最傑出したもので、虹梁の鯉が柱を貫いて、頭を拳鼻こぶしはなに突出して居る如き、何所までも延びようとするこの時代の生氣の徴象とも見られる。

繪畫

永徳と山樂

繪畫では狩野元信の孫永徳重信と、永徳の養子の山樂とが最著れた。彼等は宋元畫の勁健な筆力と土佐派の豊麗な傳彩とを巧に混融した裝飾畫に成功し、多く金地の壁障屏風等に、雄大勁拔な構圖を以て絢爛な筆を揮つた。永徳は安土城の天守を初め、大坂城・聚樂第等に描き、山樂は大坂城・聚樂第・伏見城等の裝飾に與つた。畫題は花鳥が主で、人物がこれにつゞくが、動植物共に巨大なものが多いのは、大規模な殿閣と相應するものであると共に、統一擴大に向つた時代相の發現でもある。かくの如く當代の美術は彫刻も繪畫も建築に伴ひ、建築の裝飾として見るべきもので、それが秀吉の城郭殿舎の大建築によつて發展したと共に、その性質も秀吉の豪華雄大な性格の具體化に外ならぬ。而して彼の諸將によつて、各地に大城郭が營まれると共に、その風は全國に及び、城下町の勃興と共に、從來寺院中心であつた文化が、城郭中心即都市中心となり、宗教的から非宗教的への轉化の完成を見るに至るのである。

君臣階樂

寺院より都市へ

信長と極端に相反したことは人に對する寛嚴の相違であつて、信長が敵味方に對して峻嚴を極めた

北野の大茶湯

醍醐の花見

家庭の秀吉
養母への孝

に反し、彼は海の如き度量を以てこれを包容した。彼は自ら人を殺すことが嫌いであると云つてゐる如く、敵をも滅さずに味方として用ゐることを考へ、一度従へば直に眞情を以てこれに接した。このために信長の時絶えなかつた謀叛人も、殆皆無であつた。單に家臣ばかりでなく、上は至尊から下は一般人民に至るまで、彼は心から親愛の情を以てこれに接した。天正十四年正月、彼は組立式の黄金の茶室を造つたが、先づ宮中に持參して天皇以下に茶を勧め、後紫野で組立て、京中の男女に見物せしめた。更に翌十五年十月には北野の松原に八百餘の茶室を設け、數十年來集めた道具を飾り、公卿・諸侯を初め、町人・百姓・外國人までも、茶湯熱心なもの來會を許し、自一番の茶室を受持つて茶を饗した。北野の茶湯に於て衆と樂みを共にした彼は、その最後の年の春、醍醐の花見を催して、最大仕掛に家族的遊興を試みた。このために彼は三寶院義演と計り、醍醐寺を修造し、三寶院の殿舎林泉を營み、天下の名花を集め植ゑしめ、屢自ら赴いて、親しく工事を督し、三月十五日に秀頼・北政所以下侍妾女房を伴つて花を見、五奉行等の工夫を凝した茶屋を廻つて一日の歡を恣にしたのである。家族に對する愛情の濃やかであつたことは、大英雄としては他に比類を見ない所で、母大政所に對しては孝養に努め、老後の子である鶴松・秀頼は固より、糟糠の妻である北政所も、淀君以下侍妾も、心からこれを愛撫した。大政所への消息に、「そもじさま御ゆさん候て、遊山きをもなくさめ、氣慰わか

妻子の愛情

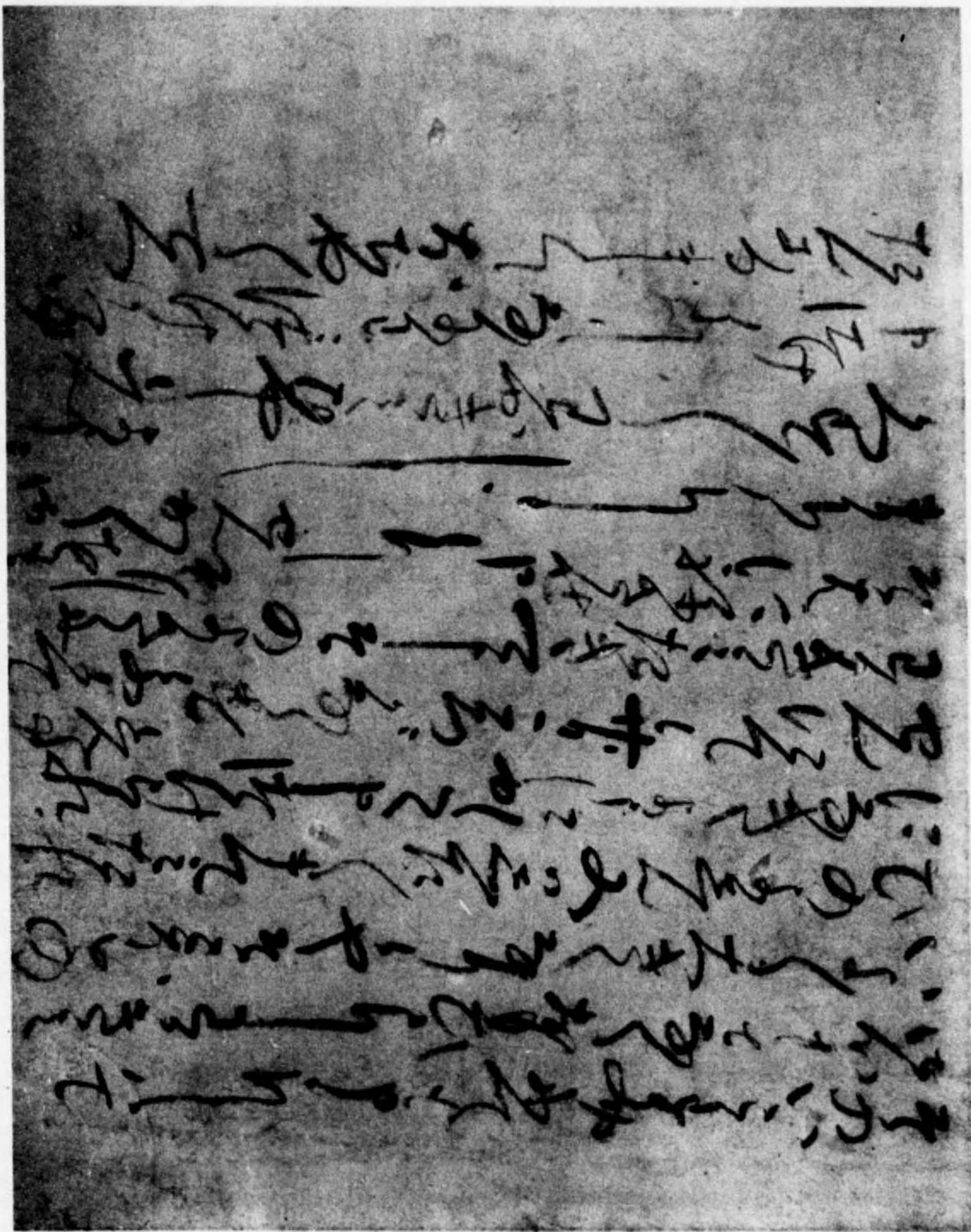
御なり候て可_レ給候、たのみ申候」といひ、妙満寺文書 その病氣の平癒を諸社に祈つた願文には、「いのちのぎ、三がねん、年しからずば二ねん、げに_レならず者三十日にても、延命ゑんめいに候様にたりませばしめし候」多賀神社文書 といひ、北政所へ對して白髪を増したことを告げて「御めにかゝり候はん事はづかし、そもじばかりは苦しからずと存候へどもめい_レわくに候」妙満寺文書 といひ、淀君に「かならず參候てわかざみださ可_レ申候、そのよさにそもじをもそばにねせ申候べく候」河内志紀長吉神社文書 といひ、秀頼に「やがて_レ參候て、くちすい可_レ申候」神田氏文書 と言へる等、彼の眞率と愛情の濃厚を示して餘あるものである。

秀吉の晩年

かくの如く彼の生涯が波瀾に富み、豪華を極め、彼の事業が偉大であり、彼の性格が雄大であつたことは、その悲惨な最期をして特に深刻な大悲劇たらしめた。彼は天正十九年に老後の一人子鶴松を失つたために、甥秀次を養子として關白職を譲り、自らは最後の事業たる外征のことに従つたが、文祿二年に淀君の腹に秀頼が生れてから淀君に黨するものは秀次を喜ばず、秀次の不謹慎に乗じ、讒構を逞うして、遂に秀次は文祿四年高野山に移されて自殺せしめられて終つた。かくて慶長三年五月秀吉が病を發しその漸く重くなるに及んで秀頼の前途について憂慮懊惱を極むることとなつた。秀頼六歳、中納言 のために恰適した後見者たるべき弟秀長は、既に天正十九年に死んで居り、其他の一族及び恩

秀次の自殺
秀吉の最期

天正十八年九月關東奥州征伐から凱旋した頃淀君に贈つたもので、「わかきみ」は鶴松、「おちやく」は淀君、「てんか」は世人が彼を殿下と呼ぶため、自らもかく稱じたのである。



第十七、豊臣秀吉年消息 (河内志紀長吉神社蔵)

願の士には頼むに足るもののないのみならず、外征の事も途中であり、諸將の間にも文勳派と武功派
北政所方と淀君方等軋轢の傾向も生じて居り、家康以下の大諸侯に至つては、彼の個人的力量に服従
したに過ぎないから、その瞑目後の心中は計り知られない様である。されば徳川家康・前田利家・宇喜
多秀家・毛利輝元・上杉景勝初小早川隆景の五大老、生駒親正・中村一氏・堀尾吉晴の三中老及び五奉行等をし
て、一致協力して秀頼を擁立する旨の誓詞を再三書かしめ、その死後は家康は伏見で政治を見、利家
は大坂で秀頼を守護し、若兩人中病氣死去の等の際は、その子秀忠・利長が之に代り、五奉行は一身
の生死榮辱を顧ず、豊臣氏の安泰を計るべきことを遺言して、八月十八日伏見城中で薨去した。齡六
十三、次いで東山阿彌陀峯に葬られ、豊國大明神に祀られた。

第三十九章 豊臣時代の外國關係

秀吉の雄圖

秀吉の豪放闊達な性質と當代の統一的擴大的精神とは、秀吉をして六十餘州を統一せしめたのみでなく、遂にこの統一せる國力を利用して、空前の雄圖を起さしむるに至つた。これ一には倭寇以來の海外熱の最高潮に達したものであり、國家が統一の曉には國力を外に及ぼさうとする東西の史上に共通の傾向でもある。彼は亞細亞諸國及び南洋諸島に對しても、これを見ること島津氏・北條氏等と同様であつて、悉く彼の威光に従はしめんとし、朝鮮・明・臺灣・印度・呂宋等に入貢を促し、自ら母が日輪懷中に入ると夢みて生れたものと稱し、されば天日の照す限り彼の威に服すべきものであることを主張して、之に應ぜざるものは直に兵力を用ゐんとした。入貢は彼をして屬國の禮を取らしめて國威を四方に輝すと共に、通商貿易の利をも占めんとするもので、名利併せ得る目的であり、當時の歐羅巴人の植民政策と一氣相通するものでもあつた。所謂朝鮮征伐の如きも明・朝鮮が彼の要求に應じないために起つたので、彼の對外的雄圖の一部に過ぎない。

信長の對外交渉

戰國時代に廢絶した明・朝鮮との勘合貿易の復活は、信長の既に企てたことで、元龜元年以來再三使を朝鮮に送つて、通交を復すると共に明との貿易の仲介を求めたが、遂に何等得る所がなかつた。

秀吉の朝鮮招致

宗氏の交渉

朝鮮使節の來朝

對外硬と對外軟

朝鮮の態度

秀吉は更に進んで明・朝鮮を服屬朝貢せしめんとし、彼が應じなければ武力に訴へても實現せんとした。かくて天正十五年九州征伐の歸途、對馬の島主宗義智（よしちか）が義父宗義調（よしじゆ）と共に、箱崎の陣營に來謁したのを見て、朝鮮國王宣祖（せんそ）に自ら服屬入謁すると共に、明にも入貢を説くべき命を傳へ、若遲滞に及べば、直に渡海して誅罰すべきことを告げた。對馬は人多くして國産に乏しく、朝鮮貿易は生存上缺くべからざる所であるから、一方秀吉を宥めて猶豫を請ひ、その間に朝鮮を説いて使節の來朝を促し、以て干戈を避けんとし、このためには、彼地を劫掠したものや、鮮人の捕へられて來て居たものを送つてやつて彼の意を迎へ、我國へ通信使を出すべきことを説いた。この結果天正十八年に正使黃允吉・副使金誠一・書狀官許篈等が義智は伴はれて來朝し、秀吉に謁見したが、この時の國書は唯國內平定を賀しただけであつたに拘らず、義智等はこれを以て服屬を表明するものと稱したらしく、秀吉はこれを信じ、明の容易に入貢せしめ難きを知つて、愈、自ら兵を率ゐて入明するに決し、朝鮮國王にその先驅を命じた。この秀吉と宗氏との態度に見ゆる硬軟相納れざる二個の傾向は、朝鮮役に終始存した我國の最大弱點で、終にこの外征の意義を没却するに至る根本原因である。即硬派は秀吉の意を承けて何所までも兩國の服屬を目的とせるに反し、軟派は貿易の復活によりて和平の辭とせんとし、遂には入貢を以て我より明に入貢する意味である時まで曲言するに至るのである。朝鮮は當時既

に東人西人の黨争の激しい時で、西人たる黄允吉・許箴は秀吉を目光燦々膽智の人に似たりとして、兵禍の近からんことを述べたが、東人たる金誠一はこれに反し、其目鼠の如くで畏るゝに足らずと奏したから、宣廟 寶鑑 苟且儉安を事とする朝鮮政府は、秀吉の言を虚喝として顧みなかつた。

外征の決行

然るに秀吉は翌十九年老後の一人兒鶴松の夭折に逢ひ、三 愈萬事をすてて東亞の經營を斷行し、萬代に佳名を遺さんとの決心を固め、兵船兵糧の準備、將士の部署、名護屋行營の造築、道路・橋梁の修補等、諸般の準備を整へ、關白職を秀次に譲つて、自ら専心外征の事に當ることゝした。かくて文祿元年三月二十六日京都を發して征途に上つたが、この時の總動員約三十萬で、小西行長・宗義智等の第一軍、加藤清正・鍋島直茂等の第二軍、黒田長政・大友義統の第三軍、島津義弘等の第四軍、福島正則・長曾我部元親等の第五軍、毛利輝元・小早川隆景・立花宗茂等の第六軍を先發隊とし、更に宇喜多秀家・淺野幸長等よしながをしてこれに繼がしめ、別に九鬼嘉隆・藤堂高虎・脇坂安治・加藤嘉明等は船手の大將としてこれに加はらしめ、その數二十萬に達した。秀吉自らは徳川家康・前田利家・上杉景勝・蒲生氏郷・伊達政宗等十餘萬の兵を控へて名護屋の陣營に居り、機を見て直に渡海せんとした。

朝鮮の狼狽

朝鮮も今や先の揚言の事實となつたのに驚き、國內の防備に努めたが、太平久しくして一般に兵事に疎い上、黨争の餘綱紀弛廢して居て策の施し様もない有様であつたから、我軍は四月十二日に第一

我軍の進撃

京城陥落

軍が釜山に上陸して、翌日直に之を陥れたのを手初に、第二軍以下相次いで渡海し、殆無人の地を行くが如く破竹の勢で前進した。國王宣祖は防禦軍の風を望んで潰ゆるを聞き、四月二十九日國都漢陽京城を捨て、北走し、王宮は忽ちに亂民の焚掠に委せられた。かくて道を異にして進んだ行長・清正の兩軍は、五月二日何等の抵抗も受けずして國都の占領を了し、直に捷を名護屋の本營に報じた。

秀吉の大陸經營策

第一軍の半島上陸以來僅二旬にして國都を占領した快報は、秀吉をして勇躍せしめ、自ら當月中に渡海して京城に赴き、年内には明の都に入ることを決すると共に、明平定後の經營方針をも宣言するに至らしめた。即明の都へ天子の行幸を仰いで、都の廻り十箇國を獻じ、秀次を明の關白として百箇國を領せしめ、日本の帝位は若宮八條宮 智親王とし、日本の關白及び高麗は一族か宇喜多秀家を任じ、今度の先手の者には、天竺近くの地を與へて自由に天竺を切取させ、秀吉自ら寧波に居て全土を統括せんとの旨で、その眼中明・朝鮮なく、殆世界を吞吐する勢である。その抱負の雄大驚くべきと共に、餘に事を易く見た禍根をも暴露してゐる。然しこの勢に乗じて彼自ら渡海し、全軍を統率して進撃を續けたならば、彼の理想の實現は困難にしても、朝鮮を従へ明の都に入ることは、必ずしも不可能ではなかつたであらうが、彼の渡海の中止、引いては將士の戦志の缺乏、及び水軍の不振は漸く前途を暗くすることとなつた。秀吉は直に船を回航せしめて渡海せんとしたが、家康・利家等は五月

秀吉渡海
の中止

六月は海上險難であるから、萬一のことがあつては國家の前途に不測の變を生ぜんとも限らぬとて固く諫めたため、來年三月まで延期に決したが、後陽成天皇も勅使を遣して、朝家のため、天下のために、海波の難を冒すことなからんことを懇に仰遣され、母大政所も彼の身を案じて病を發し、孝心の深い彼の熱誠を籠めた神佛への祈願も效なく、その歸洛往問に先だつて薨去した。彼は渡海中止の出征軍に及ぼす影響を輕視したが、このため諸軍の統制を缺いたのみならず、清正等の第二軍は咸鏡道を從へて會寧で臨海宣祖・順和宣祖六子皇子を生捕にし、國境を越えて兀良哈おらんかいにまで進んだが、平安道に向つた行長・長政等の軍は、平壤に入つて後遂に一步も前進しなかつた。

當時我國では戰爭は殆陸上でのみ行はれたため、兵船の構造も操縦も久しく倭寇の防禦に苦辛した朝鮮に比して遙に劣つて居たが、秀吉は水軍を運輸の掩護用位にしか考へなかつたから、その數も少く、その將も海戦に無經驗なものが少くなかつた。されば我水軍が陸軍と並進せんとするや、彼の慶尙道の水軍は戦はずして潰走したが、全羅左水使李舜臣が得意の龜船船上板なし、刀鉏を列ね四方に銃口を設くを率ゐて來攻してからは、我軍戦ふ毎に利あらず、七月閑山洋の海戦に大敗した以後は、全く釜山浦に蟄伏して出ることが出来なかつた。唯彼の釜山攻撃を陸上防戦で撃退したため、辛じて本土との連絡を絶たるゝに至らずしてすんだに過ぎない。かくして朝鮮沿岸の制海權を失つたことは、物資の輸送を困難な

我水軍の不振

らしめ、陸軍の前進をも不可能ならしめることとなつた。

當時明では神宗萬曆二十年に當るが、多年南倭北虜に苦しんだ上、内部も朝臣は朋黨を事とし、紀綱は弛廢し、財政は窮乏して國勢振はず、内亂所々に起り、邊境事多く、清太祖奴兒哈赤ゆるはちも既に漸く勢を得て來て居る際だから、初め日本入寇の報に接しても、沿海の警備をした位に過ぎなかつた。然し今や日本軍は朝鮮半島を席捲し、長驅して明に入らんとし、宣祖は義州に奔つて救援を請うこと切であつたから、宰相石星兵部尙書は、當時遼左の驍將として聞えた副總兵祖承訓に兵五千を授けて赴援せしめた。かくて七月十五日夜祖承訓は我軍の警戒を怠つたに乘じ、不意に平壤を襲つたが、城内道狭くして騎兵の運用に適せず、我軍の奮戦して銃火を浴せたため大敗して退いた。このために明廷は大に驚き、朝鮮恢復の策を募つたが應ずるものなき有様であつた。然るに市井の無賴で辯舌機略に富んで沈惟敬なるもの、日本の事情を傳聞し、封貢を以て和をなすべき策を獻じ、石星の用ゐる所となり平壤に來つて行長と和を議することとなつた。

我將士の中には、清正の如く一向秀吉の意を體して、入明を志したものもあるが、多數は初から秀吉の雄圖實現の困難を察し、征戦を喜ばず、寧ろ早く戦を切り上げることを望んでゐた。朝鮮兵は殆皆一戦にも及ばず逃崩るゝ有様で、戦は手答のないのを啣つた程であつたが、戰爭の勝利は地方の平

明の形勢

明の赴援

明の講和策

我軍の講和派

小西行長の態度

日明媾和の交渉

李如松の來攻

行長等の敗退

定を來たさず、人民の反抗、野盜の出沒は常に警戒を弛めさせず、制海權の失墜と陸上輸送の困難は物質の窮乏となり、寒氣疫癘と共に、益々士氣を沮喪せしむるに至つた。殊に行長の如きは、宗義智と共に平和論者の張本で、朝鮮に入ると共に、屢柳川調信のりゆか・僧玄蘇等をして、和議の交渉を開かしめ、秀吉の意は唯明にあつて朝鮮にないことを告げ、明に朝貢すべき道を借らんとするためであるから、明に上申して和をなさしめよと言ひ、我將士の何れも戦志なく、媾和を望むことまで暴露して顧みなかつた。茲へ沈惟敬が封貢を以て和を講ぜんとの説を齎したから、行長等は直に之に應じ、唯秀吉の意を取り繕ふため、明より使を送り人質を出さしめ、朝鮮を分割する等を條件としたらしい。惟敬は一度明に歸つて和議を成立せしむるとして、五十日間の休戦を約して去つたが、約に後れて十一月に及んで來り、和議が成立して程なく封貢使及び質子の來ることを告げた。

然るに明では、一方先に寧夏の内亂鎮定に當つてゐる李如松の歸來と共に、之を東征提督として遼東に向はしめ、四萬五千の大兵を以て、我軍の不意を討たんとした。秀吉は當時行長の孤軍敵地に突出して居る危険を察して諸軍との連絡を注意し、諸將も明の態度の疑ふべきを説いたが、行長は惟敬の言を信じて何等備ふる所なく、李如松の大兵が十二月鴨綠江を渡り、翌文祿二年正月平壤に迫るまで、猶朝貢使と考へて居た程であつた。されば行長・義智・松浦鎮信等しんしん一萬五千の我軍は、大兵を以て

碧蹄館の役

京城の和議

媾和使の來朝
秀吉の媾和條件

虚を衝かれて、朝鮮第一の天險に據りながら戦利あらず、僅に新に築いた内城を拒守したが、敵の火箭大砲に糧倉を焼かれたため、止むなく大同江を渡つて敗走した。このため京城に於ける宇喜多秀家・石田三成・増田長盛・大谷吉繼等は、我軍を京城に集中するに決し、京城・平壤間にあつた小早川隆景・立花宗茂・黒田長政及び威鏡道の加藤清正・鍋島直茂等に退却の命を傳へた。隆景は京城籠城に反對し、宗茂と共に碧蹄館附近に邀へ撃ち、奮戦して遂に之を撃破した。このため李如松は意氣沮喪して平壤に退却し、明廷は再び媾和熱の再燃を見ることとなつた。

かくて三月に沈惟敬は復京城に來つて行長と和を議することとなつたが、我軍も當時兵糧に窮し、在韓諸將連署して秀吉の渡海延期を請うた程のだから、これに應じ、沈惟敬が遼東に引返し、徐一貫・謝用梓を明の媾和使に仕立て、來ると共に、我軍は京城を撤退して、四月十八日 釜山附近に至り、兩使は名護屋に來つて秀吉に謁した。五月二十三日 この兩使は當時遼東にあつた一卑官に過ぎないが、我國では大明の勅使と稱し、家康・利家等が接待となつて優遇した。これと共に朝鮮の二王子を還付し、朝廷に奏した上、媾和の條件として、「迎大明皇帝賢女可備日本之后妃事」「官船商船可有往來事」を初め、日明兩國大臣の誓詞交換、明に免じ朝鮮の罪を許し、八道の中四道と王城を還付する事、これに對し、朝鮮の皇子及び大臣二人人質として來朝すべきこと、朝鮮二王子の還付、朝鮮大臣の誓

詞等七ヶ條を示した。六月二十八日而してその實行のために小西如安初内藤氏を北京に遣し、更に明から謝罪使を特派せしむることとした。この媾和條件は當初の秀吉の雄圖に比し、餘に變化の甚しいに驚かされるが、これ水軍の不振から意外の困難の續出を來たし、彼も直に明に進むことの不可能を認めためであらう。然し彼は和議の成否を疑ひ、京城撤退と共に先づ全力を以て先に細川忠興等の攻めて抜き得なかつた晋州城慶尙南道を討つて陥れしめ、六月二十九日諸將をして海邊に十八城を築いて久住の計をなさしめた。

媾和と共に我全軍の歸還を豫期した明では、このため大に驚き、和戰の論が喧しくなつて久しく決せなかつたが、在韓明將等何れも我軍の勇武を恐れて媾和撤兵を唱へ、沈惟敬は秀吉の「世作藩籬之臣、永獻海邦之貢」旨の降表を偽作して上り、朝鮮國王亦明將に迫られて請封の上表をしたため、封王のみて和を成すに決し、文祿三年十二月初めて小西如安を北京に入らしめた。如安は彼の封王の外貢市を求めず、封王後我兵を朝鮮及び對馬にも留めず、朝鮮と共に屬國たるべき要求を納れたのみならず、進んで秀吉以下諸將の封爵を請うた。

かくの如く媾和に當つた沈惟敬及び行長の一派は、條件の如何を顧ず、唯媾和の成立のみに没頭し、全く秀吉及び明廷の意志を無視して、糊塗僞瞞に依つて和平を成さんとしたものである。秀吉の

明廷に於ける媾和問題

行長沈惟敬の僞詐

冊封使の來朝

意に忠なる加藤清正は、却つて行長等の讒言によつて不興を蒙つて召還せられた程であつた。かくて冊封正使李宗城・副使楊方亨等は文祿四年秋釜山に着いたが、我軍の猶撤退せざるため渡海を肯ぜず、執袴の子弟である李宗城は媾和が權變に出づるを知り、恐れて逃亡して終つた。慶長元年四月この間に我軍も大部分歸休することとなつたため、楊方亨が正使、沈惟敬が副使となつて慶長元年六月四百餘人の從者と共に渡來し、容易に遣使を肯ぜなかつた朝鮮も、明の命で黃慎等をして次いで渡海せしめた。

秀吉は朝鮮の王子が再生の恩を感じ自ら來謝すべきに、一卑官を遣したのを怒つて、その拜謁を許さなかつたが、明使は九月二日これを大坂城に引見して、その齎した誥命・金印・冠服等を納め、盛宴を設けて彼等を饗した。然るに承兌しやたをして誥命を讀ましめ、「茲特封爾爲日本國王、錫之誥命」と言ふに及び、彼の條件の一も納れられず、謝罪の使節と信じたのが、却て冊封使であつたことを知り、激怒して使節を追返し、直に清正等に渡海を命じて、再征に當たらしむることとなつた。この時の誥命は石

媾和の破裂

媾和の失敗と行長

行長等が初から秀吉の証明の不可能を悟り、一向和平を策したためとは言へ、卑屈の限りを盡くし僞瞞に僞瞞を重ねて、我二十萬の將士の櫛風沐雨の辛苦經營を全く水泡に歸せしめ、三年餘の歲月を徒消せしめた罪は萬死に當たるが、これ一つは玄蘇等の學僧を初め、足利氏以來の屈辱外交の習風を

川子將家に傳はつて居り、青黄赤白薄鼠の五色に斑ち、雲鶴の模様を織出した綾絹に書かれて居る。

沈惟敬及
石星の
末路

受けて支那崇拜の思想に拘はれて居たためでもあり、且は我國の外交に拙なる宿弊の暴露でもあつた。行長等は却て百方盡力して漸く將來せんとした和平を、大勢に通じない清正等の頑愚のため、九奴の功を一簣に缺いたを切齒し、猶彌縫に努めたが、固より許さるべくもなかつた。沈惟敬は更に秀吉の謝恩表をも偽作して媾和の破裂をも糊塗せんとしたが、我再征軍の出動によつて、その偽詐暴露し、捕へられて誅せられ、彼を用ゐた石星亦自ら朝鮮に赴いて兵を能めしめんことを請うて許されず獄に下されて牢死したに反し、行長等が死を免れて再び從軍することゝなつたのは、秀吉の寛大の賜であつた。

慶長役と
三國

慶長二年正月から加藤・小西を兩先鋒とし、毛利・小早川秀秋・宇喜多・島津・鍋島・黒田・蜂須賀等十四萬の大軍は再び朝鮮に攻め入つたが、秀吉も秀頼の誕生、秀次の自殺以來、未知數の世界的版圖の畫策よりは、寧現在の天下を安全に秀頼に相續せしむることに腐心する傾を生じて居り、將士も前役の困難とその結果の無效のため戦志に乏しく、媾和不成立の行掛から來た己むを得ぬ開戦に過ぎなかつた。朝鮮は國王初め媾和には反對であつたが、黃慎の歸國するや位を進め、使事成らば賞せられないのだと言つたと傳ふ。固より自ら防ぐ力なく、明の來援を哀訴するに過ぎない。明も國力衰へ、戦費にも窮して居た際だが、從來の關係上再び大兵を送らねばならぬこととなり、邢玠總督・楊鎬經理朝鮮軍務・麻貴提督等を遣してこれに當たらしめた。

水軍の大
勝

慶長役に於ける我軍第一の成功は、朝鮮の黨争を利用し、反間によつて、前役の彼の主動者李舜臣を能めしめて、元均をして三道水軍統制使たらしめたことであつた。これにより七月彼が閑山島の根據から進出せるに乗じてこれを破り、遂に巨濟島附近の戦に於て藤堂高虎・脇坂安治・加藤嘉明等は海上から、島津義弘は島上から挾撃して、元均を殲し、敵艦と全滅せしめた。七月十五日 月明の夜かくて海上權の我手に歸すると共に、海陸相應じて全羅・忠清二道に入り、八月明將楊元副總兵等の籠つた全羅道の重鎮南原を陥れて、殆敵兵を全滅し、更に九月には忠清道の北境稷山に明軍を破つて遂に二道を從へた。然し朝鮮は所謂清野の策を取つて我軍をして糧に敵による能はざらしめた上、宣祖實錄によれば、この策は行軟は一轉して屈從となり、再變して賣國なるが彼もその一例である。この間に復職した李舜臣のため我海軍が珍島附近に破られた故、寒氣に向ひ、糧食輸送の困難を慮り、京畿道に入らず、却て十月には南海岸に退き、城を築いて根據とすることとなつた。

全羅忠清
二道の平
定

我軍の退
却

明軍の南
下

敵は我軍の撤退と増援兵の渡來とに勢を得て南下を企て、我軍中最強勇な清正を屠らば、全軍潰ゆるものと考へ、十二月楊鎬・麻貴等明鮮軍五萬餘を以て、大舉して蔚山城蔚山府の東島山に迫つた。二十この城は我軍の右端にあつて淺野幸長及び毛利氏の兵が守將清正の兵と共にこれを築き、將に成らんとする際であつて、清正は六里餘を隔てた西生浦の築城を督するため不在であつた。城兵一萬餘人我軍は築城に

蔚山城

没頭し、敵の襲來も知らず、兵糧の備もなかつたから、直に外郭を奪はれて牙城に籠り、清正亦即日城へ歸つて奮戦して敵の強襲を撃退したが、二三日にして糧食飲水全く盡き、紙を噛み、血を啜り、屢夜襲して敵の糧を奪つて飢渴を凌いだ。蔚山の警報に接し、毛利秀元以下、黒田・鍋島・蜂須賀等の諸將及び小早川秀秋の兵併せて一萬餘人西生浦に集まつて赴援を議し、慶長三年正月蔚山に進んだ。寒氣と城兵の攻撃に苦しみ、持久策を取つて居た明軍はこれを知つて、先んじて城を陥れんとしたが、城兵よく戦つて近づき難きを見、退却に決した。茲に於て我軍は擧つて追撃に移つたから、敵は「謀之經年、已傾海内全力」兩朝平「撰錄」けた武具・糧食を棄て、一萬餘の屍體を遺して潰走した。清正が秀元等に糧食の盡きたことを報じ、「其内御加勢も難成候に付而は、各其覺悟仕候間、可御心安候」淺野家と言へるは、名を惜んで一死を辭しない日本武士の面目の躍如たるに反し、楊鎬・麻貴等が京城まで敗走した上、猶大捷と奏して重賞を受けて居るのは、呆るゝ外はないが、實はこれが彼等の常套手段である。後暴露して楊鎬は職免せられた

明軍の再

この年五月秀吉は蔚山城の修築と共に、清正蔚山・長政西生浦・直茂竹島・義弘川島・行長順天等六萬餘の外は歸休せしめたが、これに反し明では増援の兵水陸共に來つたに勢を得、麻貴をして蔚山城に、董一元をして泗川城に、劉挺をして水軍の將陳璘と共に順天城順天の東南二里半に同時に向はしめた。麻貴は前敗に懲り

泗川の

清正を城外に誘ひ出さんとしたが清正應ぜず。劉挺は媾和に托して行長を生擒せんとしたが、伏兵が機を誤つたため失敗し、陳璘及び朝鮮の水將李舜臣と海陸相應じて攻めたが抜けなかつた。董一元は十月朔日四萬の大兵を以て泗川新寨泗川舊城の西約一里の島津勢に迫つたが、義弘は敵の城壁に達するを待つて一時に突撃奮戦して敵を潰亂せしめ、一萬足らずの兵で三萬餘の敵首を擧げた。これより明人石曼子明人の稱の名を畏るゝに至つたのみならず、蔚山・順天の明軍も力を失つて退却した。

班師

然るにこれより先、秀吉伏見城に薨じ、遺命して喪を秘して軍を班さしむることとなり、十月この命諸軍に達した。かくて愈十一月撤兵に決し、我軍の歸路を絶たんとした敵の海將陳璘及び李舜臣も島津義弘のため露梁附邊で撃ち破られ、李舜臣も戦没したため、全軍十二月に無事凱旋した。

我國に及ぼせる得失

前後七年に亘る文祿慶長役も秀吉の一死によつて龍頭蛇尾に終つたが、外に對しては我武力の強大を支那に知らしめ、後清が起つて亞細亞を席捲する勢を示した際にも、我に一指も觸れようとさせなかつた所以であり、内に於ては國民をして世界的雄心を起す刺激となつた上、陶器や活字印刷等の技術を傳へた等間接の効果は没せられないが、豊臣氏に取つてはその力を鎮磨すると共に、多大の負擔は上下の人心をも失せしめ、政權の徳川氏に移る因を作つた。これと同じく明も多大の國費と兵力を失ひ、國力の衰替を一層甚しからしめ、清朝に亡ぼさるゝ一大因となつた。朝鮮に至つては全土荒廢し

朝鮮の疲弊

我軍の綱

敵味方供
禁神

西洋諸國
と秀吉

秀吉と吉
利支丹

Gaspard
Coleho

伴天連の
追放

て國民は疲弊の極度に陥つた。朝鮮を荒したのは我軍よりも明軍及び國內の無頼の徒の方が甚しかつたが、彼國では其罪を皆我國に歸し、今後永く我國を怨み、これに反して明には再生の恩を感じて最忠誠を致した。又この役に於て明軍と反對に我軍紀の嚴肅であつたことは、秀吉が何等内地と區別して考へなかつたためでもあるが、島津義弘が慶長四年高野山に「爲高麗國在陣之間、敵味方闕死軍兵、皆令入佛道」に碑を建て、南浦文之をして文を草してこれを弔はしめたと共に特記すべきであらう。

秀吉は支那に對して傳統的な卑屈な傾向に反し、却つて彼を威服せんとしたが、この自主的態度は西洋諸國に對しても同様であつて、このため吉利支丹を禁止し、彼等に入貢を促すに至つた。

秀吉もその初は寧吉利支丹を優遇し、大坂に於ても會堂學林の設立を許し、支部長コエルホを引見して、布教の自由と耶蘇會士の家や會堂には、兵士の宿營や一切課税免除の特權をも與へた程であつた。されば小西行長教名ドン・アウグスチンや、黒田孝高水如の如き有力な大名や、秀吉の侍醫曲瀨道三等も洗禮を受け、吉利支丹の勢は從來見ない程盛になつた。然るに秀吉は九州征伐の歸途天正十五年六月箱崎の陣營に於てコエルホに對し、吉利支丹の徒が、寺社を破壊し、僧侶を迫害し、牛を食ひ、ポルトガル人が我國民を誘拐して奴隸とするを詰り、「日本は神國たる處、さりしたん國より邪法を授候太以不可

長崎の沒
收

禁教の原
因

然候事」とて、「日域之佛法を相破事曲事候條、伴天連儀日本之地にはおかせられ間敷候間、今日より廿日間に用意仕可歸國候」と松浦家文書と、伴天連の追放令を發布し、同時に吉利支丹大名として最有名であつた高山右近忠房を改易した。これに次いで從來耶蘇會の手にあつた長崎を沒收し、直轄地として寺澤廣高を奉行とし、京大坂等の吉利支丹寺院をも破壊せしめた。然し二十日の期限は實行不能のため、彼等の願により今後出帆する最初のポルトガル船によることを許し、米一萬石を與へてその費用に宛てしめた。

かくの如く吉利支丹の禁令を見たのは、彼等が神佛を罵り、社寺を破壊し、ために各地に騒亂を惹起し、社會の安寧を害したこと、「日本仁を數百、男女によらず黒船へ買取、手足に鐵の鎖りを付け、舟底へ追入、地獄の苛責にもすぐれ、其上牛馬を買取、生ながら皮を剥ぎ、坊主も弟子も手づから食し、親子兄弟も無禮儀只今世より畜生道有様、目前之様に相聞候」と九州御動座記と言へる如く、彼等の所行が人倫を破壊すると思はれたこと、及び既に彼等が長崎を寺領とせるに徴しても、やがて政治上にも勢力を及ぼし、國家の統一を妨げる惧のあつたこと等であらう。而してこれを九州役後に發布したのは、九州が彼等の巢窟だけに、彼等をして九州平定を妨げず、寧助勢せしむるためであつたと共に、九州に來つて親しくその弊害の甚しきを知つた結果でもある。但貿易商人は勿論、佛法の妨をし

ないものは、何人と雖も自由往來を認めて居る。

印度副王
使節の來

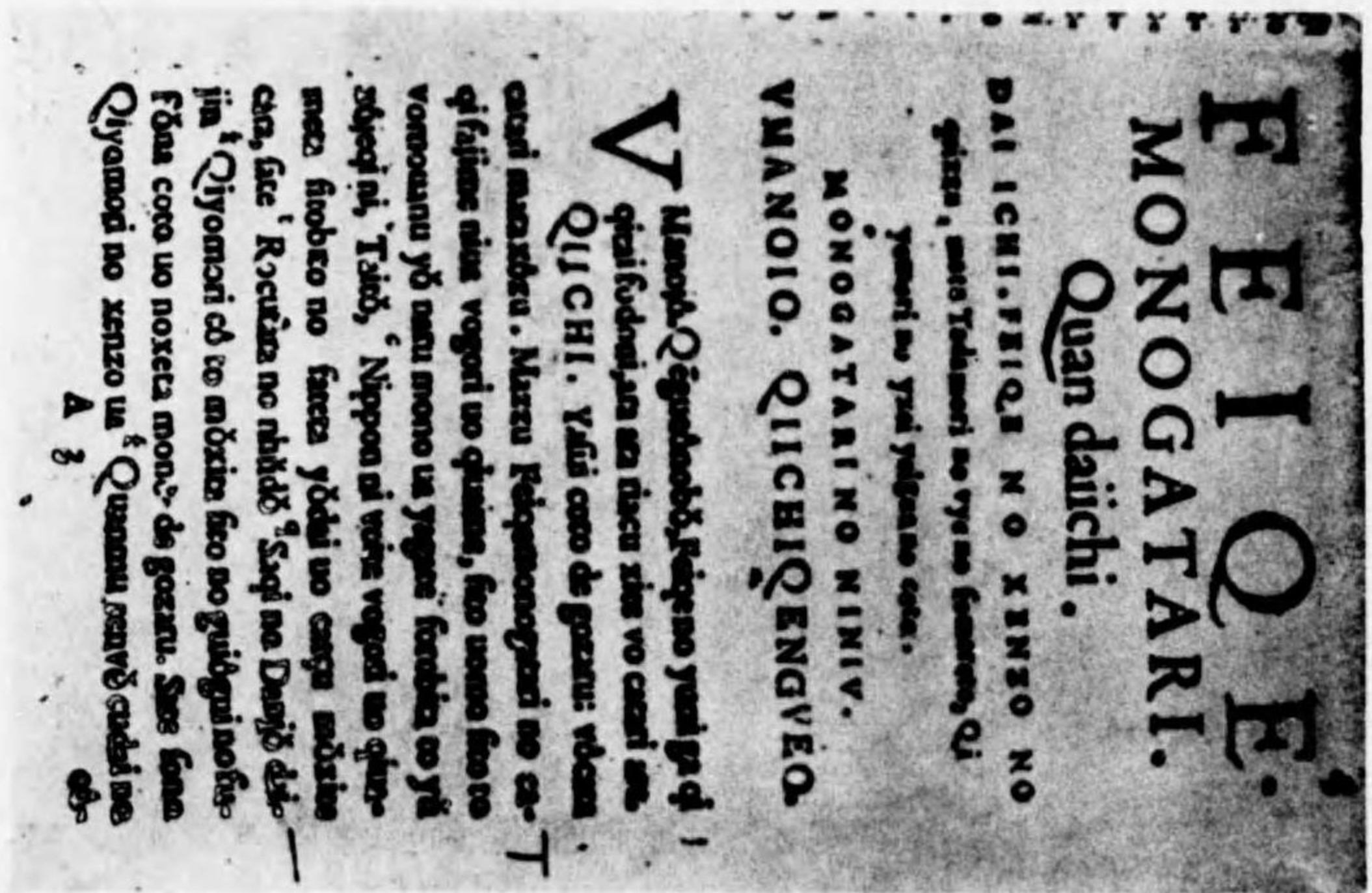
使節の謁
見

秀吉の印
度勳降

學林と吉
利支丹版
Esopo
Fables

この後も伴天連等は殆皆吉利支丹大名の領内に潜伏して居たが、天正十八年には巡察伴天連ワリニヤニが、印度副王^{ポルトガルの領印度總督}の使として、前にローマに赴いた大友・有馬・大村三侯の使節を伴つて來朝した。彼は天正十五年に日本に使せんとした際、使節の一行が印度に着いたため、これを伴ふこととなり、十六年ゴアを發したが、マカオで伴天連追放のを知り、秀吉の入國許可を待つて後渡來したのである。彼等は十九年閏正月聚樂第で秀吉に謁して副王の書翰音物を捧げ、優待を受けたが、この書狀は秀吉の功業を頌し、伴天連の保護を謝したものであつた。この書狀のポルトガル文の原本は京都妙法院に現存し、羊皮紙に書かれ金泥紅紫の細畫を以て飾られたものである。然るに秀吉はこれに對する返簡に於て、己が功業と世界的雄圖を述べ、「雖^レ然一有^下欲^レ治^三大明國^二之志^一、不日泛^三樓船^二到^三中華^一者、如^レ指^レ掌矣、以^三其便路^二可^レ赴^三其地^一、何作^三遠近異同之隔^二乎^一」としてその入貢を促し、更に我國の神國で伴天連の邪法を許さず、重ねて來つて化導をなせば族滅すべく、唯商人の往來はこれを許す旨を告げた。京都、富岡氏文書

ワリニヤニは後この返書を幾らか緩和して貰つて、文祿元年我國を去つたが、九州に於ける吉利支丹は依然として衰へず、有馬・加津佐及び天草等には學林も設けられて居り、ワリニヤニが齎らした印刷機で活版印刷さへ行はれた。平家物語^{文祿元年天草版}・伊曾保物語^{イソボのフアララス(喩)等のローマ字本、落葉}



本書題して「日本の言葉とイストリヤ(歴史)を習ひ知らんと欲する人のために世語に和らげたる平家の物語」と言ひ、西暦千五百九十二年即文祿元年天草學林の出版である。本文の初に「物語の人数、有馬之允、喜二檢校」とある如く、有馬之允の間に對して喜二檢校が平家の物語を語る形式になつて居る。

第十八、天草吉利支丹版平家物語(ロンドン、大英博物館藏)

秀吉の呂
宋招致

Gaspard
Faranda

使第一
回遣

Gomez Perez de
Marinas
Dominican monk
Juan Cobos

Franciscan
monk
Pierre
Baptiste

使第二
回遣

集日本語辭書
慶長三年版以下の國字本等、その數は頗る多かつたらしい。
かくの如くその初は秀吉の禁教令は頗る寛大であつたが、呂宋との關係から漸く嚴烈に向つた。呂宋はヒイリツピン群島の一で、マゼランがアメリカを經、太平洋に出て發見した所で、西曆一五二一年
大永元年永祿八年西曆一五八五年以來イスパニヤの植民地であつた。呂宋の貿易船は天正十二年に平戸へ來たのが初めてあり、我國からこの地に貿易に赴くものも少くなかつたが、その一人である原田喜右衛門の手代原田孫七郎カスバル・ハはその防備の薄弱を説いて、秀吉に招降を勸めた。茲に於て秀吉は天正十九年九月彼が誕生の奇瑞と諸國の來貢を告げ、時日移さず入貢しなければ直に征伐すべき旨の書狀を持たしめて、孫七郎を呂宋に遣した。呂宋の大守マリニアスは翌文祿元年この書に接したが、我國と事を構へるを不利として、ドミニコ派の僧コーボを我國に遣し、イスパニヤの國威の盛大を説き秀吉の威名の高さを頌し、兩大國の和交成らば萬代の盛事であらうと言ひ、唯孫七郎が一人商船に便乘して來たのは大國の使節と受取れないから、その眞偽を疑ひ使を送る旨を述べしめた。コーボは歸途臺灣の近海で難船して土人に殺されたが、秀吉は更に文祿二年原田喜右衛門を使者として呂宋に遣し、年々入貢すれば出兵を見合す旨を告げしめた。マリニヤスは再びフランシスコ派の僧ビエル・バプチストを送つて通商條約の締結に當たらしめたが、秀吉は彼等に呂宋が我國に従ひ、太守又はその子の入謁すべ

きことを命じた。パプチストはこれを使命の外であるから、更に使を出して訓令を求むるを要する旨を答へ、その間人質として我國に滞在した。然も彼は大胆にもこの間に京都に會堂を設け、同伴した

三僧の外新に三僧を召寄せて布教に従事し、このため吉利支丹は再び活氣を呈することとなつた。

然るに慶長元年九月呂宋からノビスパニヤ新イスパニヤ 即メキシコへ向つたイスパニヤ船サン・フェリプ號が土

佐の浦戸へ漂着した際、秀吉は増田長盛をやつて積荷を沒收せしめたが、船員は長盛にイスパニヤが

ポルトガルを併せ、東西印度を領することを述べ、その方法は先づ僧をやつて吉利支丹を弘め、その

信徒と應じて國を奪ふから必ず成功すると語つた。秀吉はこれを聞いて大に怒り、パプチストを初め

フランシスコ派の僧侶及び信徒二十六名を捕へて、長崎で磔にして、我國に於ける最初の吉利支丹の

殉教者たらしめた。猶これと共に他派の伴天連も長崎に集めて退去を命じ、ために天草の學林の如き

も破壊せられた。

臺灣の招致

吉利支丹の殉教者

San Felipe
Nova Hispania

件
エリプ
事

この外高山國高砂ともいふ。即臺灣に對しても、原田喜右衛門を呂宋に遣す際、例の日輪の奇瑞を説き、萬物を生長せしむるも、枯渴せしむるも共に日であるとして、來朝を促した書翰を送つたが、當時島中の統一がなかつたから、そのまゝ持歸つたらしい。原本今前田侯爵家に傳はる。

これを要するに秀吉の南洋經略も、大陸經營と同じく成功を見るに至らなかつたが、その世界を吞

吐する彼の雄圖と自主的態度が、國民に及ぼした精神的影響は決して無視することが出来ない。

大明與日本和平相定條々

一 天地不違問者、不可有相違_レ於_二契約_一者、大明之帝王之姬宮、日本帝王之爲_レ后可_レ被_レ相渡_一之由、可_レ申候事、

一 勘合之儀、可_レ申談_一事、

一 大明日本之武官衆、誓紙取替候事、

一 朝鮮國之儀、先勢能越、悉申付候條、此上は、經_二年月_一民百性_(姓)以下靜謐之様に彌人數を遣可_レ被_レ仰付_一候、今度大明國へ被_レ仰出_一候條數於_二相究_一者、朝鮮國王之儀、雖

不_レ相届_一候、大明へめいじさせられ、又は最前一禮をも申上候之條、朝鮮之都に付

て四ヶ道可_レ被_レ遣事、

一 右四ヶ道被_レ成_二御宥免_一之上者、爲_二人質_一王子一人、並家老之者人質差副可_レ被_レ相渡_一事、

一 最前生捕候王子二人之儀、下々之者にあらず候條、無事に相構、四人として請取、

唯今遊擊に相添、朝鮮國へ可_レ返事、

一 朝鮮國家老之者、永代相違有間敷との誓紙之事、

右之趣、大明之勅使に可_レ申渡_一者也、

正誤

| 頁 | 行 | 誤 | 正 |
|-----|-----|--------|--------|
| 一〇八 | 一四 | 紫香樂 | 近江の紫香樂 |
| 一一九 | 三一四 | 近江の紫香樂 | 紫香樂 |
| 一二一 | 三 | 道致 | 道慈 |
| 三〇七 | 四一七 | 第十九圖 | 第十八圖 |
| 同 | 四一七 | 第二十圖 | 第十九圖 |
| 三〇八 | 四一六 | 第二十一圖 | 第二十圖 |
| 三一〇 | 八 | 靈驗記 | 驗記 |
| 三二四 | 四一七 | 第二十二圖 | 第二十一圖 |
| 四二九 | 二 | 吉川什書 | 平利家文書 |

綜合日本史概説 卷上

大正十五年四月二十日印刷
大正十五年五月七日發行



著者 栗田元次
發行者 中村時之助
印刷者 柴山則常
印刷所 聯合書林會
東京市牛込區甲良町丹九番地
東京市本郷區駒込林町一七二

發行所 東京市牛込區市ヶ谷 甲良町卅九番地 中文館書店
電話 牛込三三二五番 神田一〇三二番 振替東京三八四二七番

定價 金三圓八錢

| | | | | |
|---------------------------------------|---------------------------------|---|--|--|
| 文學士 上野陽一先生 | 東京帝國大學講師 文部省囑託文學士 青木誠四郎先生 | 廣島高等師範學校教授 文學博士 久保良英先生 | 廣島高等師範學校教授 文學博士 久保良英先生 | 廣島高等師範學校教授 文學博士 久保良英先生 |
| 增訂學校精神検査法指針 | 心理學序說備考 | 兒童研究所紀要 3 1 2 4 2 | 兒童研究所紀要 7 5 6 | 兒童研究所紀要 七卷 |
| 版一十 | 刊新 | 版四 | 版再 | 版再 |
| 送定價紙菊 料價金繪判全 金貳圓七拾五 拾八錢十頁 | 非紙菊 費數判半 三截全 十二一 頁冊 | 送定價紙合大 料價金繪輯判 金九圓二拾百 五拾四錢百頁 | 送定價紙合大 料價金繪輯判 金五拾圓二拾 五拾四錢百頁 | 送定價紙合大 料價金繪輯判 金四圓二拾百 五拾四錢百頁 |
| 本書は兒童研究法指針の精神の發達の研究の能力の程度の診断の方法を明かにす。 | 本書は兒童心理學序說の備考である該書御採用の方には無代進呈す。 | 學術界教育界等しく眞實なる資格なき研究を激稱する依て今回四卷分合輯して此處に刊す。 | 本研究所の紀要を公刊する事既に七回今其合輯なる本書の斯や重きをなすや敢て必讀研究を! | 現今盛んに行はれつゝあるメンタルテストに十有餘種の歴史、發達の現況を敘しその實際の梗概を批判研究したる近來の壓巻である。 |

| | | | | |
|--|---|--|---|-------------------------------|
| 廣島高等師範學校教授 文學博士 久保良英先生 | 廣島高等師範學校教授 文學博士 久保良英先生 | 東京高等師範學校教授 文學博士 檜崎淺太郎先生 | 東京高等師範學校教授 文學博士 檜崎淺太郎先生 | 東京高等師範學校教授 文學博士 檜崎淺太郎先生 |
| 智能査定用具 | 精神分析法 増訂三版 | 一般素質検査法の試み | 選拔法概論 | 一般素質検査用紙 |
| 揃一 | 版三 | 版五 | 刊新 | 版卅 |
| 送定價型ホ 料價金盤一 金拾圓參 八錢圓紙 | 送定價紙四 料價金判全 金參圓五拾 八錢餘頁 | 送定價紙菊 料價金繪判全 金貳圓七拾 七錢百頁 | 送定價紙菊 料價金繪判全 金貳圓七拾 七錢百頁 | 送定價紙大 料價金判全 金拾貳圓 貳錢 |
| 久保先生の改訂せる智能査定用具は我が學界の誇である。今その用を製作して益々新法應用の便利を計ることになつた。 | 現下教育界の大問題「性」の教育とその取扱ひたる兒童研究の基礎學上の一大要書である。 | 最近小學校生徒につき「素質検査標準」を施行し、検査結果の整理を詳説し、且つ批判を下し尙素質検査用紙を添へてある。 | 過去中等學校並に專門學校に於ける選拔試験の結果に關する心理學的的研究及び調査の概論を試み、一般素質検査法の試みの姉妹篇である。 | 小學校、中學校に於ける精神検査用として實費を以て提供す。 |

| | | | | |
|--|---|---|---|--|
| <p>東京高等師範學校教授 文學博士 檜崎 淺太郎 先生</p> | <p>東京帝國大學講師 文部省囑託文學士 青木 誠四郎 先生</p> | <p>東京女子高等師範學校前講師 馬瀨 艶子 先生</p> | <p>京城帝國大學 豫科教授 福富 一郎 先生</p> | <p>文學士 上野 陽一 先生</p> |
| <p>幼兒素質検査用紙</p> | <p>兒童心理學序說</p> | <p>幼兒の想像生活と其教育</p> | <p>メンタルテストの原理</p> | <p>兒童心理學精義 (訂正版)</p> |
| <p>版 卅 送實紙菊 料費數判 金金二全 貳六四一 拾四頁 錢錢</p> | <p>刊 新 送定插紙菊 料價數判 金金二全 拾四三十五 錢錢十頁 錢錢</p> | <p>版 再 送定插紙菊 料價數判 金金二全 拾四三十五 錢錢十頁 錢錢</p> | <p>刊 新 送定插紙菊 料價數判 金金二全 拾四三十五 錢錢十頁 錢錢</p> | <p>版 十 送定插紙菊 料價數判 金金二全 拾四三十五 錢錢十頁 錢錢</p> |
| <p>新入學兒童學的編制に して一般素質検査用紙 を以て提供す。</p> | <p>實例を以て懇切なる見 解を加へたる兒童研究の 明瞭な初めたる兒童研究 の緒業を得るであらう。</p> | <p>幼兒の精神生活を虚心 に凝視し幼兒の世界の展 開を明かにしたるもので ありませぬ。</p> | <p>理論實際に於いてなせ る眞摯なる研究の成果 である。且、基礎的科學 の提本親しむる目的を 有する。其の科學的界 稀解の良書なり。</p> | <p>本書は兒童青年の精神 を正しく理解するの爲 に、その教育の展開に 本質を明かにする。新 設根を以て、科學的建 設根を以て、科學的建</p> |
| <p>東京高等師範學校教授 文學博士 檜崎 淺太郎 先生</p> | <p>東京帝國大學教授 文學博士 吉田 靜致 先生</p> | <p>東京高等師範學校教授 萩原 擴 先生</p> | <p>東京高等師範學校教授 巨理 章三郎 先生 長崎 惣一 先生</p> | <p>文學士 土田 杏村 先生</p> |
| <p>兒童精神力學的研究</p> | <p>同圓異 中心主義 道德生活</p> | <p>現代社會思想倫理的批判</p> | <p>自 然 觀 家 論</p> | <p>文化哲學入門</p> |
| <p>版 三 送實紙菊 料費數判 金金二全 貳六四一 拾四頁 錢錢</p> | <p>版 五 送定插紙菊 料價數判 金金二全 拾四三十五 錢錢十頁 錢錢</p> | <p>版 再 送定插紙菊 料價數判 金金二全 拾四三十五 錢錢十頁 錢錢</p> | <p>版 再 送定插紙菊 料價數判 金金二全 拾四三十五 錢錢十頁 錢錢</p> | <p>版 三 送定插紙菊 料價數判 金金二全 拾四三十五 錢錢十頁 錢錢</p> |
| <p>特種即普通主義若くは 同圓異中心主義に基 て生活せざれば人世は 終に破滅の運命に出達 はざるを得ないと云ふ 精神生活の源を明にす。</p> | <p>倫理的社會思想に基 て現代社會思想及び現 實運動の考察から綜合 的批判的考察を示す。</p> | <p>國家の起原を知る事 は國民生活の義務であ る。以て生活の注意と 政治學との關係を詳説 する。</p> | <p>素人の初めて哲學を 教ふ時の手引として、 必要は一言をなす。</p> | <p>文化哲學入門</p> |

| | | | | | | | | | |
|---|---|--|---|--|---|---|--|--|---|
| <p>文學士 寺田精一先生</p> | <p>帝大醫學部助教授 醫學博士 杉田直樹先生</p> | <p>醫學博士 三田谷啓先生</p> | <p>東京高等師範學校教授 巨理章三郎先生</p> | <p>東京高等師範學校教授 巨理章三郎先生</p> | <p>文學士 土田杏村先生</p> | <p>廣島高等師範學校教授 鈴木敏也先生</p> | <p>廣島高等師範學校教授 鈴木敏也先生</p> | <p>東京天文畫技手 古川龍城先生</p> | <p>慶應醫科大學教室 宮崎三郎先生</p> |
| <p>兒童の惡癖</p> | <p>低能兒と不良兒の醫學的考察</p> | <p>學童保健</p> | <p>國民精神作興詔書衍義</p> | <p>日本武德論</p> | <p>教育の革命時代</p> | <p>明治文學選集</p> | <p>江戸文學選集</p> | <p>科學宇宙之構造</p> | <p>蛙を教材としたる人體生理解剖實驗室</p> |
| <p>三版</p> | <p>再版</p> | <p>再版</p> | <p>五版</p> | <p>再版</p> | <p>再版</p> | <p>四版</p> | <p>三版</p> | <p>再版</p> | <p>再版</p> |
| <p>四六判全一冊洋綴 紙數約五百頁 定價金參圓五拾錢 送料金拾八錢</p> | <p>四六判全一冊洋綴 紙數約六百餘頁 定價金參圓五拾錢 送料金拾八錢</p> | <p>菊判全一冊洋綴 紙數六百餘頁 定價金貳拾七錢 送料金拾八錢</p> | <p>菊判全一冊洋綴 紙數四百餘頁 定價金參圓五拾錢 送料金拾八錢</p> | <p>四六判全一冊洋綴 紙數二百頁 定價金貳圓 送料金拾八錢</p> | <p>四六判全一冊洋綴 紙數四百五十頁 定價金參圓八拾錢 送料金拾八錢</p> | <p>四六判全一冊洋綴 紙數三百頁 定價金貳圓參拾錢 送料金拾八錢</p> | <p>四六判全一冊洋綴 紙數約三百五十頁 定價金參圓參拾錢 送料金拾八錢</p> | <p>菊判全一冊洋綴 紙數三百頁 定價金參圓參拾錢 送料金拾八錢</p> | <p>四六判全一冊洋綴 紙數四百五十頁 定價金參圓貳拾錢 送料金拾八錢</p> |
| <p>兒童の惡癖の性質原因の研究的簡明な説述の心的學的簡明な説述の通俗的簡明な説述の實際的簡明な説述の</p> | <p>低能兒と不良兒の醫學的考察の醫學的考察の醫學的考察の醫學的考察の醫學的考察の</p> | <p>學童保健の學童保健の學童保健の學童保健の學童保健の</p> | <p>國民精神作興詔書衍義の國民精神作興詔書衍義の國民精神作興詔書衍義の國民精神作興詔書衍義の</p> | <p>日本武德論の日本武德論の日本武德論の日本武德論の日本武德論の</p> | <p>教育の革命時代の教育の革命時代の教育の革命時代の教育の革命時代の教育の革命時代の</p> | <p>明治文學選集の明治文學選集の明治文學選集の明治文學選集の明治文學選集の</p> | <p>江戸文學選集の江戸文學選集の江戸文學選集の江戸文學選集の江戸文學選集の</p> | <p>科學宇宙之構造の科學宇宙之構造の科學宇宙之構造の科學宇宙之構造の科學宇宙之構造の</p> | <p>蛙を教材としたる人體生理解剖實驗室的蛙を教材としたる人體生理解剖實驗室的蛙を教材としたる人體生理解剖實驗室的</p> |

| | | | | |
|--|---|--|--|--|
| 東京女子美術學校教授 山本キク先生 | 奈良女高師教諭 横井曹二先生共著 小島貞三先生共著 | 帝國美術院會員 東京美術學校教授 岡田二郎助先生共著 丹羽禮介先生共著 | 帝國美術院會員 東京美術學校教授 岡田二郎助先生共著 丹羽禮介先生共著 | 女子學習院教授 黒田芳生先生共著 上甲二郎先生共著 |
| 訂増 新撰裁縫教授法 | 兒童中心 新手工學習カード | 學校家庭 教育圖按畫集と其描き方 | 學校家庭 クレヨン畫集と其描き方 | 兒童の描いたクレヨン畫 鑑賞畫集と其批判 |
| 四判 紙數全二冊洋綴 送定價金貳圓貳拾錢 送料金拾八錢 | 大判 カード式全一冊 送定價金貳圓五拾錢 送料金拾八錢 | 新刊 菊判全一冊洋綴 送定價金貳圓八拾錢 送料金拾八錢 | 再版 菊判全一冊洋綴 送定價金貳圓八拾錢 送料金拾八錢 | 新刊 大判原色畫十二冊 送定價金貳圓五拾錢 送料金拾八錢 |
| 完全なる裁縫教科書と して技術と學理を指導 するに 多量の挿繪を加ふるに 敢て讀者諸姉の精讀を 推奨す | 兒童が自己の生活から 現習の材料を蒐集し表 現科學的表現し其藝術 的科學的表現を創する 近來の快者である。 | 一般圖案特に教育的圖 案に關する概念と其描 法に關する極彩色鮮明な 石版刷數百人彩色易 なる程に如何にも容易 に其道程に入らしむ。 | 本書は指導者に對する 希望の順序と練習を敘し 一本の線より段々と繪 方なる迄の順序を描き 畫數百葉を以て滿せり。 | 論理的に最も低度の個 性及び此處に科學の四に 及び此處に科學の四に 區分し各々につきこの 哲學的意義を論證せし 物斯界に名譽噴々たり。 |

| | | | |
|---|--|--|---|
| 東京高師教授 巨理先生主編 斯の道學會編幹 | 文學士 土田杏村先生 | 文學士 青木誠四郎先生 | 東京高師講師 文部省前囑託 芝野六助先生 |
| 輓近學問論 | 個性と教育 | 教育學紀要 第一卷 | 保育學校實際研究 |
| 新刊 四六判全二冊洋綴 送定價金貳圓五拾錢 送料金拾八錢 | 新刊 菊判全一冊洋綴 送定價金貳圓五拾錢 送料金拾八錢 | 新刊 菊判全一冊洋綴 送定價金貳圓八拾錢 送料金拾八錢 | 新刊 菊判全一冊洋綴 送定價金貳圓五拾錢 送料金拾八錢 |
| 凡ての根本基礎は徹底 した個性の研究である 本書は斯道學會が各方 面の大家を煩し公にし た近來の大論文である。 | 既に發表になつたもの と未だにないものとの 文を輯録し以て他學者 の研究の資とし其重 界の記録を残り其重 學にの者の努力を明示す。 | 最近ニユーヨークに於 て實際を實驗研究せる 結果であつて幼子保 姆が必ず一讀を要すべ きは本書なり。 | 教授の方法を懇切に説 き且つ文章の麗下に説 きの修辭に文章の麗下 より詳細に文章の麗下 併せて詳細に文章の麗 教授法を説くものなり。 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------------------------|--|--|---|-------------------|-------------------------|--|---|---------------------|---|---|--|---------------------|-------------------|---|---|---------------------|-------------------|--|---|
| 東京高師講師 文部省前囑託 芝野六助先生 | 尋常小學 國語讀本批判的解釋 第一學年用 | 再版 菊判全一冊洋綴 紙數二百八十頁 定價金貳圓七拾錢 送料金拾八錢 | 小學讀本編纂者である著者が自ら解剖刀を執つてその批判的解釋をし得る努力を随所に示したるなり | 東京女高師訓導 土屋敏雄先生 | 最新國語便覽 | 再版 三判全一冊洋綴 紙數約二百頁 定價金貳圓貳拾錢 送料金八錢 | 國語一切に涉り兒童の最も誤謬多きものに就ての資料を調査研究に就せられたる國語教育に必須の要書である | 東京高師教授 巨理章三郎先生主幹 | 修身研究 國民精神作興詔書研究 | 新刊 菊判全一冊洋綴 紙數約二百頁 定價金壹圓 送料金參錢 | 國民精神の漸く輕佻浮華に流れんとする時に當り本書は詔書採取の上に當り注意深く研究し編輯しその他参考資料を滿載し編輯す | 東京高師教授 巨理章三郎先生主幹 | 修身研究 兒童の經濟生活研究 | 新刊 菊判全一冊洋綴 紙數二百頁 定價金九拾錢 送料金參錢 | 國民の經濟生活を正當に指導し訓練することには最も重要なことで、是れは兒童の經濟生活から著せられなければならない | 東京高師教授 巨理章三郎先生主幹 | 修身研究 東京大震災教育資料 | 新刊 菊判全一冊洋綴 紙數二百五十頁 定價金壹圓 送料金參錢 | 大震災は吾人類に何等の對し專門學者の卓説に如何であるかの批評研究を滿載す |
| 大正十三年六月改正 中文館編輯 | 中學程度入學準備 國語科、算術科 豫習選題 地歴、理科 テスト科 | 十五版 各種一冊 各冊金拾八錢 送料金四錢宛 | 本書は學校に於て兒童に與へられたる體裁印刷の代用として最も精練せられたる兒童學習用本位に編纂せるもの也 | 中等學校 受驗準備研究會編 | 中等程度入學準備 綴り方模範文と其作り方 | 廿版 四六判全一冊洋綴 紙數二百五十頁 定價金八拾錢 送料金四錢 | 「模範文」は全く兒童の心血を注げる苦心の作、その作り方は編纂者がよく分る様にして指導したるもので、一指 | 中等學校 受驗準備研究會編 | 中等程度入學準備(大正十三年増訂) 模擬試驗五十回 國語、算術の部 | 百版 菊判袋入各一冊 各冊金拾八錢 送料金四錢宛 | 問題の基本國定教科書各種學校の實際に於ては、各種學校の系統的に配列したる絶好の入り學準備書は是れなり | 理科教育研究會編 | 少年理科園 天の巻 | 再版 四六判全一冊洋綴 紙數約百六十頁 定價金約八拾錢 送料金四錢 | 林伯爵を會長とする理科教育研究會たる兒童理科教育の公衆化に努力し、其なるもの數篇を公に刊したるものである | 文部省囑託 川本宇之介先生 | 郡村青年 大正新讀本 | 改版 菊判全五冊和綴 紙數各百七十頁 定價金各六拾五錢 送料金六錢宛 | 郡村青年に適應するに努め、其の興味を喚起せしむる自習の編纂に、最も注意を著したる所 |

| | | | | |
|--------------------------|---|-------------|---|--|
| <p>文部省囑託 川本宇之介先生</p> | <p>都市青年 實業新讀本 前期卷一、二</p> | <p>改 版</p> | <p>菊判全二冊和綴 紙數各百七十餘 插繪各六拾錢 定價各金六錢宛 送料各金四錢宛</p> | <p>商工的都市青年に適應する實教科書にして、徒の興味を喚起するに努め、興味多き讀ものに課外として採り。</p> |
| <p>文部省囑託 川本宇之介先生</p> | <p>實業青年 大正修身訓 前期卷一、二</p> | <p>改 版</p> | <p>菊判全二冊和綴 紙數百二十頁 插繪各五拾錢 定價各金四錢宛 送料各金四錢宛</p> | <p>群書と選を異にし、兒童の實際生活に觸れた現代模範修身教科書、敢て採用を乞ふ。</p> |
| <p>月刊雜誌</p> | <p>修身研究</p> | <p>一日發行</p> | <p>菊判 每月一冊 定價 金五拾錢 送料 金壹錢五厘</p> | <p>本校は東京高等師範學校教授、東京三郡道學會の主宰にして、斯界唯一の修身研究機關なり。</p> |

554
28

終